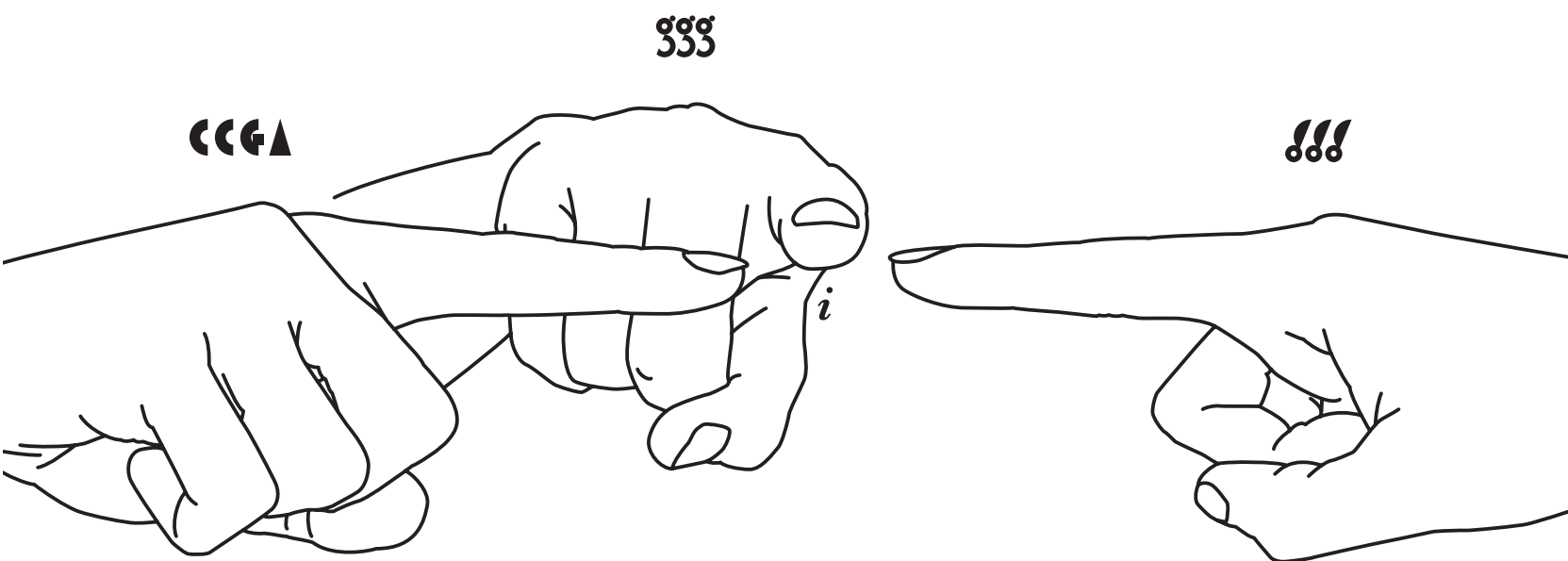
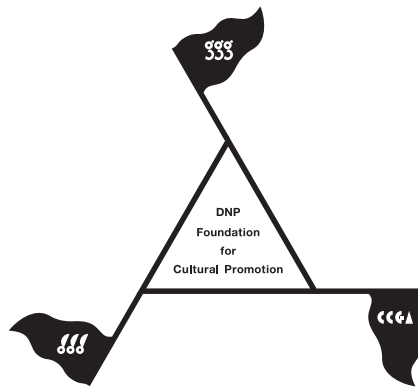


Graphic Art & Design Annual 13-14



*i*の上に人差し指を置いてください。
Put your index finger on *i*

Graphic Art & Design Annual 13-14



[表紙デザイン]

このアニュアルを見る人が、単に眺めるだけでなく、
自らの身体を関与させて初めて成立するコミュニケーション・デザインを試みた。
表紙には、ggg、ddd、CCGAと記された三人の手が謎めいた所作を行っている。
この人たちの意図するところは何なのだろうか。
我々の理解を超えた背景がありそうである。
しかし、一旦、あなたが指示のとおり指を置くと、
あなたも見事にこの三人と同じグループになってしまうのである。
紙というメディアに印刷されたグラフィック(図版)に自分の指を置き、
それごと鑑賞させたら、どんなことが起こるだろうかということを解明するために開発した
表現のひとつである。

佐藤 雅彦

[Cover Design]

In designing the cover, rather than making something for the reader merely to gaze upon, I tried to create communication design that would be complete only when the reader becomes personally involved in it.
The design consists of three hands – labeled ggg, ddd and CCGA – performing a cryptic gesture. What is their intention? We are unlikely to ever know.
But then when, as instructed, you place your index finger where the *i* is, you yourself instantly become a member of this enigmatic group.
This is an example I developed to show what happens – and make you observe the completed result – when you place your finger on a graphic image printed on paper.
Masahiko Sato

Graphic Art & Design Annual 13-14 ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion

DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,

Chuo-ku, Tokyo 104-0061

Phone: +81 3 5568 8224

Planning & Editing: DNP Foundation for Cultural Promotion

Art Direction: Shin Matsunaga

Design: Shinjiro Matsunaga, Motoko Ishida

Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg),

Ryota Sakai, Miki Takashima, Koji Mori (ggg gallery talk)

Translation: Rei Muroji

Cooperation: Shoji Usuda, Koichi Kawajiri

Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

Contents

目次

はじめに	5
北島 義俊 (公益財団法人DNP文化振興財団理事長)	

序論:

日本美術はデザインをインスパイアする	6
山下 裕二 (美術史家・明治学院大学教授)	

1 展示事業	13
ギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) 2013-2014	14
ddd ギャラリー 2013-2014	40
CCGA 現代グラフィックアートセンター 2013-2014	50

2 教育・普及事業	61
ggg, ddd ギャラリートーク	62
CCGA 版画工房ワークショップ	78
出版活動 2013-2014	79

3 アーカイブ事業	81
DNP グラフィックデザイン・アーカイブ	82

4 国際交流事業	85
時を超えた旅	86
カリ・ピippo (グラフィックデザイナー・AGI/フィンランド)	
AGI 総会 ロンドン 2013	88
ddd 企画展 香港 巡回	
「Type Trip – The New Asian Graphic Design Exhibition」	89
「TDC 展 2013」巡回展 中国・深圳 The OCT Art & Design Gallery	89
日本・スイス 国交樹立 150 周年記念	
「日本のポスター展 – 咲き誇る美と潔さ」	90

5 研究助成事業	93
2013-2014 年度 助成実績	94

展覧会概要 2013-2014	95
展覧会一覧 1986-2014	100
ギャラリー概要	108

Foreword	5
Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)	

Introduction:

Japanese Art Inspires Design	6
Yuji Yamashita (Art Historian, Professor at Meiji Gakuin University)	

1 Exhibitions	13
ginza graphic gallery (ggg) 2013-2014	14
ddd gallery 2013-2014	40
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2013-2014	50

2 Education & Enlightenment	61
ggg, ddd Gallery Talk	62
CCGA Print Studio Workshops	78
Publications 2013-2014	79

3 Archiving	81
DNP Graphic Design Archives	82

4 International Exchange	85
Journey through the time	86
Kari Piippo (Graphic designer, AGI/Finland)	
AGI Congress London 2013	88
“Type Trip – The New Asian Graphic Design Exhibition” at K11 art space	89
“Tokyo TDC 2013” Traveling Exhibition	
at The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen, China	89
“Japanese Poster Artists – Cherry Blossom and Asceticism”	
at Museum für Gestaltung Zürich	90

5 Research Support	93
2013-2014 Financial Support Activities	94

Review of ggg, ddd and CCGA 2013-2014	95
List of Exhibitions 1986-2014	100
Galleries' General Information	108

Foreword

はじめに

2013年度のギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) では、12回の企画展、dddギャラリーでは6回の企画展を開催しました。

なかでも、大宮エリー展、PARTY展、「指を置く」展は、斬新な手法でグラフィックデザインの領域を上げた、大きな反響がありました。また、福島治展では、「ソーシャルデザイン」をテーマに、デザインにおける社会貢献の可能性をご紹介することができました。

ギャラリートークは、gggで24回、dddギャラリーで6回実施しました。

現代グラフィックアートセンター (CCGA) では、3回の企画展と特別展を1回開催しました。昨年に引き続き、版画工房でのワークショップの定期開催や工房施設の一般開放を開始して、地元の人たちへの理解を深めました。

国際交流事業としては、今年2月、日本・スイス国交樹立150周年記念イベントのひとつとして、チューリッヒ造形美術館とDNP文化振興財団は、「日本のポスター展－咲き誇る美と潔さ」を開催しました。会場では、私どもの財団から寄贈した田中一光氏、永井一正氏、福田繁雄氏のポスターも多数展示されました。

なお、dddギャラリーは、1991年、大阪に開設以来、数々の展覧会やレクチャーを行ってまいりましたが、今秋の10月、京都の太秦に移転することとなりました。また、CCGAは、昨年12月に福島県教育委員会より「登録博物館」の認定を受けました。

これを機に、さらなる活動の充実を推進して参りたいと存じます。今後とも、皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

During the 2013 fiscal period 12 exhibitions were mounted at ginza graphic gallery (ggg) in Tokyo and six at ddd gallery (ddd) in Osaka. Among those drawing the greatest response were the “Ellie Omiya Exhibition,” the “PARTY Not There. Exhibition” and “Putting Finger,” an exhibition of works by Masahiko Sato and Tatsuya Saito, all of which won kudos for having expanded the parameters of graphic design in exciting new ways. The exhibition of works by Osamu Fukushima, which addressed the topic of “social design,” introduced possibilities for making social contributions through design. Gallery talks were held on 24 occasions at ggg and six at ddd.

The Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) in Fukushima Prefecture mounted three regular exhibitions and one special exhibition during the year. Workshops were held regularly at the CCGA print studio, continuing a program launched in 2012, and the studio was also newly opened to the general public. Together these undertakings served to deepen understanding by local citizens.

In February 2014, as an event commemorating the 150th anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and Switzerland, the DNP Foundation for Cultural Promotion joined with the Museum of Design Zurich (Museum für Gestaltung Zürich) in organizing the exhibition “Japanese Poster Artists – Cherry Blossom and Asceticism.” The exhibition included many posters by Ikko Tanaka, Kazumasa Nagai and Shigeo Fukuda that we had donated to the museum.

In October 2014 ddd will be moving from Osaka, where it has held numerous exhibitions and lectures since opening in 1991, to new quarters in the Uzumasa area of Kyoto. In December 2013 CCGA was approved by the Fukushima Prefectural Board of Education as a “registered museum.”

Buoyed by the various achievements of this past fiscal year, we are determined to pursue further enhancement and enrichment of our diverse activities in the years ahead. We ask for your continued support and understanding.

公益財団法人 DNP文化振興財団 理事長
北島 義俊

Yoshitoshi Kitajima
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

日本美術はデザインをインスパイアする

山下 裕二

美術史家・明治学院大学教授

——日本美術の人气が年々高まっていると聞きます。数百年前に描かれた日本美術が、なぜいまの人たちを惹き付けているのでしょうか？そこには今後のグラフィックデザインを考える上でのヒントもあるように思い、山下さんのお話をうかがってみたいのです。

山下 日本美術の世の中での受け止め方について、僕は2000年を境に潮目が変わったという実感を持っています。もっとも象徴的なのは、京都国立博物館で開催された伊藤若冲の展覧会です（「没後200年 特別展 若冲」）。戦後様々な展覧会が開かれましたが、これは江戸時代以前の日本美術に日本人の目を向けさせる機会として、本当に革命的だったと思います。

この若冲展は約9万人の観客を集めました。それまでの江戸時代絵画の展示では考えられない来場者数です。京都国立博物館の狩野博幸さんが企画した展覧会で、大手メディアが大宣伝したわけでもないのに噂が口コミで広まり、しかも若い人たちがたくさん詰めかけました。僕自身、三度会場に足を運びましたが、それまでの日本美術の展覧会にない熱気を感じましたね。若い来場者たちが若冲の作品を注視している様を見て確信しました。「時代は変わりつつある」と。

——それまで日本美術に関心がなさそうに思えた若い人たちまでもが、若冲ファンになったのはどうしてだと思われませんか。

山下 インターネットの影響が圧倒的に大きいと思います。当時はネットが爆発的に普及し始めた頃でしたが、展示を見て「若冲ってすごいぜ!」と感じた若い人たちが図録をスキャンして、その画像をネット上にどんどん流通させていったんです。そのことで若冲という、一般の人たちにはほとんど知られていなかった日本美術がビジュアルとともに瞬時に伝わりました。

若い人たちは歴史を知らないから、それがよい方向に作用している部分もあると思います。つまり、敗戦国根性がないんですね。我々より上の世代の人たちは、戦後の風潮の中で欧米の文化に憧れながら育ち、美術も彼らの価値観に追随するべきだという固定概念が抜きがたく染み付いています。「日本美術」というとそれだけでカビ臭いもののように捉える傾向が強かったんです。しかし、そういう思いこみから解放された世代の人たちは、すごいものはすごいと素直に思うわけです。そこに理屈はいらないんですよ。そして、そういう気分が盛り上がり

てくると、遅ればせながら上の世代の人たちも「改めて見てみたら日本美術っていいじゃない?」と考えるようになったんだと思います。僕が監修して今年出版した『日本美術史』（美術出版社）という概説書の表紙は、北斎でも光琳でも宗達でもなく若冲です。2000年以降の日本美術を考える上でこれも象徴的事例だと思います。

——若冲人気は一時のブームで終わらず、その後もたびたび展覧会が開かれたり、若冲以外の日本美術も注目されるようになっていったと思います。それもインターネットの影響でしょうか。

山下 ネットの力も大きいと思いますが、90年代後半から顕著になった日本回帰の風潮とも連動しているのではないのでしょうか。特に2001年の9.11以降、日本人は海外旅行を控えるようになりましたし、西洋のものを盲目的にありがたがる傾向も薄れて来たような気がします。様々な潮目が合わさってムーブメントが起きたんです。

村上隆さんのような現代美術の作家が、伝統的日本美術からもインスパイアされて「スーパーフラット」という考え方を提示したのもその頃ですね。それより少し前になりますが会田誠さんが洛中洛外図を引用して描いた「紐育空爆之図」(1996年)を初めて見たときにも、「これだ!」という予兆のようなものを感じました。

世界的に高く評価されている現代美術作家が古くからの日本美術にアクセスするケースは、村上さんだけではありません。とくに杉本博司さんは平安時代の古美術に敬意を持って接しています。いまの日本の現代美術作家で、世界で一番評価されているのは杉本さんだと思いますが、草間彌生さんも含めてこの三人は、日本人で初めて世界で実質的な評価を勝ち得た作家と断言していいでしょう。草間さんの場合、日本の古いものとの直接のリンクはないと思いますが、若い頃に日本画を習っていたりもします。

——山下さんと赤瀬川原平さんによる「日本美術応援団」のシリーズが始まったのも90年代後半からですね。それまで日本美術というとなんとなくマジメで堅苦しい気がしていたのが、視点が新鮮で親しみやすい印象に変わったのを覚えています。

山下 表紙からして異色の日本美術本ですからね。前衛芸術家で芥川賞作家の赤瀬川さんと美術史の大学教授である僕が、応援団のコスプ

して出てますから(笑)。初版の帯には、南伸坊さんが考えてくれた「こう見てヨシ! 21世紀の新しい娯楽」というキャッチコピーを付けたんです。読んでくれた方々はすいぶん共感してくれました。

あの本では縄文土器も取り上げましたが、最近では古代の美術に対する世間の視線も変化し始めていると感じます。例えば、縄文の美術は岡本太郎が最初に発見して評価したもので、太郎は1952年に「縄文土器論」という文を『みづゑ』に発表しています。それ以前の美術の概説書は仏教伝来から始まり、美術史の中で縄文は語られて来ませんでした。

しかし、90年代にはそのことはもちろん、太郎の存在さえ一般の人たちには忘れられていました。亡くなったとき、彼の本はすべて絶版だったんです。僕は「こりゃいかん」と思って、彼が亡くなった1996年に猛烈に岡本太郎に関する仕事を始め、それがきっかけで岡本敏子さんとも知り合うことになりました。

——若冲ブームより少しあとで岡本太郎人気も爆発したように記憶しています。国立博物館での「国宝 土偶展」(2009年)もかなり話題になりましたが、岡本太郎への理解が進んだこととリンクする要素もあるのかもしれないね。

山下 土偶の展覧会は日本より先にヨーロッパで開催されてるんです。いわば里帰り展ですが、「里帰り」も大きな効果を上げます。若冲に関しても、アメリカ人のコレクター、ジョー・プライスさんが熱狂的に集めているというストーリーが付加されることによって、いっそう盛り上がりを見せるわけです。

あと、日本美術の展覧会に何十万人もが訪れるようになったのにはもうひとつ要因があって、国立の美術館、博物館が独立行政法人化したことも大きいと思います(2001年より)。それまでは職員はみんな公務員だったため地位が安泰で、「人は来なくてもいいや」という殿様商売ができていたわけです。しかし独立行政法人化により、人を集めてちゃんとお金も稼がなきゃいけなくなった。

それと同時に観客も目が肥えてきていますし、いいものはネットですぐに広がりますから、展覧会を企画する側もそのクオリティに対して真剣にならざるをえません。実際、海外の有名美術館の名前を冠しただけの西洋美術展は、大宣伝をするわりには人が入らなくなっています。

——日本美術の海外での影響力はどうなんでしょう？

山下 日本美術に対する認知度はまだまだです。しかし、僕自身はそれを望んでもいません。フランスで開催されるジャパン・エキスポに何十万人が詰めかける現象はあるようですが、漫画やアニメも含めてあらゆる文化は国に認められるようになったら終わりだと思うんです。60年代から70年代の日本の漫画はすごいと思いますが、手塚治虫さんにせよ、赤塚不二夫さんにせよ、僕が敬愛するつげ義春さんにせよ、その当時漫画を描いていた人たちが海外での認知や国のお墨付きを意識していたか? というと、まったくそんなこと考えてなかったでしょう。

——今日は山下さんに、日本の美術とグラフィックデザインの関係についてもおうかがいしてみたいと思っています。例えば、田中一光さんの仕事には琳派の影響があると指摘されています。

山下 琳派の影響があるというより、むしろ“田中一光こそ琳派”なんです。一昨年、「21_21 DESIGN SIGHT」で開催された田中一光展「田中一光とデザインの前後左右」のカタログにもそういった趣旨の一文を寄せましたが、いまの日本画家で琳派風の絵を描いている人たちは、むしろ全然琳派じゃない。つまり琳派というのはある画風や流派をさすものではなく、先人の美のエッセンスを本質的な所で理解した人が100年ごとに継承していったものなんです。

たとえば、俵屋宗達から約100年後に尾形光琳が現れました。僕から見ると二人はまるで異なる感性です。そして、光琳からまた100年後に酒井抱一が現れている。抱一も宗達や光琳を深く尊敬はしていますが、描くものは全然違うものです。100年よりもう少し間隔が空いてしまっていますが、20世紀に彼らの跡を継いだのが田中一光さんなんです。

19世紀から20世紀にかけての社会の著しい変容をふまえた上で、田中さんは日本画というメディアではなく、デザインという領域に琳派のエッセンスを継承し、自分のセンスをさらにそこで磨いた人だと僕は捉えています。有名な「JAPAN」というポスターの鹿の丸みは宗達からもってきているカーブですし、それ以外でも田中さんの様々な仕事からも琳派的センスを読み取ることができます。

美術作品と思うとそのつながりが見えにくくなるかもしれませんが、たとえば光琳の「燕子花(かきつばた)」でも、カッコいい包装紙やポスターなんだと思えばいい。美術がデザインに影響を与えたのではなく、琳派は元々デザインなんですよ。お客さんからの注文制作ですしね。明治以前はいままでいう「美術」という概念自体がなかったわけで、屏風

は風除けですし、掛け軸だってインテリアです。光琳は着物のデザインや焼き物の絵付けもしています。飛び立った鶴が下りてくるまでを描いた宗達の巻物は、広げると10メートル以上続く大作ですが、これにいたってはアニメーション動画とさえ言えるかもしれません。

——田中一光さんの仕事のように伝統のエッセンスを継承したデザインには、時代を超える強さがあるのでしょうか？

山下 キーワードは「継承」というより、むしろ「血肉化(ちにくか)」だと思います。田中一光さんにとっての琳派は彼が血肉化したものですし、横尾忠則さんはアメリカのポップアートだけでなく、曾我蕭白や月岡芳年を血肉化しています。血肉化されたものだけが次の伝統になっていくんです。

いまの日本の若いデザイナーでも日本美術の古いものに関心を持っている人は結構いるのですが、伝統を血肉化するところまで至っている人は僕の見限りいません。みんな先達を盲目的に尊敬しすぎなんだと思います。「こう来るか!」と思わせてくれるデザイナーが現れて、僕を驚かせてほしいですね。

——率直な質問ですが、どうやればそれができると思いますか。

山下 めげめげとパクリのセンスが必要なんじゃないでしょうか？たとえば宗達はまさにそういう人なんです。「風神雷神図」もすでに古い絵巻にあったキャラクターですが、そういうものをのうのうと引っ張ってきて、全面金地の中にボンと配置しちゃう。言うなればパクリの天才ですよ。でもスゴいのは、ただパクリしているのではなく、それをまったく違う文脈に落としこんでいるところです。

作家の多くは既存の文脈につながりたがります。デザイナーたちもそういうところがあるし、コンセプチュアルな現代美術作家は文脈に乗っかるだけで作品を作っていたりします。そういうのは僕から見ると、なんだか滑稽に見えてしまう。もう理屈はいらないですよ。「いかに血肉化するか?」を考えたほうがいいと思います。

でも、いまのように上質なものを見る機会が増えていけば、今後そういう人が現れてくる可能性は僕は大いにあると思います。デザインの世界の皆さんに提言したいのは、日本美術は「ネタの宝庫だよ!」ということ。そういうネタに触れてもらう機会を作るために、僕も展覧会

の企画をやっていたりするんです。本物を体感していったん濾過してほしいですね。盲目的に尊敬するだけでは、新しいクリエイションは生まれにくいから。結局、「濾過の仕組み」を自分の中でどう作るか?ということにつきると思います。

食事にたとえると、若いデザイナーなら食わず嫌いをせず、まずは何でも食べてみてほしいんです。色んなものを食べないとどれが美味しいか、自分にとっての栄養になるかわかりませんから。あるいは逆に絶食するというのもひとつの方法でしょう。絶食して本当におなかが減ったときに食べたものは血肉化しやすいと思います。みんなそのあたりが中途半端な気がします。「ちょっと器用」だとか「ちょっとセコい」ところからは、すごい表現なんて生まれません。

——デザイナーやその他の領域の表現者たちに「血肉化のヒント」を提供することがギンザ・グラフィック・ギャラリーの役割かもしれませんね。

山下 そのためにもモダンデザインと現代美術、さらにはもっと古いものまでもが有機的な繋がりを持つ場として機能すると素晴らしいと思います。僕はアートという言い方があまり好きではないのですが、いわゆるコンテンポラリーアートの世界は古美術の世界と完全に分かれてしまっています。でも、それでは面白くならないと思っていて、たとえば「アートフェア東京2012」では、古美術と現代美術をシャッフルする展示をキュレーションしました。

「シャッフル」はもうひとつのキーワードではないでしょうか。デザインにもっといろんなジャンルを混ぜていったほうがいいと思うんです。僕はデザインの世界を外から見ている人間ですが、画壇や文壇という言葉に近い「デザイン壇」みたいなものを感じることが時折あります。ヒエラルキーによる領域の硬直化は表現から活力を奪いかねません。その傾向が進むと血肉化は難しいでしょう。

田中一光さんや横尾忠則さんがもっともアクチュアルな活動をしていた60~70年代は、美術とデザインのみならず演劇や音楽、映画といった表現領域がすべてシャッフルされたカオス的な状況がありました。もちろん、2010年代と当時とは世間の空気や経済状況も異なりませんが、いまなら日本美術を取り入れることだってできるわけですからね。ギンザ・グラフィック・ギャラリーは、現代の「カオス」の発信源となることで、日本のグラフィックデザインを応援し続ける場であってほしいと思います。

(聞き手・テキスト:河尻亨一)

Japanese Art Inspires Design

Yuji Yamashita

Art Historian, Professor at Meiji Gakuin University

– *The popularity of Japanese art is said to be increasing every year. Why does Japanese art created hundreds of years ago appeal to people today? We would like to ask your view, Mr. Yamashita, because we think the answer to this question may serve as a hint when considering the future graphic design.*

Yamashita: It seems to me that people's reaction to Japanese art underwent a tidal shift in the year 2000. Most symbolic was the special exhibition held at Kyoto National Museum that year to commemorate the 200th anniversary of the death of Ito Jakuchu. Many different exhibitions have been held in the postwar era, but this one was truly revolutionary, I think, as an occasion that made the Japanese turn their eyes to Japanese art of the Edo period and earlier.

The exhibition drew some 90,000 visitors. This is a number inconceivable for previous exhibitions of Edo-period paintings. The exhibition was planned by Kyoto National Museum's Hiroyuki Kano, and in spite of the lack of any major advertising by the mass media, talk about the show began spreading by word of mouth. Moreover, many young people flocked to see it. I myself went three times, and I sensed an air of excitement such as I had never experienced at an exhibition of Japanese art before. Seeing how the young visitors were poring over Jakuchu's works, I felt for certain that "times are changing."

– *Why do you think even young people, whom one would have thought had no interest in Japanese art before, became fans of Jakuchu?*

Yamashita: I think the Internet had an overwhelmingly large influence. The Internet was just starting to spread like wildfire, and when young people visited the exhibition they thought Jakuchu was "truly awesome" – so they scanned the catalog and uploaded the images to the Internet, where the number of viewers increased by leaps and bounds. As a result Jakuchu – Japanese art that had been virtually unknown by the general public – became instantly familiar along with the images of his works.

Young people don't know history, and I think in some ways this works in a positive way. Namely, their mindset isn't affected by Japan's having lost the war. The generation senior to ours grew up longing to emulate the culture of the West, and their thinking has been indelibly tied to the stereotypical notion that art too should fall in line with Western values. They've shown a strong tendency to hear the words "Japanese art" and immediately conjure up something that is old and stale. The generation liberated from such thinking, however, takes things at face value, thinking that something that is awesome is just that: awesome. Reasoning is unnecessary. And once this younger generation became excited, then, I think, the generation before them came to think, belatedly, that "On second thought, Japanese art is pretty good, isn't it."

Japanese Art History, a general survey of the history of Japanese art published this year [by Bijutsu Shuppan-Sha], which I co-supervised, on its cover features a work not by Hokusai or Korin or Sotatsu, but by Jakuchu. This too I think is a symbolic example when we consider the situation surrounding Japanese art since 2000.

– *Jakuchu's tremendous popularity wasn't a fleeting occurrence; even after that there have been frequent exhibitions of his works, and attention has come to focus on Japanese art other than Jakuchu too. Has the Internet been instrumental here also?*

Yamashita: The power of the Internet has been substantial, but I think it's also linked to the conspicuous trend of renewed interest in Japan starting in the mid-1990s. After 9/11 in 2001 especially, the Japanese began refraining from traveling overseas, and I think the tendency toward blindly prizing Western things has dissipated too. A variety of different currents have converged, triggering the new movement.

It was also around then that contemporary artists like Takashi Murakami became inspired by traditional Japanese art and put forward the concept of "superflat." Slightly before that, the first time I saw Makoto Aida's "A Picture of an Air Raid on New York City" [1996], which makes reference to the early folding screen paintings of Kyoto and its environs, I had a premonition that something was in the works. "This is it!" I exclaimed.

Mr. Murakami isn't the only contemporary artist of worldwide acclaim who turns his attention to Japanese art from olden days. Hiroshi Sugimoto in particular takes a very respectful approach to art of the Heian period. Mr. Sugimoto is today, I believe, the most highly acclaimed, globally, of all Japanese contemporary artists; and he and Mr. Murakami, together with Yayoi Kusama, can be said to be the first Japanese artists to win substantial acclaim globally. In Ms. Kusama's case I don't think there is any direct link with old Japanese things, but when she was young she studied Japanese—style painting.

– *Nihon Bijutsu Oendan [Cheering Squad for Japanese Art], your series written together with Genpei Akasegawa, also began in the late 1990s. Up till that time Japanese art somehow seemed to me to be something serious and formal, but I recall how with your books, with their fresh perspective, my impression changed to something easily approachable. "Oh, so it's okay to play around like this," I thought, and my peregrinations to temples and shrines and such also became enjoyable.*

Yamashita: You can tell just from the cover that it's a different kind of book about Japanese art: Mr. Akasegawa, an avant-garde artist and Akutagawa Prize-winning author, and me, a university professor of art history, appearing in cosplay as cheerleaders! For the band of the first

edition, Shinbo Minami came up with the copy, "Hey, it's okay to look at it this way! New entertainment for the 21st century." People who read the book greatly agreed with what we were advocating.

That book took up the subject of Jomon pottery, and recently I get the feeling that the average person's perspective toward the earliest forms of art is beginning to change too. As an example, Taro Okamoto was the first to discover and think highly of Jomon art, and in 1952 he published his views on Jomon pottery in the magazine "Mizue." Until then, general art surveys used to begin with the arrival of Buddhism, and they never discussed Jomon within the context of art history.

By the 1990s, though, all that Okamoto had done, and even his very existence, had been forgotten by the general public. At the time of his death, all of his books had already gone out of print. This was "downright unacceptable," I thought, and in 1996, the year he died, I began working feverishly concerning Taro Okamoto. That in turn is what brought me to make the acquaintance also of Toshiko Okamoto.

– As I recall, it was slightly after the boom in interest in Jakuchu that Taro Okamoto's popularity also exploded. "The Power of Dogu" exhibition at Tokyo National Museum in 2009 created a lot of buzz too, and perhaps that too was instrumental in boosting understanding toward Taro Okamoto.

Yamashita: Before Japan, this show of dogu clay figurines had been held in Europe. "Homecomings" of this kind are very effective. In the case of Jakuchu as well, the circumstance that Jakuchu's works were collected with great passion by an American, Joe Price, aroused interest all the more.

In addition, there is one other factor that contributed to exhibitions of Japanese art attracting tens of thousands of visitors: the fact that national museums and art museums became incorporated administrative agencies [starting in 2001] also played a large part. Until then, museum staff had all been civil servants, and their positions were secure. No matter what they did, their salaries were the same, and their business attitude was such that they didn't care whether people came to their museum or not. But after the museums became incorporated administrative agencies, they had to attract visitors and earn money. At the same time, visitors have also become more discerning, and since good exhibitions quickly become widely known on the Internet, those who plan them have to be serious about creating an exhibition of quality. The fact is, today exhibitions of Western art linked to famous overseas art museums are having difficulty attracting visitors in numbers proportionate to the large amounts of money that are spent on publicity.

– What impact is Japanese art having overseas?

Yamashita: The level of familiarity with Japanese art is still relatively low. Personally, though, I'm not hoping for widespread recognition. The Japan Expo held in France apparently attracts visitors in the tens of thousands, but when all aspects of culture including manga and anime are accepted by a country, I think that's the end of it. I think Japanese manga of the 1960s and '70s is amazing, but take Osamu Tezuka or Fujio Akatsuka, for example – or Yoshiharu Tsuge, whom I hold in high esteem; did the people creating manga in those days think about how well known they might be overseas, or about whether or not their work was "endorsed" at home? Not at all.

– Today we would also like to ask you about the relationship between Japanese art and graphic design. It's been pointed out, for example, that Ikko Tanaka's work shows influence by the Rimpa school.

Yamashita: Rather than being influenced by Rimpa, I would say Ikko Tanaka is Rimpa. I wrote something to that effect in the catalogue for the exhibition "Ikko Tanaka and Future/Past/East/West of Design" held at 21_21 DESIGN SIGHT two years ago. On the other hand, Japanese painters who today draw in a Rimpa style aren't of the Rimpa school at all. Rimpa, you see, doesn't indicate a painting style or school; it's something carried on every 100 years by people who have a true understanding of the essence of beauty created by their Rimpa predecessors.

As an example, Ogata Korin appeared about 100 years after Tawaraya Sotatsu. In my view, they have completely different sensibilities. Then 100 years after Korin there appeared Sakai Hoitsu. Hoitsu too had deep respect for Sotatsu and Korin, but what he painted was completely different. In the 20th century – which is slightly more than 100 years after Hoitsu – the one who carried on in their footsteps is Ikko Tanaka.

As an outgrowth of the remarkable social changes that took place between the 19th and 20th centuries, Mr. Tanaka carried on the essence of Rimpa not in the medium of Japanese painting but in the realm of design, where, to my mind, he burnished his sensibilities further. The roundness of the deer in his "JAPAN" poster is a curve borrowed from Sotatsu, and in Mr. Tanaka's other works also one can detect a Rimpa-like sensibility.

When you think in terms of a work of art, the connection perhaps is difficult to see; but in Korin's "Kakitsubata," for example, the connection becomes clear if you think of it as an attractive wrapping paper or poster. Art didn't influence design; Rimpa inherently is design. Plus, it was created at the request of paying customers.

Prior to the Meiji period, the concept of "art" itself didn't exist; folding screens were a shield against the wind, and even hanging scrolls were

interior decorations. Korin also designed kimonos and painted ceramics. Sotatsu's picture scroll depicting cranes from the time they take flight until the moment they land was a work on grand scale spanning more than 10 meters; and even here, one could perhaps view this as a kind of animated film.

– *In design that carries on the essence of tradition in the way Ikko Tanaka's work does, is there a kind of strength that transcends its time?*

Yamashita: The key notion here, I think, is not so much "carrying on" as "embodying." Insofar as Ikko Tanaka is concerned, Rimpa is something he embodied. Tadanori Yokoo embodies not only American pop art but also Soga Shohaku and Tsukioka Yoshitoshi. It's only what gets embodied that becomes the next tradition.

Even among young Japanese designers today, quite a few have an interest in old Japanese art; and yet, as far as I can see, there aren't any who have gotten to the point of embodying that tradition. I think they all show too much blind respect for their predecessors. I would like for designers to appear who would take me by surprise, designers who would make me exclaim, "Wow! Look at what this guy's come up with!"

– *How, may we ask, do you think that might come about?*

Yamashita: Maybe what's necessary is to have the nerve to "borrow" from others. That's precisely the kind of person Sotatsu was. His "Wind God and Thunder God" screen borrows characters from an old scroll – characters that he just extracted for his own purposes and placed plopped in the middle of a completely gold background. You might say he was a genius at borrowing. But what's truly amazing is how he doesn't merely borrow but rather places what he borrows into an entirely different context.

Most artists seek to connect to existing contexts. Designers have that trait, and creators of conceptual contemporary art tend to create works simply by hopping aboard contexts. In my view, such things somehow look comical. There is no longer a need for reasoning. I think they would do better if they thought about how to embody earlier contexts. Then again, if opportunities to see things of high quality like we have today increase, I think there is a strong possibility such people will appear in the future. What I want to suggest to everyone in the design field is that Japanese art is a "treasure chest" filled with things they can potentially take hints from. It's to create opportunities for them to come in touch with such hints that I myself am involved in the planning of exhibitions. I want them to experience the real thing firsthand, and then process that experience through their personal filter – because new creations aren't born simply by blindly respecting things. In the end it all boils down, I think, to how to create a "filter mechanism" within oneself.

If you compare it to eating, I would like to see young designers begin by tasting everything, rather than disliking something without even trying it. If you don't eat many different things, you can't know which are delicious and which are healthy for you. Or another method, completely different, is to eat nothing whatsoever. I think it's when you've eaten absolutely nothing and your stomach is really craving that you find it easy to take things in – to embody them. Everyone is only half-hearted in this respect, I feel. Being "slightly clever" or "a bit petty-minded" doesn't give birth to amazing artistic expression.

– *Perhaps the role of ginza graphic gallery is to provide "hints for embodiment" to designers and others who work in expressive realms.*

Yamashita: For that purpose too, I think it would be wonderful if the gallery were to function as a place having organic links with modern design, contemporary art and even older things. I'm not very fond of the term "art," but the world of contemporary art has become completely separated from the world of "old art." I don't think things can get very interesting under such circumstances, though – which is why, for example, for "Art Fair Tokyo 2012" I curated the "Shuffle" exhibition incorporating both ancient and contemporary art.

"Shuffle," I suggest, is another key word. I think design should be mixed with more genres of various kinds. I'm a person who looks at the world of design from the outside, and occasionally I get the feeling there exists something like a "design clique" akin in concept to a clique of artists or a literary circle. "Ossification" of a field by dint of a hierarchy runs the risk of robbing expression of its vitality. And when that trend proceeds, embodiment becomes difficult.

In the 1960s and '70s when Ikko Tanaka and Tadanori Yokoo were most active, everything was shuffled and chaotic – not just art and design, but also such expressive realms as theater, music and cinema. Of course the general mood and economic conditions then and those of today in the second decade of the 21st century are different – but now the situation is ripe even for taking in Japanese art. What I hope is that ginza graphic gallery will continue to be a place that supports Japanese graphic design by serving as a generator of contemporary "chaos."

Interview and Text by Koichi Kawajiri

展示事業

Exhibitions

ginza graphic gallery 13-14

April 4 – 27, 2013

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

May 8 – 30, 2013

KM Karel Martens

June 5 – 29, 2013

Why Not Associates – We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong

July 4 – 29, 2013

2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

August 5 – 28, 2013

Ellie Omiya Exhibition

September 4 – 28, 2013

PARTY Not There. Exhibition

October 3 – 28, 2013

Rikako Nagashima Exhibition: “Between human and nature”

November 1 – 26, 2013

Jan Tschichold

December 2 – 25, 2013

Tomaszewski, The Poetic Spirit

January 9 – 31, 2014

Mitsuo Katsui Exhibition – Design of Symptom

February 6 – 28, 2014

“Putting Finger” Masahiko Sato + Tatsuya Saito

March 6 – 31, 2014

Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster

ggg
333

指を置く展

佐藤雅彦 + 齋藤達也

指を置く展

佐藤雅彦 + 齋藤達也

指を置く展



ggg
333

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

April 4 – 27, 2013

TDC展 2013



応募者とのやりとりから、モニター上で審査するデザインコンペの海外事情を実感する。グラフィックデザインの一通りのカテゴリーを網羅する国際コンペでは希有な“アナログ存在”となった。展覧会も概ね作品の実物を展覧しているが、海外作家に展示写真を送付し報告をすると、このような美しい展覧会は貴重だと感激するメッセージが届くようになった。グランプリはパーソナルなメッセージ映像、またRGB賞にクリティカル・デザインを提唱する英国のアーティストが選出され話題となった。一方、スイスからの2作品を含むポスター4作品が受賞。主題への解釈・表現ともに秀逸な演劇の告知ポスターの健在ぶりも示すことができた。

東京TDC 照沼太佳子

Through my dealings with entrants, I have come to realize how design competitions overseas are held, with the judging performed via computer monitors. Among international competitions that encompass most standard categories of graphic design, ours has become a rare “analog” undertaking. Most works are exhibited as real physical items, and when we send a report with pictures of the exhibition to an overseas designer, we often receive messages back saying how thrilled they were to take part in a rare exhibition of such beauty.

This year's Grand Prize was awarded to a video conveying a personal message. The RGB Prize, which went to an artist from the UK, was much talked about for its advocacy of critical design. Four prizes were awarded to posters, including works by two designers from Switzerland. They demonstrated the sustained health of theater publicity posters excelling in terms of both their interpretation and expression of their respective subjects.

Takako Terunuma, Tokyo TDC





KM Karel Martens

May 8 – 30, 2013

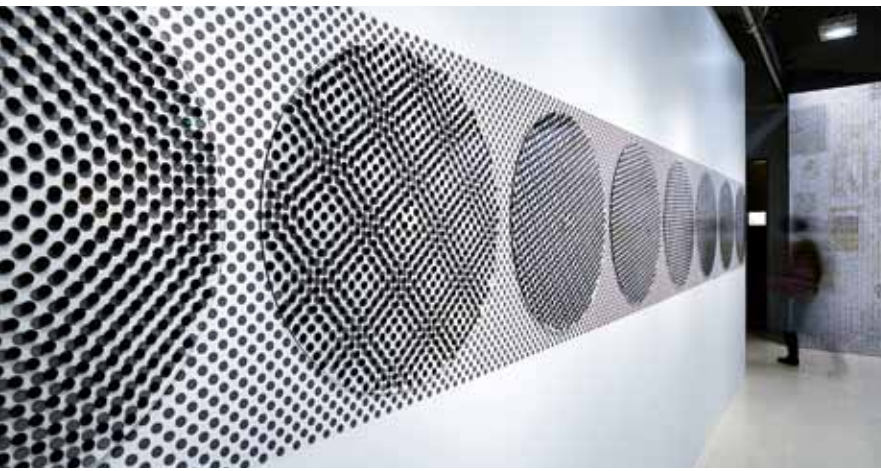
KM カレル・マルテンス



展覧会の依頼を受けた時、大変驚き光栄に思いました。これほどの遠距離間で企画を進めるのは実にエキサイティングな体験でした。この企画はデザイナーのジュリー・ピーターズ、建築家クリス・キンペ、写真家ヨハネス・シュワルツとの様々な会話から生まれました。展示では私の実際の仕事と自主的に制作した作品の両方をお見せしました。展覧会に合わせて、私の働く環境をビジュアルエッセイの形で表現した『フルカラー』という本を作りました。野心的な企画を実現していただいたギャラリーの情熱に感銘を受けました。特にアムステルダムと東京の時差を表現した「タイムマシン」の実現には深く感動しています。東京での温かい歓迎を振り返るとうれしい気持ちになります。カレル・マルテンス

I was very surprised and honored to receive an invitation from ggg. It was interesting and exciting to develop an appropriate solution from such a distance. Through conversations with Julie Peeters, Kris Kimpe and Johannes Schwartz, the plan for the exhibition was conceived. In the show, both my applied and free work were represented. Next to that, we made the book, *Full Color*, in which my work environment was presented in a visual essay. I was very impressed with the care and passion with which the staff of the gallery helped to realize our ambitious plans. The realization of the “time machine,” in which the time difference between Amsterdam and Tokyo was expressed, has touched me deeply. Karel Martens





Why Not Associates – We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong

June 5 – 29, 2013

ホワイ・ノット・アソシエイツ 予定は失敗のもと。未定は成功のもと。



ギンザ・グラフィック・ギャラリーで開催する展覧会の準備のために、私たちはロンドンのスタジオの引き出しやアーカイブに溜まった、過去27年間の仕事や作品を全部引っ張りだして評価しなければなりません。それは大変な作業でした。自分たちもすっかり忘れてしまっていたプロジェクトもあれば、そのまま触れずにおく方がまちがいに良いものもありました。しかし、それは同時に、自分たちの幅広い仕事をまとめて振り返るすばらしい機会ともなりました。

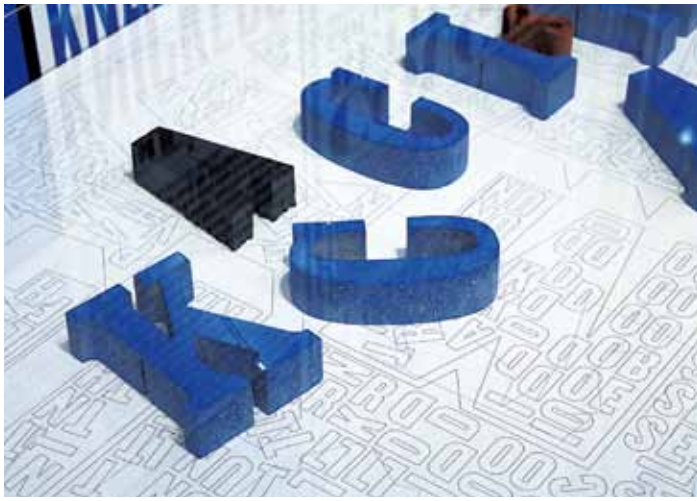
ギンザ・グラフィック・ギャラリーの皆様が、東京というすばらしい都市で展覧会をおこなう機会をくださったこと、このプロジェクトの構想と実現のために尽力して下さったことに深く感謝しています。皆さんとともに働くことはすばらしい喜びでした。

ホワイ・ノット・アソシエイツ
アンディ・アルトマン&デイヴィッド・エリス

In order to prepare for our exhibition at the ginza graphic gallery we had to route through the draws and archives of our London studio assessing work from the past 27 years. It proved to be quite a task. There were projects we found that we had completely forgotten about and some that were definitely best left where they were! However it gave us a fantastic opportunity to see a large selection of our work together and at one time.

We are very grateful to everyone at the ggg for giving us this opportunity to exhibit in your wonderful city and for being so helpful in the conception and realisation of the project. Everyone involved was a delight to work with.

Andy Altmann and David Ellis,
Why Not Associates



2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

July 4 – 29, 2013

2013 ADC展



グランプリを受賞したのは「デザインあ展」でした。テレビの教育番組だったものを、展覧会というカタチで社会に発信しました。デザインの重要性が益々高まる現代社会に、デザインの意味・役割を楽しく紹介。参加型の展示で、子どもづれのママさん達が行列をなし、大変な盛況ぶりでした。デザインを身近なものにした功績は称賛に値する、というのが受賞の理由でした。そして2013年の受賞作品の大きな特長は、その表現が極めてグラフィカルな作品であったこと。アートディレクターとグラフィックデザイナーで構成されるADCですが、近年その垣根がなくなりつつあり、アートディレクターの領域がどんどん広がっている事を実感しています。

ADC展委員 副田高行

The winner of the 2013 Tokyo ADC Grand Prize was the “Design Ah!” exhibition. Originally an educational program on TV, “Design Ah!” was given a social launching as an exhibition. In a fun way it introduced the significance and roles of design in contemporary society, when design is becoming increasingly important. This exhibition was selected as the Grand Prize winner because of its praiseworthiness for its contribution to making design something close at hand. A major trait of the 2013 Tokyo ADC Award-winning works was their extremely graphic aspect. Although the Tokyo ADC is an organization of both art directors and graphic designers, in recent years the borderline separating them has been disappearing, and I

have the distinct impression that the realm of the art director is expanding steadily.

Takayuki Soeda,
Tokyo ADC Committee Member





Ellie Omiya Exhibition

August 5 – 28, 2013

大宮エリー展



銀座というハイカラで文化のある場所で個展をやらせていただいたことに未だに興奮がとまりません。そして、グラフィックギャラリーだということに私はグラフィックデザイナーではないのにも関わらず、私の多岐に渡る仕事の共通項は、世の中をちょっと楽しく、幸せに、デザイン(構築)することだという風にとらえて、推薦してくださった北川一成さん、こういう機会をくださった永井一正さんに感謝しています。地下の壁画を見て、永井さんが、「こういう上手じゃない絵がいいんだ! 楽しい!!!」と大きめの声で言ってくださったこと、大切に、宝物にします。電通で7年、大宮エリーとして7年、それをgggによって、振り返る羽目になり私は今、次の7年へ向かおうとしています。 大宮エリー

I'm very grateful to Issay Kitagawa, who, in spite of my not being a graphic designer, recommended me to this graphic gallery because in my diverse works he saw a common thread of design that brings a little enjoyment and happiness to the world. Further, I will always treasure the words Mr. Nagai offered, when, looking at my works on the walls of the downstairs gallery, he exclaimed, "These unskillful drawings are wonderful! They're so much fun!!" I worked for 7 years at Dentsu and then 7 years on my own as Ellie Omiya, and now that ggg has put me in the predicament of looking back over what I've done so far, today I'm taking up the challenge of what to do in the next 7 years. Ellie Omiya





PARTY Not There. Exhibition

September 4 – 28, 2013

PARTY そこにいない。展



実は、香港のアートバーゼルの会場でこの原稿を書いています。ここは現代美術における世界の最前線。たくさんのアート作品にまみれてみると、アートとグラフィックデザインとインタラクティブデザインの境界線を引くことにもはや何の意味もない、そう痛感します。ここでは1億円で売れるアート作品があります。いったい企業のための広告ポスターとの違いは何か。クオリティに差があるとは到底思えません。あるのはきっとコンテキスト(文脈)の違いだけです。われわれPARTYは“国境なき徒党”として、すべての国でデジタルとデザインの可能性を追求する当事者であり続けます。今回の展覧会ではgggの皆さんにこのような貴重な土地をいただいたこと、大変感謝しております。
伊藤直樹



I'm writing this at Art Basel in Hong Kong, a venue in the global vanguard of contemporary art. Surrounded by a large number of artworks, I feel keenly that it's become meaningless today to draw boundaries between art and graphic design and interactive design. There are artworks here that sell for the equivalent of 100 million yen. What on earth is the difference from a corporate ad poster? There certainly doesn't seem to be any difference in quality. The only thing that's likely different about them is their context. We at PARTY will continue to be a borderless bunch that probes the possibilities of digital and design in countries everywhere. We are very grateful to everyone at ggg for having given us such precious ground for us to hold this exhibition.
Naoki Ito





Rikako Nagashima Exhibition: “Between human and nature”

October 3 – 28, 2013

長嶋りかこ展 [Between human and nature]



「人」と「自然」のありようを考える契機になるような展示ができないかと考えた。伝えたいことを伝えるためには今回は平面よりも「洋服」というカタチに翻訳したほうが伝わるのではと、思い切ってはじめて洋服を作った。季節や時間を感じられるよう作った服や装飾物を、ああでもないこうでもない袖を通し考える人たち。

平面とはまた違う、身体とのコミュニケーションは興味深い体験となり、デザインは表層ではなく、人の思考であり、共通言語であることをあらためて感じた。地下で並べた過去の仕事からは反省点もたくさん見えた展示となったが、それにしても、こんな未熟な私にこのような機会を与えてくださったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。 長嶋りかこ

I wondered whether it wouldn't be possible to create an exhibition that would serve as an occasion for thinking about human beings and nature. I thought that, for this event, rather than working with two-dimensional graphics, translating to the form of "clothing" would more convey what I wanted, and created clothing for the very first time. Communication with the body was an interesting experience different from two-dimensional communication, and I felt that design isn't something on the surface but human thinking and a shared language. I'm filled with gratitude for having been given, despite my immaturity, an opportunity like this.

Rikako Nagashima





Jan Tschichold

November 1 – 26, 2013

ヤン・チヒョルト展

偉大なタイポグラフィ家、ヤン・チヒョルトの業績が日本で初めて公開されました。彼は特に重要な著書『新しいタイポグラフィ』(1928年)の刊行と実験的なタイポグラフィによって、世界のグラフィックデザインの発展に最も強く影響を与えたパイオニアのひとりとなりました。作品は今日見てもモダンであり、今回は作品自体と同様の正攻法で展示を行いました。彼の作品を30年以上にわたってコレクションしている私でさえ、この展覧会ではこれまでになく全容を概観することができました。彼のタイポグラフィ家としての仕事とデザイナーとしての仕事の両方がこれほどの規模で展示されたのは初めてのことです。これほどの展覧会は二度と実現できないでしょう。展覧会を実現していただいた皆様に拍手を送りたいと思います。私のもとには、この展覧会のすばらしい思い出と美しいデザインのカatalogueが残っています。 マルチン・F・ル・クールトル



In November 2013, the works of master typographer Jan Tschichold were shown to the Japanese public for the first time. Through his publishing, especially his monumental *die neue typographie* (Berlin, 1928), and experimental typographic posters, Tschichold was one of the most influential pioneers in the worldwide development of graphic design. Most of his works look modern even today and the way the exhibition at ggg was displayed was as straightforward as the works themselves. Even to me, a collector of Tschichold's works for over 30 years, the exhibition gave a better overview than anything I had seen before. This was the first time the typographer was combined with the designer on such a scale. It is sad to realize that almost certainly this exhibition will not be duplicated: most of the original works are too fragile to travel again. I applaud everyone for making the exhibition at ggg possible. What remains are fond memories and a beautifully designed catalogue with texts by Christopher Burke and Taro Yamamoto.

Martijn F. Le Coultre





Tomaszewski, The Poetic Spirit

December 2 – 25, 2013

トマシェフスキ展 世界を震わす詩学



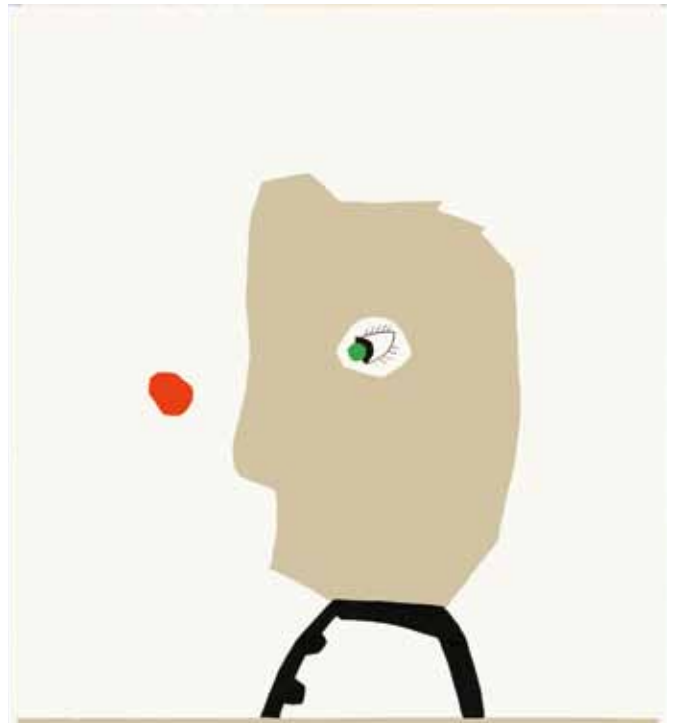
トマシェフスキは手品箱を携えてわたしたちの前に再び現れた。戦争、共産主義、ポーランド国、ユーモア、風刺、哲学等、様々なカードを入れながら。時に戦争と風刺の両カードを一緒に置き、時にポーランド国と哲学というカードを一緒に置き、わたし達に質問する。「君はこの両方のカードをどう読み解くんかい!」と。どぎまぎしている見学者の顔を見てニヤッと笑みを浮かべて、「今度は君がわたしに何でもいいから質問してごらん。ただし「いい質問」と言えるものを」。

矢萩喜従郎

Tomaszewski appeared before us again, his box of magic tricks in hand. Into it he placed a variety of cards: war, Communism, Poland, humor, satire, philosophy, etc. Sometimes he put two cards together – war and satire, Poland and philosophy. “So, what do you make of this?” he asks us. Then looking at the faces of his flustered observers, Tomaszewski grins coyly. “Now it’s your turn to ask me a question,” he says. “Only it better be a good one.”

Kijuro Yahagi





Henryk TOMASZEWSKI Varsovie

Société des Beaux-Arts Palais des Congrès
 Kunstverein Kongresshaus Biel-Bienne (Foyer)
 21 juin - 20 juillet 1969 21. Juni - 20. Juli 1969



Mitsuo Katsui Exhibition – Design of Symptom

January 9 – 31, 2014

勝井三雄展 兆しのデザイン



私は初期の広告の世界に身を置きデザインを志していたその一時期を除いて、主にエディトリアル・デザイン集積の上に博物館や万博の空間でのデザイン体験を経て視覚デザインの地平を拡張してきた。如何に情報世界を可視化できるかに思考の場を意識した活動をこころがけてきた。本展は過去・現在・近い未来への視覚デザインの予感・予兆・暗示を含める意味で試みた展示でありたいと考えた。

会場のB1は過去から現在にわたる書籍を中心とするデザインの中から100点を選び、書籍の固有な固体と内容をいかに展示し空間をつくるかであり、そして背景にポスターを46点を配した。1Fには色彩によるヴィジュアルをインスタレーションする新しい映像空間を演出するものとなった。 勝井三雄

Except for a brief period when I aspired to designing advertising in that field's early days, I worked primarily in spatial design for museums and expositions leveraging my editorial design experience, and then expanded my horizons in visual design. My activities have continuously focused on the question of how to visualize the world of information. For this exhibition, I aimed for a show that would encompass the past and present as well as offer premonitions, omens and suggestions of visual design of the near future. For the basement gallery I selected 100 of my past and present designs, with a focus on books, and on the ground floor I created a new video space in the form of an installation of colored visuals. Mitsuo Katsui





“Putting Finger” Masahiko Sato + Tatsuya Saito

February 6 – 28, 2014

「指を置く」展 佐藤雅彦 + 齋藤達也



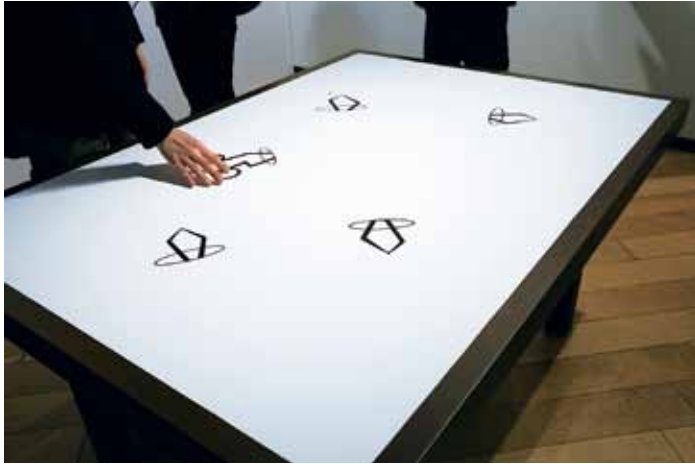
人間にとって指とは何か。この根源的な問いに対して新しいグラフィック表現が一つの解を差し出した。指という言葉は「およぶ」という動詞に由来する。古来より私たちは指で触れる、指差すなどして、この世界の事物に自分の意識を及ぼしてきた。一方、現代においては身体と世界が直接関わりなく、多くのメディアを通して大量の情報を摂取し、世界を把握している。ではメディアに自分の身体を及ぼしたらどういったことが起こるのか。実は指とメディアの関係性はこれまで見過ごされてきた。指を置くことで新奇な表象や感覚が立ち現れる。そのようなグラフィックを数多く作り、分析することで、身体とメディアの関係性を解明し、グラフィックの新しい可能性を示した。 佐藤雅彦 + 齋藤達也

What do fingers mean to us as human beings? In response to this basic question, new graphic expression has offered an answer. The Japanese word for finger, “yubi,” derives from the verb “oyobu,” meaning “to reach.” On reflection, since ancient times we have used our fingers to reach out and directly touch something, to point, to send signals and so on, and in this way we have extended our individual awareness to the things that exist in the world. In modern times, however, we get a grasp on the world without making direct physical contact with it, using numerous media as our means to take in large volumes of information. Placing one’s fingers gives rise to novel representations and sensations. By creating many

new graphics of this kind and analyzing the results, we have shed light on the relationship between our bodies and media and also indicated new graphic possibilities.

Masahiko Sato + Tatsuya Saito





Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster

March 6 – 31, 2014

明日のデザインと福島治 [Social Design & Poster]



5年前から“グラフィックデザインを有効に使った社会貢献の可能性”をライフワークのテーマとして必死に取り組んでいる。デザイナーになって35年になるが、これほど深くデザインとは如何なる行為なのかを考えたことはなかった。

gggにおいてSocial Designの展示は、おそらく初めてだと思う。ギャラリーにも協力してもらい、特設サイトを開設したり、MMMにも全面的に力を借りて、チャリティ販売を行なった。個展ではあるのだが、1階に展示してある僕の作品は、ハンカチ一枚だけだ。Social designでは、僕のデザインではなく、みんなが生み出すデザインのメッセージが大切である。この展覧会からこうしたデザインが、広がることを願う。
福島治

For the past five years I've been devoting myself wholeheartedly to probing possibilities for using graphic design as an effective way of making social contributions. I've been a designer for 35 years now, and never before had I ever thought so deeply about the meaning of the act of designing.

I believe this was the first exhibition at ggg on the topic of social design. With the gallery's cooperation I set up a special area where, with full assistance from MMM (Maison des Musées du Monde), we sold merchandise for charity purposes. Although this was my solo exhibition, the only work of mine displayed on the ground floor was a single handkerchief. With social design what's important isn't my design works but rather the message conveyed by design produced by everyone. I hope that, starting with this exhibition, design of this kind will become increasingly prevalent.
Osamu Fukushima





YAMANOTE
Yamanote Jijsha Oedip Rege
Festivalul Internațional de Teatru de la Sibiu
30 mai 2010 19:00
Teatrul Național Radu Stanca
Contact: Festivalul Internațional de Teatru de la Sibiu
TEL 269-210-092 <http://www.sibfest.ro/>
Yamanote Jijsha <http://www.yamanote-j.org/>



ddd gallery 13-14

March 12 – April 26, 2013

groovisions Exhibition: “dddg”

May 14 – June 28, 2013

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

July 9 – August 30, 2013

**DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition**

September 10 – October 25, 2013

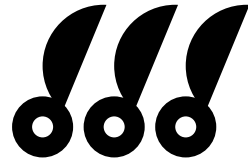
2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

November 5 – December 20, 2013

Ellie Omiya Exhibition

January 17 – March 5, 2014

**GRAPHIC WEST 6: Osaka City Museum of Modern Art Collection
Modern Avant-Garde Graphics**



groovisions Exhibition: “dddg”

March 12 – April 26, 2013

[デー デー デー ジー] グルーヴィジョンズ展



今回の展覧会では、2011年にgggで行ったインスタレーションをベースに、これとは違った展開を考えるとところからスタートしました。過去のアーカイブをテーブルに並べるというコンセプトは踏襲しつつ、dddでは色をテーマにグラデーションを意識して配置してみました。さらに、会場を斜めに設置された長テーブルが、正面のガラスを突き抜けて南堀江の街中に向かって行くような展示を試みました。こうした様々なイレギュラーな展示も、サポートしていただいた多くの方々によって可能になったことです。あらためまして関係各位のご尽力に厚く感謝いたします。

伊藤弘

For this exhibition, we began by considering how to take the installation we carried out at ggg in 2011 as a base and develop it in a different way. While retaining the concept of setting out past works on a table, for “dddg” we took “color” as our theme and laid out our works with a conscious focus on gradations. We also experimented with a long table placed at an angle inside the gallery, creating a display suggestive of it breaking through the front window glass and emerging in the streets of Minamihorie. Irregular displays like this have been possible thanks to the support so generously given us by many people. Once again we wish to express our sincere gratitude to everyone concerned.

Hiroshi Ito





Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

May 14 – June 28, 2013

TDC展 2013



DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

July 9 – August 30, 2013

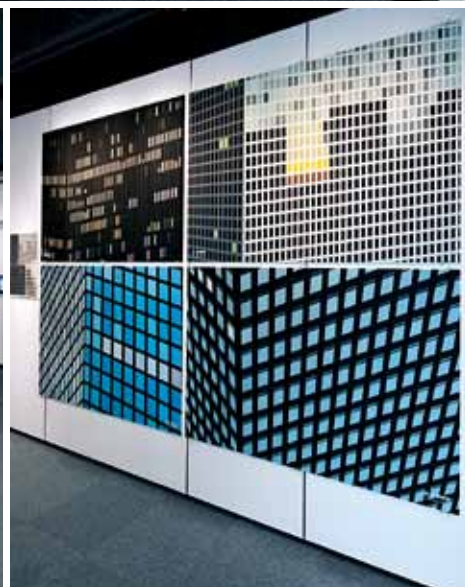
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V LIFE 永井一正ポスター展



2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

September 10 – October 25, 2013

2013 ADC展



Ellie Omiya Exhibition

November 5 – December 20, 2013

大宮エリー展



GRAPHIC WEST 6: Osaka City Museum of Modern Art Collection Modern Avant – Garde Graphics

January 17 – March 5, 2014

GRAPHIC WEST 6 大阪新美術館建設準備室デザインコレクション
熱情と冷静のアヴァンギャルド



「大阪からの視点切り拓く新たなアートシーンの発信拠点」として、近現代美術・デザインに特化した新しい美術館の整備を目指している大阪新美術館建設準備室のデザインコレクションは、2012年にサントリーポスターコレクションの寄託を受けて、グラフィック部門がさらに充実しました。

GRAPHIC WESTはコレクション周知の絶好の機会。効果的なテーマ設定をと悩みましたが、現代生活と「モダン(近代)」との関係を考えてきた私たちの足元を見直し、モダンデザインの前衛をあらためて提示する内容にいたりました。21世紀のデザインが見失ったかもしれない思想や奥行きに触れることができる場となったのなら幸いです。

植木啓子(大阪新美術館建設準備室)

In 2012 the design collection held by the office in charge of the preparations for the opening of a new art museum in Osaka dedicated to modern and contemporary art and design, which is intended to serve as a window on the city's unique art scene, saw its graphics section further enriched by the addition of the newly entrusted Suntory Poster Collection.

GRAPHIC WEST was an ideal opportunity to introduce this collection to a wide audience. After agonizing over what to set as an effective exhibition theme, we, who have continuously pondered the relationship between contemporary life and “modernity,” took a renewed look immediately around us, and we decided on exhibition content that would once again present the

avant-garde aspect of modern design. We hope that the exhibition served as a venue enabling visitors to come in touch with ideals that may have dropped by the wayside in the 21st century as well as the philosophy and profundity that may have been lost in design.

Keiko Ueki,

Osaka City Museum of Modern Art



Center for Contemporary Graphic Art and Tyler Graphics Archive Collection 13-14

March 1 – June 9, 2013

THE POSTERS 1983–2012

–The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

June 15 – September 8, 2013

Lithographs As Contemporary Prints:

25th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

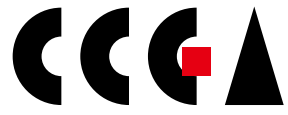
September 14 – December 23, 2013

DNP Graphic Design Archives Collection V

LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

February 9 – 15, 2014

The 25th Denzen Print Award Exhibition



THE POSTERS 1983-2012 -The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama-

March 1 - June 9, 2013

THE POSTERS 1983-2012 世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展



日本で唯一の本格的な国際ポスターコンペティションとして知られる世界ポスタートリエンナーレトヤマ (IPT)。1985年から3年毎に開催を重ねて今や世界最大規模のポスター展となった同トリエンナーレは、2012年6月に第10回目を迎えた。本展はこれを記念し、富山県立近代美術館の所蔵作品の中から歴代の受賞作品を中心に、IPTの30年間の足跡を辿った。IPTは、世界共通の視覚言語としてのポスターに込められた、グラフィックデザイナーたちの思索の力量を評価する場である。こうして選ばれた優れた作品は、「時代の証人」として普遍性を獲得しており、展覧会を通してその魅力をご覧いただいた。

The International Poster Triennial in Toyama (IPT) is Japan's only full-scale international poster competition. Held every three years since 1985, in June 2012 IPT marked its tenth competition to date. This exhibition celebrated this milestone with a retrospective look at IPT's 30-year history, with a focus on prize-winning works in the permanent collection of The Museum of Modern Art, Toyama. IPT is an occasion when the imaginative capabilities of graphic designers, manifested in posters as a universal visual language, are held up for judgment. The outstanding works selected as prize winners have acquired universality as "witnesses of their times," and this exhibition gave visitors an opportunity to see what makes them all so appealing.





Lithographs As Contemporary Prints: 25th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

June 15 – September 8, 2013

現代版画とリトグラフ：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.25



リトグラフは、水と油が反発しあう性質を利用し、版を彫ることなく化学的に絵柄と余白を作り出すことで製版する。紙に絵の具やクレヨンで直接描いたような画面を実現できるこの技法は18世紀の誕生以来、数多くのアーティストを魅了し、現代版画においても多用されている。本展はCCGA所蔵のタイラーグラフィックス・アーカイブコレクションから、ロバート・マザウエル、ヘレン・フランケンサーラー、デイヴィッド・ホックニーらのリトグラフ作品を展示し、その魅力とともに現代版画におけるリトグラフの展開を検証した。

In lithographs, the printing plate is created not by carving but by chemistry, taking advantage of the mutually repellent properties of water and oil to produce areas forming an image and areas left blank. This technique, which enables the realization of a picture similar to the kind created using paints or crayons directly on paper, was invented in the 18th century. Through the years it has captured the hearts of many artists, and it continues to be widely used in contemporary prints. This exhibition displayed lithographs from CCGA's Tyler Graphics Archive Collection, including works by Robert Motherwell, Helen Frankenthaler and David Hockney. Visitors came away with an appreciation of this technique's great appeal and an understanding of how it is used in contemporary prints.





DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

September 14 – December 23, 2013

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V LIFE 永井一正ポスター展



DNP文化振興財団では、半世紀以上にわたり日本のグラフィックデザイン界の最前線で活躍を続ける永井一正氏より、ポスター、版画を中心とする代表作品を寄贈いただき、2009年に“永井一正アーカイブ”としてCCGAに収蔵した。本展では4,000点におよぶこの貴重なコレクションの中から、1980年代後半より現在まで作家のライフワークとして続く「LIFE」シリーズのポスター作品139点を展覧した。動植物をモチーフに、みずみずしい創造力によって生み出されたポスターの数々を通して、かけがえのない命や自然への強いメッセージとともに、まさにあふれ出るような生命力(LIFE)を感じていただく展覧会となった。



In 2009 a new archive dedicated to the works of Kazumasa Nagai was created at CCGA following a donation by Mr. Nagai, one of Japan's leading graphic designers for more than half a century, of his representative works – particularly his posters and prints – to DNP Foundation for Cultural Promotion. Out of this cherished collection encompassing some 4,000 works, this exhibition focused on 139 posters from Mr. Nagai's “LIFE” series, a project he has been developing since the mid-1980s. Through these many creatively innovative posters using plants and animals as motifs, Mr. Nagai conveys a powerful message about the preciousness of life and nature. This exhibition enabled visitors to hear his message and to see the overflowing vitality of Mr. Nagai himself.



The 25th Denzen Print Award Exhibition

February 9 – 15, 2014

特別展 第25回田善顕彰版画展



須賀川が生んだ江戸時代の画家、亜欧堂田善（あおうどう・でんぜん）は、西洋式の銅版画技法を研究し、わが国初の銅版画による解剖図や世界地図などを残したことで知られる。とくに遠近法を駆使した写実的な風景銅版画は、葛飾北斎などの浮世絵にも大きな影響を与え、2012年にはその価値が認められて国の重要文化財に指定された。本展は田善の功績を顕彰するために、須賀川商工会議所青年部主催で平成元年から続いてきた、小中学生の作品による版画展である。東日本大震災で従来の会場が使用できなくなったため、昨年度よりCCGAを会場に開催している。今年も3,000点を超える応募があり、その中から選ばれた田善賞ほか入賞作および入選作、計243点を展示した。

Sukagawa, where CCGA is located, is the birthplace of Aodo Denzen, an Edo-period painter who studied Western-style copperplate printing techniques. He is known for being the first Japanese to leave a legacy in anatomical drawings, world maps, etc. created from copperplate prints. Most notably, his realistic landscape prints, achieved through Denzen's mastery of perspective, had a significant influence on ukiyo-e artists such as Katsushika Hokusai; and in 2012 their value was acknowledged by designation as Important Cultural Properties of Japan. To celebrate Denzen's achievements, this exhibition featured prints made by primary and middle school students under a program launched in 1989 sponsored by the youth division of the Sukagawa Chamber of Commerce and Industry. The exhibition has been held at CCGA since last year, after the original venue became unusable as a result of the Great East Japan Earthquake. Of more than 3,000 entries received this year, the exhibition included a total of 243 works, including the winners of the Denzen Print Award and other awards as well as other worthy works.



教育・普及事業

Education & Enlightenment

ggg, ddd Gallery Talk Overviews

ギャラリートーク概要

KM カレル・マルテンス

出演者：カレル・マルテンス

オランダを代表するグラフィックデザイナーの日本初の個展とトーク。東京到着以降、晴天が続く、「お天気でアムステルダムから持ってきてくれた」との司会進行者の挨拶に会場は和んだ。多彩な仕事の舞台裏紹介の初めのほうで、ある文字を入れ忘れたことに気付いて加えたらさらに美しくなった経験を踏まえ、「失敗こそが多くのものを与えてくれ、教えてくれる。人生と同様に」と述べていたことが印象深い。魔方陣の法則を援用したプロジェクトでは「色と数字の間の新しい関係性を探った」とし、「数字はとても重要。魔的な存在感すら持つものとして映っている」と、合理的な探究を披露。PTTテレコムテレフォンカードでは「自分のタイプライターと自家製のカーボンペーパーを使っているんな色を打ち込み、多色の使い方を研究した」と打ち明け、「こういったプロセスとシステム重視で作りこんでいくことがきわめて大切」と熱く語った。



ホワイ・ノット・アソシエイツ 予定は失敗のもと。未定は成功のもと。

出演者：アンディ・アルトマン+デイヴィッド・エリス
国際的に熱い眼差しを注がれているロンドンのデザインスタジオ。その二本柱、アンディ・アルトマンとデイヴィッド・エリスによるトーク。展覧会名はある英国コメディアン言葉「計画なんて持ったこともなかった。だから何かうまくいかないというはずもなかった」(訳)の援用で、それが「予定は失敗のもと」になったと明かして会場を笑わせた。スタジオ運営も成りゆき任せだし、「女王陛下のための切手」制作受注時も当初「電話番号を間違えていらっやいませんか？」と応えていた、と。「建築家のプロジェクトは引き受けては駄目です」とも。毎日気分が変わる建築家に終始振り回された顛末をユーモアたっぷりに披露。2013年度東京TDCグランプリを受賞した巨大なアートワーク「Comedy Carpet」は16万個のピースから成るが、「たかさんのゴミが出る。そのゴミが実は素晴らしい。みんなが欲しがって大変」と結んだ。



2013 ADC展

出演者：佐藤卓+中村勇吾+佐野研二郎

ADCグランプリに輝いた「デザインあ」展を巡るトーク。司会のアートディレクター佐野研二郎氏がまず、「6歳になる息子を連れて行ったらものすごい行列。1回諦めて、計3回行った」と明かし、入場者数が22万5千人という圧倒的な評判を呼んだことを紹介。受賞者のアートディレクター佐藤卓氏は「感覚を総動員してもらえよう場をどうつくるかが面白かった」、同じ受賞者の映像ディレクター中村勇吾氏は「モノ・オトと映像の部屋」を担当したが、「子どもの遊園地と展覧会の間みたいなものをイメージすることから始まった」と意図を明らかに。佐野氏が「子どもに先導されて大人も乗って楽しんでいる感じがすごく良かった」と評すると、中村氏は「何か面白いことが起っている。そこに“デザイン”が結び付いていることが大事」、佐藤氏は「計り知れないくらい多くのことを、逆に勉強させてもらった」と確かな手応えを語った。



PARTY そこにいない。展②

出演者：川村真司+中島信也

トーク第2弾はPARTYの川村真司氏がゲストにCM制作の第一人者で映画監督としても活躍する中島信也氏を迎えた。個人での活動もあるなど共通項の多いふたり。まずその経歴が語られた。20歳年少の川村氏は東京生まれでアメリカ育ち。大学では佐藤雅彦ゼミに。佐藤氏は数学への蘊蓄で知られるが、数学が苦手でもゼミに入れたのは、「解けていなくても、考えのプロセスが面白そう」と試験で評価されたから。その延長上に「メディアに関係なく、新しい考え方を提示するものを作る場所」としてPARTYはあるとし、「全部ノリでうまくいった。リスクだと思ってもそれを採ったほうがよい」。中島氏も「ノリと考え方を考えることは重要」と応じた。実制作面では「古い徒弟制度」のもとで鍛えられた中島氏に対して、デジタル環境下にある川村氏は「全体に目が緩くなってきているのでは」と危惧していたのが印象的だった。



PARTY そこにいない。展③

出演者：清水幹太+中村勇吾

トーク第3弾はPARTYの清水幹太氏とインタラクティブ・デザインを牽引する中村勇吾氏の対話。ふたりは東大出身であることも共通。世界から注視される中村氏は、同じフィールドでコンテンツ企画・制作に携わる清水氏にとって「ベンチマークのような存在」であり、中村氏が拓いてきた世界との距離感をどう計るかが念頭にあって打ち明ける。その中村氏は、建築家志望から、ジョン前田に触発されてウェブデザインに転じて後の挑戦を語ったが、「ウェブよりもコンピュータがベーシック」とする発言に自負がにじんだ。清水氏が、代表の伊藤直樹氏から「身体性」が大事だと教え込まれ、それが「要注目ワード」になったと日々の模索を明かすと、中村氏は同様のことを論ざれたことがあると言い、「難しい回路は作らないで、スムーズに身体性が増幅されるようなことを基本的にやっている」と返していたことが興味深い。



PARTY そこにいない。展④

出演者：伊藤直樹+KIGI(植原亮輔・渡邊良重)+伊藤総研

トーク第4弾はPARTY代表の伊藤直樹氏とゲストがKIGIのアートディレクター、植原亮輔氏と渡邊良重さん、それに進行役である編集者・伊藤総研氏。互いに質問を掛け合うかたちでトークは進行。じつは両オフィスは同じビルに入居し、隣同士だが、その方向性には違いが。植原氏が「PARTYの本領であるバーチャル表現には両極端がある」と指摘すると、直樹氏がスタッフ5人それぞれのバーチャル度と作家性の違いに触れ、「僕は長男坊なので、新しいテクノロジーを使って挑戦するよりも、デジタルであるがゆえのメディアのあり方を見直して考える立場。棲み分けている。実際の活動は多岐にわたっていて「僕らも定義できてないほど」と述べて、「僕らも定義できてないほど」と述べた。その棲み分けでは、KIGIのふたりも互いの折り合いの付け方を率直に告白。最後に、総研氏もかかわって両オフィスが協働中の沖繩でのプロジェクト「琉Q」が紹介された。



ヤン・チヒョルト展

出演者：マルチン・F・ル・クールトル+山本太郎

ヤン・チヒョルト展トークは、世界有数の収集を提供したオランダのマルチン・F・ル・クールトル氏とアドビシステムズの日本語タイポグラフィ・シニアマネージャー山本太郎氏を講師を迎えた。司会者がル・クールトル氏の協力を得て本展が実現したことを紹介すると、氏は「単なるアマチュア」と謙遜したが、話は巨星に惹かれた経緯を述べた後、「まさに激動の時代を生きた」波乱に満ちたその足取りを丹念に追って刺激的だった。父親が看板描き、それもあって文字デザインに幼時から馴染み、集めたサンプルの中では日本・中国の書をとくに気に入っていた挿話も。そして幾多の実践の基層部にあるその意義に光を当て、「独特なエレガンス」と「本当の意味での王道を歩んだ」ことを特徴にあげていたことに深く納得。山本氏の発言は、革新者が開示した世界を絶対視せず、検証しながら見ていく必要性を述べて説得力があった。



「指を置く」展 佐藤雅彦+齋藤達也 ④

出演者：齋藤達也+高橋ヒロキ

トーク最終回は、齋藤達也氏とマジシャン高橋ヒロキ氏との対話。テーマは「指先が作り出す脳内現象」。高橋氏はプロになって後の30代前半に東京藝大大学院の佐藤雅彦研究室を卒業したという異色の経歴。マジック以外にも映像表現などの多彩な活躍を展開。齋藤氏は「マジックと今回の展覧会は共通するポイントがある」と前置きし、「現実には起らない現象を簡単に受け入れてしまう」図式などをその例に挙げた。そして「マジックは魔法ではないので必ずトリックがある。変化を起こしたと認識させる仕掛けも重要」とカラクリを明るみに。対して高橋氏は、子ども連れも混じる来場者にトランプを使っての「瞬間移動」ほかのマジックを連発して魅了。あわせて、同じ「びっくりする」でも「ワンダー」と「サプライズ」の違いなどの蘊蓄を披露し、「新しいメディアなり、枠を決めずに自分が面白いものを作り出したい」と抱負を述べた。



トマシェフスキ展 世界を震わす詩学 ①

出演者：フィリップ・ボンゴフスキ

トマシェフスキ展トーク第1回は、息子息のフィリップ・ボンゴフスキ氏。氏は1992年に同じgggで開かれた展覧時に体調の優れない父の代理で母親と一緒に来日したことがあり、2度目の来廊。「日本のポスターデザインに父は非常に尊敬の念を抱いていた」と前置きしたうえで、14歳のときの印刷の勉強に始まる巨星の遍歴を語った。どんなトレンドとも異なる映画ポスター表現により、1948年のウィーン国際ポスター展で金賞に輝いたことが、ポーランド派の「大きな分岐点となった」。そして1952年からは美術学校の教育者となり、独自の指導法を編み出すとともに、「シンプルで抽象性の強い」世界を確立した、と。「父は学生に対してhonestyであることを求めている。あくまでもフェアな人間だった」と。共産党支配などの苦難の道をくぐり抜けてきた偉才の処世訓は、「結局は天気のようなもので、何とかやり過ごさしかたないよね」という言葉に凝縮されるという。



明日のデザインと福島治 [Social Design & Poster]

出演者：福島治+永井一史+並河進

クリエイティブディレクターの並河進氏(電通)と永井一史氏(HAKUHODO DESIGN)をゲストに迎えた。両氏は福島氏とソーシャルプロジェクトのコラボに取り組み中。並河氏はトイレ環境の改善を旨とする「nepia千のトイレプロジェクト」、永井氏は水環境の向上を計る「TAP PROJECT」などの国内外での優れた先行実践を紹介。ついで福島氏が7年前に夫人を亡くした喪失感が契機となって「自分を見直し、デザインの新しい可能性を探りたい」と、両氏に相談したことが発端となり協働が始まった経緯を報告。多くの賛同者も得て、3.11.被災地での「UNICEF 祈りのツリープロジェクト」などから、Tシャツのチャリティ販売により、現地で活動するNPO支援の「GIFTHOPE」へと広がりをみせていることを紹介した。自作解説よりも、デザイナーの社会的責務を優先する福島氏の熱い語り印象深い一夜となった。



トマシェフスキ展 世界を震わす詩学 ②

出演者：矢萩喜徳郎

トマシェフスキ展トーク第2回は、本展監修者であるデザイナーの矢萩喜徳郎氏。氏は1990年度ワルシャワ・ポスター・ビエンナーレで金賞に輝いている縁もあって、ポーランド文化に深い理解を寄せてきた。冒頭、「木を見て森を見ないことを回避する」と講話の姿勢を明らかに。スライドを駆使しつつ、まさにそのとおりに、大きな見取り図を踏まえての巨星の足取り精査が続いた。生誕時は被占領のため「ポーランド」がなかった。その後も国土分割、共産党独裁などの試練に見舞われる中での模索では、ジョン・ハートフィールドらのタダリストやアメリカのソール・スタインバークらとの影響関係も詳らかにした。そして、ポーランド派の鮮やかな台頭は「ポスターを当局が芸術として認めなかったからこそ」と喝破し、巨星の魅力は「メタファに基づく観念の大胆なショートカットをつくり出した」ことにあると熱く語り継いだ。



GRAPHIC WEST 6 大阪新美術館建設準備室デザインコレクション 熱情と冷静のアヴァンギャルド

出演者：菅谷富夫+植木啓子+近藤聡+久慈達也

トークは大阪新美術館建設準備室の菅谷富夫、植木啓子、美術館教育などの幅広い研究にあたる久慈達也、本展告知デザインにあたった近藤聡(明後日デザイン制作所)の4氏が登場。ナビゲーター役の植木さんがまず本展の趣旨を述べ、菅谷氏が「生活の中の美術ということで近代デザインを取り上げるのが大きな柱のひとつ」と美術館構想を披露。久慈氏はヨーロッパを中心に取材を重ねたデザインミュージアムの現状などを紹介。「常に新しい方向に目を向けて更新していく」ことの重要性を訴えた。近藤氏は「デザインの「考え方」に刺激を受けることが非常に多い」と展覧会に足を運ぶ喜びを披露。最後に菅谷氏が「収集にふさわしいかたちをつくる可能性が残っている。これはチャンス」と決意を述べた。



勝井三雄展 兆しのデザイン ①

出演者：勝井三雄

勝井三雄展トーク第1回は、勝井氏単独のレクチャー。生まれ育ったのは江戸・東京文化の中核、日本橋。生家のすぐ近くに、ブルーノ・タウトが絶賛した村野藤吾設計のビルが建っていた。後年、その名匠の作品集を手がけることに。高校生時に丸鬼周造「いき」の構造」を読んで得た格別の示唆。そして、ウルム造形大学を創ったオトトル・アイヒャー、世界デザイン会議でのミューラー・ブロックマン、敏腕編集者の高田宏、舞踏の土方異といった異才との幸運な出会い…。時代を画した仕事では、講談社「現代世界大百科事典」でのシステムティックで精妙なエディトリアルワークほかの鮮やかな達成の紹介が続いた。新著では、「土の記憶」「水を詰す」を経ての第3作「ゆらぎとゆらぎ」について解説。「ゆらぎというのは無限に変化していくけれども、それが何かに気づくことが重要」とし、本展タイトル「兆しのデザイン」と照応させた。



[デー デー デー ジー] グルーヴィジョンズ展

出演者：谷口純弘+ミルクマン齊藤+伊藤弘

TDC展 2013

出演者：新世界タイポ研究会(岡澤慶秀・塚田哲也・秀親)

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 V LIFE 永井一正ポスター展

出演者：永井一正+三木健

2013 ADC展

出演者：KIGI(植原亮輔・渡邊良重)+柿木原政広

大宮エリー展

出演者：大宮エリー+北川一成
「第11回モリサワ文字文化フォーラム」との共催

勝井三雄展 兆しのデザイン ②

出演者：勝井三雄＋室賀清徳＋谷口江里也

勝井三雄展トーク第2回はゲストに詩人でヴィジュアル・アーキテクトの谷口江里也氏と「アイデア」編集長の室賀清徳氏を招いた。勝井氏は順に約15歳違いだと紹介し、谷口氏を「既存の職能の枠にとらわれないアプローチで多くの魅力的な仕事をしている」、室賀氏を「編集ぶりに非常にいつも感動している」と讃えた。対して谷口氏は、勝井氏の「自然の不思議さを感じ取って解析する人間が持つ同様の不思議さ。その接点のところで仕事をしている」ことに、室賀氏は「常に学んで、世界を広げていく姿勢」にエールを送った。ついで3者は、勝井氏が東京教育大学において高橋正人教授から伝授された「構成」に「身体」「色」といったタムを加え、氏独自の創造過程を多角度から検証。「多様性の中にきちっと自分たちが選べる世界をつくっていかないといけない」と、氏が私たちに「最後のメッセージ」を託していたことが胸に迫る。



「指を置く」展 佐藤雅彦＋齋藤達也 ①

出演者：齋藤達也＋門林岳史

「指を置く」展トーク第1回は、本展作家であり、身体とメディアの研究にあたる齋藤達也氏がゲストにメディア論研究者で関西大学准教授の門林岳史氏を迎えた。テーマは「印刷メディアと身体」。齋藤氏はまず「『指』という言葉の語源は「及ぶ」からきている」とし、「身体を越えて事物に及んでいく指の独特の作用」を見つけたことが本展の主題のひとつとなったと明かした。平仮名の「ひ」みたいな形の下部分に指を置く。すると紐を指で引っ張ったように見えるといった展示事例を紹介。齋藤氏を受けて、門林氏は15世紀の印刷技術登場を契機とする身体性の変化を説いた。著名なメディア論者マーシャル・マクルーハンやフランスの哲学者ジャック・デリダなどの学説に言及しつつ、印刷メディアの視覚優位から電子技術時代における聴覚・触覚性への回帰を俯瞰。本展が提起したテーマの思想領域までの広がりを確認できた。



「指を置く」展 佐藤雅彦＋齋藤達也 ②

出演者：佐藤雅彦＋齋藤達也＋入来篤史

トーク第2回は佐藤雅彦氏と齋藤達也氏がゲストに入来篤史氏（理化学研究所脳科学総合研究センター）を迎え鼎談。テーマは「脳科学から見た指を置く」。佐藤氏が教授を務める東京藝術大学（齋藤氏は教え子）と理研が共同研究をした際に佐藤氏は研究所を訪ねたことがあり、それ以来の入来氏との交流。まず本展作家のふたりが展示企図を説明。それを受けて入来氏は、他の動物の脳とは異なり、いかに人間の脳だけが知的な芸術活動が行えるような独自の発達をしてきたかを詳細に解説。それには自分の手が見えて、その中で空間と相互作用することが鍵になると「手の重要性」を指摘。「だから芸術の中に手を介入させるという今回の試みは、生物進化にも沿っており的を射た考え方」との言葉に、佐藤氏も「僕たちがやってきたことがさらに深まりました」とうなずいていた。



「指を置く」展 佐藤雅彦＋齋藤達也 ③

出演者：齋藤達也＋渡邊恵太

トーク第3回は齋藤達也氏が明治大学先端メディアサイエンス学科専任講師の渡邊恵太氏を招いた。まず齋藤氏が本展の趣旨として「実体として存在しないが、何か概念的なものに指が触れている」ことをあげてその現象例を紹介。それを引き継いだ渡邊氏は、学生時代にジェームズ・ギブソンの生態心理学に影響され、身体や知覚といったことに興味を持ったと研究のきっかけを語る。そして「自分の視野の中に手が入ってくるのが重要」というギブソンの言葉から、コンピュータにおける手とは何かと考えカーソルに注目。画面のテキストチャー上にカーソルを載せるとカーソルがブルブル震える「Visual Haptics」など様々な実験的なシステムを紹介した。コンピュータ上の「カーソルは身体の延長」という考え方は、紙上のグラフィックに指を置く今回の展示作品にも通じるものがあり、ふたりの話は尽きなかった。



KM Karel Martens

Speaker : Karel Martens

This was the first solo exhibition – and first talk show – in Japan by this leading Dutch graphic designer. In the first part of his talk Martens introduced some of the behind-the-scenes influences on his various works. He spoke of how on one occasion he realized he had forgotten a certain letter, and then when he added it, the work was all the more beautiful – an experience, he said, that taught him that we receive and learn many things from our mistakes, just as we do in life. In his project alluding to a magic square, Martens said he was seeking a new relationship between colors and numbers. “Numbers are very important. They even seem to have a magical presence,” he suggested in explaining his reasoned explorations. Referring to his telephone card work PTT Telecom, he revealed that he had added a variety of colors using his typewriter and handmade carbon paper, enabling him to study how to use multiple colors. “Focusing on processes and systems such as these is of extreme importance,” he said enthusiastically.



Why Not Associates – We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong

Participants : Andy Altmann + David Ellis

This Gallery Talk was presented by the two principals of this London-based design studio always in the global eye. They revealed that the title of their exhibition borrowed from the words of a well-known British comedian, and they joked that starting out with a specific plan always invites failure. Altmann and Ellis said they also take an easygoing approach to operating their studio. When they once received a phone call asking them to create a postage stamp for the Queen, their first response was, “Are you sure you haven’t called the wrong number?” They also advise that one should never accept a job offer for a project by an architect. With great humor they revealed how they had once been subjected to the daily changing whims of an architect. In closing, they spoke of their giant-sized artwork “Comedy Carpet,” which won the 2012 Tokyo TDC Grand Prix. It was made from 160,000 separate pieces, and “it produced a lot of trash – terrific trash that a lot of people wanted!”



2013 Tokyo Art Directors Club

Participants : Taku Satoh + Yugo Nakamura + Kenjiro Sano

This Gallery Talk focused on the “Design Ah” exhibition that won this year’s Tokyo ADC Grand Prize. Art director Kenjiro Sano, who served as moderator, opened on a personal note. “I first went to the show with my 6-year-old son, but the queue was unbelievably long,” he revealed. “I gave up on that occasion, but later went a total of three times.” He told the audience the show had attracted a phenomenal 225,000 visitors in total. Art director Taku Satoh, a prizewinner, said he thought the show was interesting in the way it demonstrated how to create a venue that appeals to the full complement of one’s senses. Creative director Yugo Nakamura, also a prizewinner, was in charge of the “Room of Things, Sound and Video”; he said he began with the idea of creating something between a children’s amusement park and an exhibition. Mr. Sano gave high marks to the way the show initially attracted children and then the adults were quickly drawn into the enjoyment as well.



PARTY Not There. Exhibition (No.2)

Participants : Masashi Kawamura + Shinya Nakajima

For PARTY’s second Gallery Talk, Masashi Kawamura welcomed as his guest Mr. Shinya Nakajima, a film director and leading creator of commercials. Mr. Kawamura was born in Tokyo and raised in the U.S. In college he took an advanced seminar course taught by Masahiko Sato, who is known for his extensive knowledge of mathematics. The reason Mr. Kawamura was able to join the class was not because of his high test marks, but because of his thought process which caught Mr. Sato’s interest. He said that PARTY is an extension of that: a place where he can create things that present new ways of thinking, regardless of whatever media. Mr. Nakajima concurred. “It’s important to think on a whim and to think things through,” he offered. In terms of actual artistic creation, whereas Mr. Nakajima underwent his training under the old “apprentice” system, Mr. Kawamura, who works in the digital environment, expressed concern over the possibility that the design world in general may be gradually losing intensity.



PARTY Not There. Exhibition (No.3)

Participants : Qanta Shimizu + Yugo Nakamura

The third PARTY Gallery Talk brought together PARTY’s Qanta Shimizu and Yugo Nakamura, a leading force in interactive design. Besides their professions, the two men share a common alma mater: the University of Tokyo. Mr. Shimizu, who takes part in the planning and production of contents, said that for him Mr. Nakamura, who works in the same field and garners much global attention, is “a kind of benchmark.” He revealed that he had in mind how to measure the distance between his own creative world and that of Mr. Nakamura. Mr. Nakamura had originally aspired to become an architect, but after encountering the work of John Maeda he switched to web design. From PARTY CEO Naoki Ito Mr. Shimizu was taught the importance of “physicality,” and that has become a challenging word he confronts daily, he revealed. Mr. Nakamura responded that he had been advised the same thing, and he had replied, “Basically what I do is not to take the difficult path but rather to do things in such a way that physicality is amplified smoothly.”



PARTY Not There. Exhibition (No.4)

Participants : Naoki Ito + KIGI (Ryosuke Uehara, Yoshie Watanabe) + Soken Ito

PARTY’s fourth Gallery Talk welcomed KIGI’s two art directors, Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe. Editor Soken Ito served as emcee. The talk proceeded in the form of a series of questions posed by the participants to each other. PARTY and KIGI actually have offices next to one another in the same building, but their artistic directions are very different. Mr. Uehara suggested that there are “two extremes” to the virtual expression that PARTY so excels in. In response CEO Ito spoke of the different degrees of virtuality and differences in artistry among PARTY’s five staff members. “I’m like the eldest son. Rather than taking up new challenges using new technologies, my position is to rethink approaches distinctive to digital format media to media. I make a clear division between the two.” PARTY’s activities are actually very diverse, and Mr. Ito said what they do defies definition. With respect to making clear divisions, the two members of KIGI also confessed how they must make mutual compromises.



Ellie Omiya Exhibition (No.1)

Participants : Ellie Omiya + Katsumi Asaba + Kaoru Kasai

The Ellie Omiya Exhibition and all three Gallery Talks drew to a close amid high acclaim, having attracted a large number of young women especially. The first talk session had two guests: art directors Katsumi Asaba and Kaoru Kasai. Mr. Asaba and Ms. Omiya know each other from having both served as judges for the Asahi Advertising Awards. Mr. Kasai had created the poster for the first film Ms. Omiya directed. The discussion among these three individuals, in which among other things they discussed their careers, was lively from start to finish. In primary school Ms. Omiya had been bullied, but on the advice of her mother ultimately she was able to turn the tables around completely. In a similar way, for the first seven years after she began working for an ad agency, she failed to do anything that attracted notice; then just before she was about to quit, she won an award as a new copywriter. "The nicest things in life generally occur at the end," she says meaningfully.



Ellie Omiya Exhibition (No.2)

Participants : Ellie Omiya + Hiroshi Ito + Kazunari Hattori

The guests for her second Gallery Talk were two art directors, Hiroshi Ito (groovisions) and Kazunari Hattori. Five minutes before the talk began, Mr. Ito suddenly made a comment, "It's exploding downstairs, isn't it!" – which was a critique of her new work, "Rising Dragon" – that caught Ms. Omiya's fancy. She voiced her true feelings this way: "Drawing it was difficult; it's always hard to reach one's point of compromise." Mr. Hattori had been asked to create the titles for Ms. Omiya's first directed film. Handwritten, they weren't ready until the day immediately before the film was to premiere. Mr. Hattori talked about how he had wanted to create a sense of the titles fluttering in the wind, so he had a fan blow on paper pasted to a stick, and Ms. Omiya had shot the result using her own camera. In assessing Ms. Omiya, who is more than 10 years their junior, in a nutshell, Mr. Ito said the way she creates a process is phenomenal; Mr. Hattori said she has a sense of mission that borders on excessive.



Ellie Omiya Exhibition (No.3)

Participants : Ellie Omiya + Akiya Takahashi + Issay Kitagawa

The guests for Ms. Omiya's third Gallery Talk were Akiya Takahashi, director of Mitsubishi Ichigokan Museum, Tokyo, and designer Issay Kitagawa, who had recommended holding this exhibition and who was in charge of layout and publicity design. Mr. Kitagawa, on seeing a few commercials by Ms. Omiya, said something attracted him – it exuded a freshness different from the usual, and that provided the opportunity for focusing his attention on this unusual talent. Mr. Takahashi had called on Ms. Omiya to create the publicity copy for an exhibition marking the showing of the elusive masterpiece "Grand Bouquet" by Odilon Redon, which his art museum had purchased. This had been the first collaboration between Ms. Omiya and Mr. Kitagawa, who was in charge of design. According to Mr. Takahashi, her pure and unadulterated copy – "It's here!!! The first time in Japan!!!" – was so interesting, it aroused such a huge response that the museum's website nearly crashed.



PARTY Not There. Exhibition (No.1)

Participants : Naoki Ito + Qanta Shimizu + Hiroki Nakamura + Masashi Kawamura + Koichi Kawajiri

To start with, editor Kouichi Kawajiri, who served as moderator, inquired how PARTY arrived at its name. Mr. Ito divulged that the members had agonized over the issue for quite some time when, out of the blue, Mr. Nakamura casually suggested the word "party" – and that set the ball rolling. "What we had in mind was a party formed as an attractive and outstanding team to tackle multifarious goals, to create something never seen before," Mr. Nakamura added in. At that point Mr. Kawajiri pointed out that the word "PARTY" contains the word "ART," which took the conversation to a deeper level, touching on topics such as the meaning imbued in their exhibition, the traits unique to each of PARTY's four members, and the group's intuitive "literary" aspect – not according first priority to technology – that ties them all together. Their discussion focusing on the "contexts" unique to Japanese design, even as they remain active globally, was highly stimulating.



PARTY Not There. Exhibition (No.5)

Participants : Hiroki Nakamura + Yoshimitsu Sawamoto

The fifth and final PARTY Gallery Talk was led by PARTY member Hiroki Nakamura, with Dentsu's Yoshimitsu Sawamoto, one of today's most brilliant commercial planners, as his guest. Mr. Nakamura, who creates interactive campaigns, was himself originally an employee in Dentsu's advertising department, and he said he has long been supported by Mr. Sawamoto. When asked for his comments on the PARTY exhibition, Mr. Sawamoto said he thought most highly of the TV screen exhibits, which when you press any channel button on the remote control, the command goes to the person in the TV screen, and changes the channel for you. Next, Mr. Sawamoto gave an introduction of his representative works, and he commented on his unique dramaturgy, which ends up to the defining word expressing the product's special features. "It's best when the viewer can get involved. I intend to create something that will intentionally invite the viewer to think something's strange."



Rikako Nagashima Exhibition: "Between human and nature" (No.1)

Participants : Rikako Nagashima + Kaoru Kasai + Soken Ito

For the trio of Gallery Talks titled "Rikako's Room," Ms. Nagashima herself served as moderator, assisted by editor Soken Ito. Her guest for the first session was art director Kaoru Kasai. In 2010, when Ms. Nagashima was in Sapporo to attend a ceremony, Mr. Kasai was holding a solo exhibition in the city. His works on show were accompanied by a message saying that having been born and raised in Hokkaido has had a special influence on him – remarks that Ms. Nagashima says moved her to tears and encouraged her. During their talk Ms. Nagashima reminisced about her own childhood growing up in the boonies of Ibaraki Prefecture, and she and Mr. Kasai shared their sentiments about how their hometowns had provided the source and mainstay of their design work. Mr. Kasai offered Ms. Nagashima his kudos for her copy created for Laforet Harajuku: "be noisy." When Mr. Ito asked what the two share in common, Mr. Kasai replied, "a sense of airiness between elements."



Rikako Nagashima Exhibition: "Between human and nature" (No.2)

Participants : Rikako Nagashima + Takuma Takasaki + Soken Ito

The guest at Rikako Nagashima's second Gallery Talk was Takuma Takasaki, executive creative director at Dentsu. To begin, Ms. Nagashima addressed Mr. Takasaki, for whom she said she has great respect as someone whose words have deepening impact over time. She introduced Mr. Takasaki's diverse activities including commercial films, novels, scriptwriting and preparation of the plan to win the 2020 Olympics. Mr. Takasaki spoke in detail about the concepts behind his hit commercials. He said that in whatever he creates, he always aims to be truthful. Mr. Takasaki also talked about the influence on him of his stern father, whom he referred to as an "eccentric journalist," while Ms. Nagashima talked about her mother, who struggled working at a facility for the disabled. This Gallery Talk brought into high relief the sources of Ms. Nagashima and Mr. Takasaki's clearly defined sense of mission.



Rikako Nagashima Exhibition: "Between human and nature" (No.3)

Participants : Rikako Nagashima + Zenta Nishida + Soken Ito

As guest for her third and last Gallery Talk, Rikako Nagashima met with Zenta Nishida, editor-in-chief of "BRUTUS" magazine. Originally an adman at Hakuodo, Mr. Nishida offered the view that a magazine is the manifestation of what everyone on its editorial staff thinks and likes. They made their acquaintance on an occasion when Mr. Nishida was out drinking in Shibuya with co-workers and Ms. Nagashima "crashed" the party. Ms. Nagashima told of how she vividly recalls having vented her misgivings that evening about working in advertising, and Mr. Nishida had responded that the answer was entirely to be found in where she spent her childhood. Mr. Nishida grew up in the Komaba area of Tokyo, and from a young age he read widely, especially books relating to entertainment. By contrast, Ms. Nagashima reminisced over her own "modestly rebellious" adolescence in Ibaraki, when she was reading "recycled books that were collected at the local community center."



ggg, ddd Gallery Talk Overviews

Jan Tschichold

Participants : Martijn F. Le Coultre + Taro Yamamoto

Martijn F. Le Coultre of the Netherlands, who furnished one of the world's foremost collections of Tschichold's works, led the talk with Taro Yamamoto, Senior Manager of Japanese Typography at Adobe Systems. Mr. Le Coultre related how he came to be attracted to the works of this great master, it became clear that he had meticulously traced Tschichold's footsteps through an era fraught with major upheavals. Tschichold's father had been a sign painter, and under that influence he was familiar with lettering design from an early age. Among the samples he collected, Tschichold had been particularly fond of calligraphy from Japan and China. Mr. Le Coultre highlighted the significance within the substratum of Tschichold's numerous practices and characterized his work by its "unique elegance" and how he followed the "high road" in the true sense. Mr. Yamamoto convincingly stated that one should not view the world disclosed by this innovator in absolute terms, but rather one needs to look at it with a critical eye.



Tomaszewski, The Poetic Spirit (No.1)

Speaker : Filip Pagowski

Mr. Pagowski, Tomaszewski's son, had previously visited ggg, in 1992 on the occasion of the first Tomaszewski show. He prefaced his remarks by saying that his father had had extremely great respect for Japanese poster design. He then proceeded to relate Tomaszewski's biographical details, commencing with how he had studied printing at the age of 14. Mr. Pagowski noted that Tomaszewski's winning of the Gold Medal at the International Poster Exhibition in Vienna in 1948 for his film poster totally out of the trend had marked a major turning point in the Polish School. In 1952 Tomaszewski began teaching at an art school, where he devised his own unique method of instruction and established what Mr. Pagowski described as his "simple and highly abstract" world. "Father demanded honesty from his students," he said. "He was a fair human being in every way." Tomaszewski's guiding principle in his life fraught with great hardships, not the least of which was rule of his country by the Communist Party had been expressed in a short phrase; "Politics is like the weather, you have to live with it."



Tomaszewski, The Poetic Spirit (No.2)

Speaker : Kijuro Yahagi

Designer Kijuro Yahagi, who served as advisor of the exhibition, has shown a deep understanding of Polish culture, partly under the influence of his winning of the Gold Prize at the 1990 International Poster Biennale in Warsaw. He began by clarifying the stance of his talk: to avoid not seeing the forest for the trees. He did precisely that, using slides to examine in detail the tracks of Tomaszewski's career. At the time of his birth, "Poland" did not exist: it was under foreign occupation. Subsequently his homeland was visited by other ordeals – partitioning of its territory, autocratic rule by the Communist Party, etc.; but Tomaszewski had found kindred spirits in Dada artists such as John Heartfield and America's Saul Steinberg. Mr. Yahagi proclaimed that the brilliant emergence of the Polish School was achieved precisely because the governing authorities had not recognized posters as a legitimate art. With impassioned excitement he described Tomaszewski's appeal as his having carved out a bold conceptual short-cut based on metaphor.



Mitsuo Katsui Exhibition – Design of Symptom (No.1)

Speaker : Mitsuo Katsui

The first Gallery Talk featured a lecture by Mr. Katsui himself. He was born and raised in Nihombashi, the focal point of Edo and Tokyo culture. Very close to his house was a building designed by Togo Murano that had won great praise from Bruno Taut. In later years Mr. Katsui would compile a collection of this great master's works. In his secondary school years Mr. Katsui says he received a special hint from reading Shuzo Kuki's "Iki" no kozo (The Structure of "Iki"). He has also had the good fortune to meet many individuals of great genius: people like Otl Aicher, Josef Muller-Brockmann, Hiroshi Takada and choreographer Tatsumi Hijikata. Among his epochmaking undertakings, he introduced his fine, systematic editorial work for Kodansha's "Encyclopedia World Now" and other brilliant achievements. Mr. Katsui also spoke about his new book Yuragi to yuragi (Fluctuations). "Yuragi undergo never-ending changes," he explained, "but what's important is to realize what those changes are."



"Putting Finger" Masahiko Sato + Tatsuya Saito (No.4)

Participants : Tatsuya Saito + Hiroki Takahashi

The final Gallery Talk consisted of a conversation between Tatsuya Saito and magician Hiroki Takahashi. The chosen topic was "cerebral phenomena created by the fingertips." In addition to magic, Mr. Takahashi is active in a broad array of fields including video art. Mr. Saito opened the discussion with a comment that magic and this exhibition have points in common, and as an example he cited how phenomena that don't really exist are readily accepted. He then added that "magic isn't really magic: there is always some trick involved," and he said what's also important is for there to be a mechanism that induces the perception that some change has occurred – thus bringing the magician's "secret" to light. Next, using a deck of cards Mr. Takahashi proceeded to fascinate the audience, which included some children, with various "magic" techniques including teleportation. He also spoke astutely on the difference between "wonder" and "surprise," both of which are forms of entertainment.



Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster

Participants : Osamu Fukushima + Kazufumi Nagai + Susumu Namikawa

The greeted two guests were creative directors Susumu Namikawa of Dentsu and Kazufumi Nagai of Hakuholdo Design. After the two guests had presented each of their social activity, Mr. Fukushima described how he came to collaborate with these outstanding pioneering endeavors. It all came about after Mr. Fukushima, feeling a deep sense of loss after his wife's death, had gone to these two for advice. "I want to start all over again, this time probing for new possibilities in design," he had told them. With support from many people, he started with UNICEF's Prayer Tree Project in the region devastated by the earthquake and tsunami of March 11, 2011. This has expanded to GIFTHOPE, a project to support NPOs active in that region through donations of proceeds from the sale of T-shirts. Even more than Mr. Fukushima's explanations of his work on exhibit, the passion he displayed in relating his priorities as a designer to social responsibility left a deep impression on his audience.



GRAPHIC WEST 6: Osaka City Museum of Modern Art Collection Modern Avant – Garde Graphics

Speakers : Tomio Sugaya + Keiko Ueki + Satoshi Kondo + Tatsuya Kuji

Four participants took part in this Gallery Talk: Tomio Sugaya, Chief Curator of the Osaka City Museum of Modern Art Planning Office; Keiko Ueki, Curator with the same affiliation; Tatsuya Kuji, who undertakes a broad range of research in art museum education etc.; and graphic designer Satoshi Kondo of Asatte Design Office, who designed the publicity for this exhibition. Ms. Ueki, serving as moderator, began by introducing the aims behind the exhibition. Mr. Sugaya spoke of the concept for the new art museum, saying that a major pillar is to focus on modern design as art that forms part of our everyday lives. Mr. Kuji spoke of the situation of design museums primarily in Europe where, based on his own findings there, attempts are under way to provide the environment itself for creating such museums. He expounded on the importance of continuously redirecting one's eyes toward new directions.



groovisions Exhibition: "dddg"

Participants : Sumihiro Taniguchi + Milkman Saito + Hiroshi Ito

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

Participants : Shinekai Type Study Group (Yoshihide Okazawa, Tetsuya Tsukada, Hidechika)

DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

Participants : Kazumasa Nagai + Ken Miki

2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Participants : KIGI (Ryosuke Uehara, Yoshie Watanabe) + Masahiro Kakinokihara

Ellie Omiya Exhibition

Participants : Ellie Omiya + Issay Kitagawa cosponsored by MORISAWA

**Mitsuo Katsui Exhibition
– Design of Symptom (No.2)**

Speaker : Mitsuo Katsui + Kiyonori Muroga +
Elia Taniguchi

The guests for Mitsuo Katsui's second Gallery Talk were poet and vision architect Elia Taniguchi and editor-in-chief of "idea" magazine Kiyonori Muroga. Mr. Katsui opened by words of admiration for Mr. Taniguchi, that he has done a great deal of attractive work from approaches outside existing professional frameworks, and for Mr. Muroga, saying he is always extremely moved by the way he edits. Mr. Taniguchi in turn voiced praise of Mr. Katsui, stating he has the ability to perceive and analyze the wonders of nature – and it is at this junction that Mr. Katsui works. Mr. Muroga lauded Mr. Katsui for his stance of continuously learning and expanding his world. Next, the three participants examined Mr. Katsui's unique creative process from numerous angles, adding the terms "body" and "color" to the "composition" Mr. Katsui learned from Professor Masato Takahashi at Tokyo University of Education. As his final message, Mr. Katsui advised that we have to be sure to create a world of our own choice.



**“Putting Finger”
Masahiko Sato + Tatsuya Saito (No.1)**

Participants : Tatsuya Saito + Takeshi Kadobayashi

For this first Gallery Talk, featured artist Tatsuya Saito, who undertakes research in the human body and media, greeted as his guest Takeshi Kadobayashi, Associate Professor at Kansai University, a scholar of media theory. The topic of discussion was "printing media and the human body." Mr. Saito began by pointing out that "yubi," meaning "finger," derives from the verb "oyobu," meaning "to reach." He revealed that discovering that the unique action of the fingers, the act of reaching out beyond the body to touch things, became one of the subjects of this exhibition. In response Mr. Kadobayashi explained changes that occurred in physicality as a result of the arrival of printing technology in the 15th century. Making reference to the theories posited by renowned media theorist Marshall McLuhan and French philosopher Jacques Derrida, he presented an overview of the shift from the former visual supremacy of the printing media to a return to aural and tactile aspects in the age of electronic technology.



**“Putting Finger”
Masahiko Sato + Tatsuya Saito (No.2)**

Participants : Masahiko Sato + Tatsuya Saito +
Atsushi Iriki

The second Gallery Talk brought together featured artists Masahiko Sato and Tatsuya Saito and their guest, Atsushi Iriki of the Riken Brain Science Institute (BSI). Their topic of discussion was finger placement from the perspective of brain science. To begin the discussion, Mr. Sato and Mr. Saito explained the aims behind their exhibition. Next, Mr. Iriki offered a detailed explanation of how, unlike the brains of other animals, the human brain alone underwent unique development that enables humans to engage in intellectual artistic activities. He pointed out the "importance of hands," our ability to see our own hands and to interact with space in them. "That's why this experiment in making our hands intervene in art is so much on the mark," Mr. Iriki said. "It's in accordance with biological evolution." Mr. Sato was duly impressed. "Now what we've done has become all the profounder."



**“Putting Finger”
Masahiko Sato + Tatsuya Saito (No.3)**

Participants : Tatsuya Saito + Keita Watanabe

In the third Gallery Talk, Tatsuya Saito met with Keita Watanabe, Senior Assistant Professor in the Department of Frontier Media Science at Meiji University. Mr. Saito opened by introducing an example, in line with the aim of the exhibition, of the phenomenon of having the finger touch something conceptual that doesn't actually exist. Mr. Watanabe then spoke of how he came to do research in his field, saying how as a student he had been influenced by James J. Gibson's "ecological psychology," awakening an interest in our physical beings and sense perceptions. Gibson had pointed out the importance of our hands coming into our own field of vision, which made Mr. Watanabe think about what corresponds to hands in the realm of the computer, and he hit upon the cursor. The idea of a cursor being an extension of our bodies in the computer context has much in common also with the works on exhibit, where the observer places a finger on a paper graphic. The talk was lively and left open much room for further discussion.



Gallery Talk

KM カレル・マルテンス

カレル・マルテンス

カレル・マルテンス 今回こういう展覧会の準備に当たっては関係者の皆さんには特別のご支援を賜りました。また、本展に合わせて作ったカタログ『フルカラー カレル・マルテンス』では、会場設計もしてくれた編集・デザインのジュリー・ピーターズ、執筆のデイヴィッド・シニア、ここに来ている写真のヨハネス・シュワルツといった方々のご尽力に御礼申し上げます。

私が実際にコミッションワークを作るにあたって、アンコミッション、すなわち自発的に作ってきた作品が、どういふ影響を私自身に与えてきたのかをはじめに紹介したいと思います。

1960年代、私は兵役義務に服していたのですが、ガールフレンドにあてた手紙を書くときに、必ず封筒にこういった模様を施していました。レゴを使ってプリンティングしたものです。これは後になってのことですが、私がある人物についての専門的な執筆をしているときに、その研究の一環としてアムステルダムのステデリック・ミュージアム(市立近代美術館)に通っていました。そのとき収蔵作品目録のカードをデジタル化するためにそれらすべてを処分しようと美術館が動いていたんですね。それを拾い出して作品化したものを今ご覧いただいています。

次に紹介するのは、86~87年に実際に出版された、教育者のための研修や教育プログラムなどを束ねていく団体のための目録です。小さなオフセット用のプリンターを使わなければいけないという制約は、私にとって逆に非常に気に入った条件でした。ここで出した提案は、ページを半分に折り畳み、中に必要な情報を入れていき、外側の耳のところに、例えばシアターとかミュージックとかいった項目ごとの数字を印刷していく。しかも深くかませることによって、本のページをめくると単語として読め、ついでに目次の機能を果たす。そういったコンセプトを出しました。

これは出版をやっている親しい友人ロビン・キノスのために制作したものです。彼は私の作品集『printed matter / drukwerk (印刷物)』を出版してくれました。彼のガールフレンドの名前に因んでRとNとを組み合わせています。これも先ほど同様にアーカイブカードを使っています。

これはルーマニアで開かれたオランダのグラフィ

ックデザインを紹介する展覧会のためのもの。

「terra incognita (テラ・インコグニータ)」というタイトルは「まだ探検されていない大地」という意味です。実は超低予算だけれども協力してほしいと、キュレーターがポスター・デザインを招待作家に依頼してきました。そこで私は初めてコンピュータMacを手に入れて、黒いところは全部Macでやった初の制作物になります。紙の大きさをうまく組み合わせ、付き合わせるとA4がA3になり、そしてA2になるという変化を利用して、チラシ大からポスター大まで落とし込んでつなげていけるようなデザインにしました。

今ご覧いただいているのは皆さまお気づきと思いますが魔方陣です。この魔方陣というのは、イスラム建築の中における基本的な要素のひとつとして長年にわたって使われてきています。私自身、数字というのは本当にひきつけられてやまない、すさまじい魅力をもっています。この魔方陣の考えを踏まえ、私たちがずっと印刷物で使っている3原色+黒という4つの色と数字との間のいろいろな関係を探ってみたいと思ったのです。例えばこういった黄色い明るい色、そしてほかの色合いが重なることによって新しい色が生まれてくる。そこから新しい関係性が見えてくる。このようにして私はやってきたのです。

その数字を使ったプロジェクトが郵政公社のテレフォンカードです。当時、通信関係を総括している部局から、どちらの方向にも特徴をもっていないニュートラルなテレカを作りたいと依頼されました。もともとオランダには何か事あるごとにそれを記念するカードで溢れていました。しかし、中立的なものということですので、私がずっと抱えている数字へのこだわりと、4色を使って私たちは仕事を続けているんだという思いとを組み合わせた提案をしたわけです。

もう一つ、公衆電話のためのテレカを作ったときには、自分のタイプライターと自家製のカーボンペーパーを使っています。クレヨンでペーパーの裏にいろんな色をつけ、それを自分でパチパチとタイピングして行って、この多色の展開法を研究しました。私にとってこういったプロセスで作り込む作業自体が、建築家が最初は小さなものから作り上げて行って、大きなそびえたつ建物を造る



のと同じように、きわめて重要なことなのです。

私は建築物のサイン計画や壁面デザイン、パブリックアートをいくつも手がけてきました。これは私が1991年から関わっている建築批評誌『Oase』の編集長だった建築家がその後かなり名をあげたのですが、その建築家から協力を依頼されたプロジェクトです。砂漠のような荒涼とした工業団地にある印刷工場のファサード部分のデザイン依頼でした。そんな立地でしたから、私はカール・スキッパーという友人である詩人の詩を施すことにしました。頑張れば読めて、詩としてちゃんと鑑賞できるものになっています。

このハーレムにある音楽ホールはリノベーションプロジェクトに協力したものです。ルイ・アンドリーセンというオランダの有名な作曲家に4つの楽器のための曲を作ってもらい、その曲を音波計で計測したスペクトログラム(Spectrogram)としての文様をガラス面に印刷しました。

今回の展覧会の目玉は、すでにちょっと触れましたが、デルフト市にある大学の建築学部との提携で始まった『Oase』のすべての号を地下に展示できたことかと思えます。約25年間を振り返ってということでご覧いただいています。特色としては各号に必ずひとり、学生が加わって編集にあたっていているということです。ですからこれはずっと学生との協同、協力関係を通じて生まれてきた雑誌であるということでもあります。

Gallery Talk

KM Karel Martens

Karel Martens

Karel Martens In preparing for this exhibition, I received extraordinary support from everyone concerned. I would also like to express my appreciation to the people who were involved in putting together the catalogue created in tandem with this exhibition, *Full Color Karel Martens*: Julie Peeters, who undertook the editing and design work and as well as the layout design of the exhibition; David Senior, who wrote the text; and Johannes Schwartz, here with us today, who handled the photography. To begin, I would like to introduce how, in creating commissioned works, I have been influenced by the works I have done on an uncommissioned basis, that is, of my own free will.

In the 1960s I was serving out my compulsory military service duties, and whenever I wrote a letter to my girlfriend, I would invariably decorate the envelope with a design of this sort. It's printed using Lego. Long after that, when I was writing a special piece about a certain person, as part of my research I paid frequent visits to the Stedelijk Museum in Amsterdam. At the time the museum was taking steps to digitalize its card catalogue for the works in its collection, intending to throw away the existing cards. The work you see here was made from those cards, which I picked up and kept.

Next I'd like to introduce a catalogue, actually published in 1986 or 1987, that I did for a group collating training and education programs for teachers. I was restricted to using a printer for small offset work, but this was actually a condition that I found much to my liking. The proposal I made here was to fold the pages in half and put the necessary information inside; on the outer "ears" I printed numbers for each category: for example, theater or music. Moreover, by wedging them in deeply, they could be read as words as the book's pages are turned, thus fulfilling the role of a table of contents. That's the kind of concept I produced.

This is a work I did for a close friend, Robin Kinross, who works in publishing. He published my anthology *Printed Matter/Drukwerk*. From the name of his girlfriend, I combined the letters R and N. This too, like the work I showed you a

few moments ago, uses archive cards.

This work was done for an exhibition held in Romania to introduce Dutch graphic design. The title, "Terra Incognita," refers to land that has yet to be explored. Actually, the curator of the show had asked for cooperation from the invited artists in designing posters despite an extremely small budget. At that point I got my very first Mac computer, and proceeded to create my first work using a Mac for all the black areas. By adroitly combining and juxtaposing the paper sizes, size A4 became A3, and then A2. Using these changes, I created a design that enabled me to tie everything together from pamphlet size to poster size.

What you see now is, as I think you all know, a magic square. The magic square has long been used as one of the fundamental elements of Islamic architecture. I myself am greatly attracted to numbers, which I think have phenomenal appeal. What I wanted to do was to probe various relationships between numbers and the four colors we've long used in printed matter – three primary colors plus black. As an example, when you take this bright yellow and place another shade over it, a new color results. Out of this a new relationship comes into view. This is how I have done things through the years.

A project that used numbers was the telephone cards I created for the Dutch postal authority. At the time I was asked by the bureau in charge of communications to create telephone cards that would be neutral, i.e. have no particular special features in any direction. The Netherlands was already overflowing with cards to commemorate every event that happened. But since I was asked to make something neutral, I suggested combining my long fascination with numbers and the notion that we continue to work using four colors.

Another time, when I made telephone cards for public telephones, I used my personal typewriter and homemade carbon paper. Using crayons I added various colors to the back side of the paper, then I proceeded to type on it, enabling me to study how this multicolored process played out. To me, work created by a process such as this is extremely important, in



the same way that an architect starts with something small and builds it up into a large soaring structure.

I've also worked on any number of projects involving signage planning or wall design for buildings, public art and the like. This is a project I was asked to help with by an architect, who later became very famous, who was editor-in-chief of *Oase*, a magazine on architecture I've been involved with since 1991. I was asked to design the façade of a printing factory situated in an industrial park that was barren like the desert. Because of the location, I decided to adorn the façade with a poem by a friend of mine, the poet Karel Schippers. With time and effort, it can actually be read and appreciated as a poem.

I cooperated in a project to renovate this music hall in Haarlem. I asked a famous Dutch composer, Louis Andriessen, to compose a work for four instruments, and this was printed into the glass surfaces as a spectrogram that took readings of the composition by audiometer.

The star attraction at this exhibition, I believe, is something I have already touched on briefly: the *Oase* magazine which I started in a tieup with the architecture faculty of a university in Delft. All issues are on display in the downstairs gallery. They provide a retrospective look back over some 25 years, and one aspect that makes the magazine special is that each issue always has one student participating in its editorial work. In that respect *Oase* is also a magazine that was born through cooperation and collaboration with students.

Gallery Talk

PARTY そこにいない。展 ①

伊藤直樹、清水幹太、
中村洋基、川村真司、河尻亨一



河尻亨一 PARTYの皆さんが4人揃って人前で話すのは貴重な機会だと思っています。そこで今日は「PARTYの解剖」というテーマにしてメスをふるってみたいと。まずおうかがいしたいのですが、なぜPARTYという名前にしたんですか？

伊藤直樹 会社を作ることになってから、夜な夜な会議をして何百と案が出ましたが、結構悩んだ末、あるとき(中村)洋基さんがぼろっと言ったんです。「PARTYはどうでしょう?」と。

中村洋基 ドラクエなど、ロールプレイングゲームのチームのこともパーティーと言いますよね? 魅力あるチームたちがそれぞれ徒党を組んで、いままで見たこともないものを作ろうというイメージです。そこに「パーティーで盛り上がるうぜ」の意味も入ってダブルミーニングになるといいかなと。後付けですが(笑)。

河尻 このネーミングの中に「ART」という言葉が隠れているのも「らしい」と思うし、「PARTY そこにいない。展」という展示ネーミングも「らしい」気がします。

川村真司 「そこにいない。」は伊藤さんが出したワードです。いまはその場所にいなくても相手とつながることができる社会になっており、そんな時代に僕たちもインタラクティブやデジタルの作品を作っているわけですが、その一方でデジタルでは追いつけないリアルの世界もある。だからこそ「その両者の関係性を掘ることで何か新しいものが生まれてくるのでは?」と僕は受け止めました。

伊藤 狙いとしてはまさにそういうことです。最初は「会場に展示物をまったく置かないとしたらどうなんだろう?」という話もしていました。たとえばどこかの公園に作品が置いてあって、それを会場から見るようなことができないかな? なんて。でも、それだと展示としてあまりにシュールすぎますから(笑)。

中村 技術の進化で世の中が便利になるというのは、ほとんど「短縮」による恩恵だと思うんです。電話に続いてメールができて、いまではテキストでも動画でも、ものすごいスピードで情報が伝達できるようになっています。でも実は、短縮の向こうにある「拡張」にも可能性があるわけですね。余った時間で人間はとんでもなく新しい何かをやり始めるかもしれない。あえてそこを実験的

に追求するアウトプットになると面白いんじゃないかと僕は思いましたね。

清水幹太 さっきの「PARTYらしさ」の話で言うと、この4人はある種「文学的」なところで通じ合える人たちだと私はよく思います。

川村 幹太さんの言う「文学」は「物語」とも言い換えられるのでは? 僕らはストーリーを伝える手段としてテクノロジーを使っているだけで、それありきというわけではないんです。今回の展示に関しても、ヘルメットを被ることで3D化されたインターネットの世界に入りこめる作品やホワイトサンズの風をリアルタイムで感じられるでかい扇風機、トイレとバイクが合体したマシーンなど、アイデアと技術同士の組み合わせで、「どうやればこれまでにない体験を生み出せるか?」といったことに関心があります。

伊藤 四人は個性はバラバラですが、大きなゴールとして共有できているのは「広告の痛快さ」ですね。

清水 痛快さという意味では、私の場合、作ったものが世に出たときの「これでも食らえ感」みたいなものは大事にしていますね。いい意味での「暴力性」というのか、どうすればみんなに驚いたりワクワクしてもらえるのか。そうならないとメッセージも届かないわけですから。

伊藤 そして、その痛快さを達成するためには、アイデアが「シンプル」じゃないと。たとえばカンヌ(国際クリエイティビティフェス)で上位に残るのはそういうものからです。

中村 そういう場所で審査などをさせてもらったときに感じるのは、日本はクリエイティブの文脈が世界標準とはかなり違うということ。アイデアのシンプルさや骨太さというより、クラフトやディテールへのこだわりでコミュニケーションが成立してしまう。その部分で日本が評価されるのはある意味誇らしいし、その反面これからの課題だなと感じるところもあります。両立できれば素晴らしいのですが。

川村 確かに違いはありますね。いま洋基さんが説明した通り、日本の作り手はすごくハイコンテキストな要素で勝負しにいくところがある。受け取る側も行間を読むパワーがすごいんです。でもそれをそのまま世界に出すと、海外の人にはわか

らないユーモアなどがあまりにも多くて伝わらない。世界のマーケットで展開する広告の場合それだと難しいですね。ローカルマーケットでは日本のやり方で通用しますが、デジタル表現は国境を越えていく面もありますから。

河尻 PARTY NYも始動しているので、これまで以上にシンプルを意識する面もあるのでは?

清水 「シンプル」を私なりに言い換えるとさっきお話しした「暴力性」だったりするんです。

川村 横殴りするみたいなの?

清水 屈強な男が見てくれている方をいきなり平手打ちするような(笑)。そのパーンという感じは世界共通に一番シンプルなわけで。でも、細かいいところをちゃんと磨いていくからシンプルが達成できるという逆説もあり、その純度が高まるとパンチ力も強まります。

中村 僕の場合、ディテールにはルールの変更も含まれますね。このアングルから撮ったら絶対美しいという鉄則をわかった上でうまくハズせるとカッコいい。

河尻 皆さんのコメントの程よい混沌感がいいですね(笑)。近年、広告やデザインの世界がカオス化している状況もあると思うのですが、この展示を見て、「デジタルとリアル」「日本と世界」といった様々な対立構造を、表現の力で融合したい視点みたいなものを感じました。しかもイタズラばく人を楽しませながら。

伊藤 僕が初めてネットに触った頃から考えると、いまやデジタルはかなり市民権を得て、多くの人がそのメリットを享受するようになっていますが、まだまだこれからという課題も多いんです。だからこそパーティーを組み、一緒に「作ること」でその素晴らしさを社会に伝えていくことがすごく大切だと思っています。そのトライアルをgggでやらせてもらったのはうれしいですね。

Gallery Talk

PARTY Not There. Exhibition (No.1)

Naoki Ito, Qanta Shimizu,
Hiroki Nakamura, Masashi Kawamura, Koichi Kawajiri



Kawajiri Koichi I think it's a rare opportunity for all four members of PARTY to be speaking together in public like this. So today I would like to "dissect" PARTY to see what it's all about. To begin, may I ask why you named yourselves "PARTY"?

Naoki Ito Once we decided to form a company, we held meetings night after night where we came up with hundreds of potential names, but after agonizing over the matter Hiroki (Nakamura) then casually suggested, "How about PARTY?"

Hiroki Nakamura "Party" is also the word used to describe a team in a role-playing game like "Dragon Quest," right? It conjures up the image of an attractive team of people banding together to create something never seen before. I also liked the fact that "party" would have a double meaning – "Let's have a big party!" – although that was more of an afterthought (laugh).

Kawajiri It's also typical of PARTY that the word "ART" is hidden in your name. And your title – "PARTY Not There. Exhibition" – too strikes me as very befitting of PARTY.

Masashi Kawamura It was Ito-san who proposed "Not There." Nowadays you don't have to physically be someplace in order to connect with somebody, and in this day and age we ourselves are creating interactive and digital works that way. At the same time though, there's a real world out there that digital can't catch up to. So I took this perhaps as a good chance to give birth to new things by exploring the relationship between the two."

Ito That's precisely what we aimed for. Initially we even talked about the possibility of putting nothing whatsoever on actual display in the gallery – for example, placing our works in a park somewhere and then making it possible to view them from the gallery. But if we did that, it would be just too surreal, we decided (laugh).

Nakamura In almost all cases, I think advances in technology make the world more convenient by "shortening" things. After telephone first we had email, and now with both texting and videos we're able to convey information with amazing speed. But there are also possibilities, actually, in the opposite direction: in

"extension." In the extra time that's left over, maybe people will start doing something phenomenally new. I thought it would be interesting if we created output that experimented in pursuit of that.

Qanta Shimizu You just spoke about things "befitting" PARTY, and I often think the four of us are able to communicate with each other in a kind of "literary" way.

Kawamura I think what Qanta means by "literature" might in other words be called a "story." We just use technology as a means of conveying a story, not because of the technology itself. For this exhibition too, what we're interested in is how to create previously unknown experiences by combining ideas and technologies – with a work enabling entry into the world of a 3D Internet by wearing a helmet, a huge fan that lets you can experience white sand breezes in real time, or a machine integrating a toilet and a motorbike.

Ito The four of us all have different personalities but we're able to share a big goal: to make advertising fun and delightful.

Shimizu In that respect, in my case I place importance on the sense of "There! What do you think of that!" when something I've created goes out into the world. "Violence" in a positive sense perhaps: what can I do that will surprise and excite people? Otherwise the message doesn't get across.

Ito And to achieve that sense of fun and delight, an idea has to be simple. It's things like that, for example, that score high at Cannes (Lions International Festival of Creativity).

Nakamura What I feel when I've served as a judge at places like that is that Japan's creative context differs a lot from the global standard. More than the simplicity or solidity of an idea, in Japan communication is achieved through a fixation on craftsmanship or detail. In one sense it's a source of pride that Japan is highly acclaimed for that aspect, but on the opposite side I also think this is something we will need to address. It would be great if we could achieve both at the same time of course.

Kawamura There is a difference, definitely. As Hiroki just explained, creative artists in Japan

tend go into battle using high-context elements. Those on the receiving end, too, have amazing ability to read between the lines. But if you offer the same work to the world at large, there's too much humor and such that people outside Japan don't understand, so the message doesn't get across. With advertising for the global market, that makes for great difficulties. For the local market Japan's way of doing things works fine, and digital expression tends to cross international borders too.

Kawajiri PARTY New York is also starting up, so are you more conscious about simplicity than before?

Shimizu When I personally think about simplicity, I sometimes equate it with the "violence" I mentioned earlier.

Kawamura You mean like a blow to the side?

Shimizu Like suddenly slapping the face of a brawny bloke looking your way (laugh). That sense of being slapped is the simplest thing common to the whole world. But then there's the paradox that being able to achieve simplicity comes from having polished up all the details. The purer it is, the stronger the punch it packs.

Nakamura In my case, details also include changing the rules. When you know the iron-clad rule that shooting from a particular angle will produce an absolutely beautiful result, it's cool when you skillfully veer from that angle.

Kawajiri I like the moderate sense of chaos in your comments (laugh). I think the worlds of advertising and design are becoming chaotic in recent years, too. Seeing this exhibition, I got the sense of a perspective of sorts wishing to fuse opposing structures such as "digital and real" or "Japan and the world" by the power of expression. Plus doing so while mischievously making it fun for people.

Ito Compared to the days when I first dabbled in the Internet, nowadays digital has really come into its own, and though many people have come to enjoy its benefits, there are still many topics needing to be addressed. That's precisely why we think it's really important to band together as PARTY and "create" together, to convey how wonderful it is to everybody. I'm very happy we were able to try to do this at ggg.

Gallery Talk

勝井三雄展 兆しのデザイン

勝井三雄

勝井三雄 僕は1931年に日本橋で生まれました。生家からすぐの所に森五商店東京支店というビルがあります。建築家の村野藤吾さんによるもので、ちょうど僕が生まれた1931年の設計です。ブルーノ・タウトが〈永遠の傑作〉と絶賛したこのビルは村野さんの作品集の第一巻に掲載されています。僕が31歳の頃にデザインを頼まれました。村野さんは93歳で亡くなるまで旺盛な仕事をされましたが、私のような若造にも丁寧で気さくな付き合いをして下さる方でした。亡くなった後、60年間の作品との付き合いの中で最終編をつくる幸運に恵まれました。高校の頃、九鬼周造の『「いき」の構造』という本に出会います。はじめはよく分からない。でもその後、大学時代や、仕事上で書籍として纏める立場に関わるなどして、繰り返し読むうちに理解を深めてきました。生きること、勢い、新鮮、呼吸の息、気だて、気前……。これがいわゆる粋の神髄です。この本の中に直方体の図版がありますが、これは九鬼周造が考えたまさに「粋」のダイアグラムです。「さび」や京都の王朝文化を表わす聖なる「みやび」などが、俗の美意識である「粋」と対極にあることに図形から気づかされ、デザインの最初の示唆を得ました。

ここからは、僕が今日までに、影響を受けた本や人物の話をしていきます。1964年にエッセイがPR誌をつくる際に編集者を募集し、100人集まった中で採用されたのが光文社の編集者だった高田宏さんです。そのとき友人で写真家の今井寿恵さんからデザインについて相談がありました。そこでタイトルを提案し、表紙のプレゼンテーションをした。それがエッセイのPR誌『エナジー』です。それから高田さんとは20年間を共にし、特集主義の中で多くの知的資産を専門の先生方から頂く至福の時代を迎えることになったのです。しかし、その時出来上がった創刊号を見ると、私の任された表紙と目次と扉図版以外のすべてが気に食わない。それで、全部やらせてくれなければやらないと執拗に食い下がった。当時は表紙だけをデザイナーに頼むのが普通のこと、本文は編集者がやる時代でした。39号まで10年間やり、オイルショック後は『エナジー対話』と名を改めて更に20年続きました。

スタジオへも行くなど、モホリ＝ナジと共に気になるデザイナーの一人でした。

勝見勝さんの紹介で、来日したカール・ゲルストナーと64年に会います。ちょうどお札等の複雑な模様をつくる彩紋彫刻機が輸入された頃で、XYプロッターで、すべて数値指定で作る形態に興味を持ち、円から三角へとか、円から四角に徐々に変化していく形態など、僕は複雑な形態よりも単純なものをつくりました。それらの実験的な形態群を自称「ギョームパターン」と命名し、「どうしても欲しい」というゲルストナーに贈りました。その後、彼の論文の中で、論旨に沿った作品として紹介され、数十年後、ジョン前田がそれを見て関心を寄せ、僕がジョンと会うきっかけになる感慨深い仕事になりました。

60年の世界デザイン会議のハーバート・バイヤーの基調演説は、社会とデザインをつなぐ素晴らしく印象的なものでした。そのとき彼が持参したのが『ワールド・ジオ＝グラフィック・アトラス』です。彼は5年を費やして1200点のグラフィカルなイラストとダイアグラムでこのアトラスを構成しており、それは私にとって特に示唆をもらった事件でした。

もうひとつの体験はオットー・ノイラートの『International System of Typographic Picture Education』、いわゆる「アイソタイプ」です。これはやがて勝見勝さんに導かれ、我々が協力して制作した東京オリンピックのデザイン・マニュアルに結実した要因でもありました。

1965年には講談社が『現代世界大百科事典』をつくりたいということで、建築評論の川添登さんと僕に依頼がありました。いかに情報を分かりやすく機能的に、しかも美しく表現するかというコンセプトで、あらゆるデザイン要素の規格化を進めました。レイアウトシステムやスペーシングなどをコンピュータに入力し、同時に3巻、3500ページを事前にレイアウトしてしまうなど。カラー計画も、指定色を263色選び、内容伝達の検索性を高め、作業工程を合理化し、レイアウトにはできるだけ黄金分割を取り入れたことなど、図版と写植による本文組のシステムづくりを徹底させた6年間のハードな仕事でした。

大きなプロジェクトでは70年の日本万博の政府館での120面スクリーンによる「統計の森オルゴラマ」やつくば科学博での脳内空間のイメージ化を試みた講談社「ブレイン・ハウス」での先端科学分野のAD



などが続きます。国立民族学博物館のシンボルマークの制作をして、館長梅棹忠夫さんの学識、人間的資質に心身共に傾倒して、サイン計画、展示計画など20年間にわたって関わり、デザインと文化領域との接近が実現したことは何より充実した経験でした。また、交遊からの刺激に触発された、版画家、小説家池田満寿夫、写真家奈良原一高、杉浦康平、土方巽さんといった異才との出会いと協働も忘れられません。

教場の現場から思考し生まれた近年の本では、宇宙創世から地球の資源と人との関連を纏めた『土の記憶』で始まり、人間の生命を考える『水を誌す』を経て今回の『ゆらぎとゆらぎ』に心や美意識を求めるとに至りました。その『土の記憶』の中に「宇宙は『無』のゆらぎから誕生した」という一節があります。ゆらぎというのは無限に変化していく、それが何かということに気づかされたのです。我々は常に予兆や余韻を感じとって行動をする。その余韻が明らかかな形となって何かを引き起こす手がかりとなったものが索引であり、索引と記憶から想起される記号の連鎖はデザインの思考パターンに深く影響していると思います。特にコミュニケーションデザインでは、そのひとつひとつが重要なキーとなっています。形や色、それをめぐる幾多の試みは、デザインが成立する原理や構造を基本から問い直し、自身のデザイン言語である社会に点在する事象の相関こそ、デザインの領域「場」を創出すると考えられます。

今回の展示での、蓄積された個々の世界観を封じ込めた多様な知の累積をベースに展開したB1の展示群。展示台には黒い砂を敷き詰め、彫り込まれた穴の中に、書物を静かに置きました。書物は様々な事象が統合された知的な構造体です。砂の中にはモニターが点在し、文字や図像など様々な情報を組み立てる「編集的思考」を確認できる小宇宙ということが出来ます。

そこから導かれるように開かれた1Fでは、「色彩」という現象とそれを知覚する人間の心理の間の「ゆらぎ」に形を与えようとする映像空間の拡散による新たな「場」への誘いを試みました。

僕は「兆し」に気づきながら生きていきたいという願望と共に、展示タイトルを〈兆しのデザイン〉としたことをご理解いただきたいと思います。

Gallery Talk

Mitsuo Katsui Exhibition – Design of Symptom

Mitsuo Katsui

Mitsuo Katsui I was born in the Nihombashi area of Tokyo in 1931. Very close to my home was – and still is – a building designed by architect Togo Murano: the former Morigo Company Tokyo Branch. It was completed in 1931, the same year I was born. This edifice, which Bruno Taut praised as an “eternal masterpiece,” appears in the first volume of a collection devoted to Mr. Murano’s work. I was asked to design the book when I was 31 years old. Until he passed away at the age of 93, Mr. Murano was extremely prolific; yet he was kind and generous to associate with a young lad such as I then was. After he passed away, I was blessed with the good fortune of compiling a final edition based on six decades of familiarity with his works.

During my high school years I happened upon the book *Iki no kozo* (The Structure of Detachment) by Shuzo Kuki. On first reading I wasn’t able to comprehend it well, but after poring through it over and over again – at university, as compiler of books connected with my work, etc. – I came to deepen my understanding. I came to see that the essence of “iki,” which generally refers to urbane and spirited stylishness, has connections with life itself, vigor, freshness, plus connotations of breathing, disposition, generosity. The book contains a figure of a rectangular parallelepiped: a diagram of “iki” as conceived by Shuzo Kuki. It demonstrates in graphic form that “iki,” which is a “common” aesthetic sense, lies at the polar opposite of “sabi,” i.e. elegant simplicity, and sacred “miyabi,” i.e. refinement, used to express the court culture of Kyoto. From this I gained my first hints about design.

In 1964, when Esso decided to put out a public relations magazine, photographer Hisae Imai asked me for advice about the magazine’s design. I made a presentation in which I suggested a design for the cover as well as the title for the magazine, “Energy.” Thus began a 20-year association with the editor, Mr. Takada, a period during which, in the context of the magazine’s focus on special features, I had the good fortune to acquire a great deal of intellectual assets from specialists. I worked on “Energy” for 10 years, through issue No.39; after the oil crisis, the name was changed to “Energy Dialogue” but I continued my work for it for a further 20 years.

When I was a student at Tokyo University of Education, my favorite posters were Otl Aicher’s Ulmer Volkshochschule works. He founded the Ulm

School of Design in 1953. Later, he was invited in conjunction with a workshop held in celebration of the 60th anniversary of Musashino Art University. I also visited his studio. Along with Moholy-Nagi, he was a designer I always had a fancy for.

In 1964, through an introduction from Masaru Katsumie, I met Karl Gerstner when he came to Japan. This was just around the time when geometrical lathes – for making complex patterns on banknotes, etc. – were being imported into Japan. Rather than complex forms, I made simple forms. I was interested in forms created entirely by numerical input using an X-Y plotter: triangles gradually evolving from circles, squares made from circles, and so on. I called these experimental forms “geom patterns,” and when Gerstner expressed great interest in having them, I gave them to him. Subsequently, they were introduced in his writings as works falling in line with his argument, and several decades later John Maeda saw them and took an interest in them. That’s how I got to know John, so in the end this was a profoundly moving job for me.

The keynote address given by Herbert Bayer at the World Design Conference in 1960, linking design and society, was wonderful and made quite an impression on me. On that occasion Bayer brought with him his *World Geo-graphic Atlas*. It incorporated 1,200 graphic illustrations and diagrams, and he had spent five years in their preparation. Seeing that work was especially vital as a source of inspiration. Another work that greatly inspired me was Otto Neurath’s *International System of Typographic Picture Education*, better known as “Isotype.” This work was a major factor behind the success of the design manual I created together with Masaru Katsumie for the 1964 Tokyo Olympics.

In 1965 I, along with architecture critic Noboru Kawazoe, was approached by Kodansha, which at the time was interested in making what eventually became *Encyclopedia World Now*. The concept was to express information in the most easy-to-understand, functional and beautiful manner possible, and we proceeded by standardizing all the design elements. We put everything – our layout system, spacing, etc. – into a computer and started by simultaneously laying out three volumes with a total of 3,500 pages. For the color plan we chose 263 colors, we enhanced reference ease for conveying content, rationalized the work processes, and applied the golden section to the layout when-



ever possible. In this way it took six years of hard work to create the main body system of plates and phototypesetting.

My books written in recent years were all conceived from my experience in the classroom. In the first, *Tsuchi no kioku* (Altered Soil), I examined the relationship between the earth’s resources and man since the creation of the universe. In the second, *Mizu o shirusu* (Water Records), I considered the topic of human life. And in the latest, *Yuragi to yuragi* (Fluctuations and Fluctuations), I probe the mind and aesthetics. *Tsuchi no kioku* contains a passage that says, “the universe was born from fluctuations of nothingness.” Fluctuations change indefinitely, and I was made to realize what that is. We always act in response to preliminary signs and postliminary suggestions. When those aftereffects take clear form and become clues that give rise to something, the result is an index, and I believe that the chain of codes called to mind from that index and memory has a profound impact on the thought patterns behind design. Especially in the case of communication design, each serves as an important key. Forms and colors and the many trials surrounding them are probed based on the principles generated by design and structure, and the correlation of the events that pepper society, which is our own design language, conceivably creates the realm of design.

In this exhibition, in the basement gallery the exhibits are based on the various accumulations of knowledge enclosing their respectively accumulated worldview. The display tables have been covered in black sand, and books have been placed gently inside carved-out holes. Books are intellectual structures integrating various events. Monitors are set here and there in the sand, creating microcosms enabling confirmation of “editorial thinking” that assembles a variety of information such as words and icons.

From there the visitor is naturally led to the ground floor. Here, I attempted to entice the visitor to a new “place” achieved from dispersed visual spaces that seek to give form to the “fluctuations” between the phenomenon of “color” and the human mind that perceives it.

I hope visitors will understand that I hope to live while realizing such symptoms, and this is why I titled this exhibition “Design of Symptom.”

Gallery Talk

明日のデザインと福島治 [Social Design & Poster]

福島治、永井一史、並河進



福島治 並河進さんと永井一史さんはデザインの力を使ったいくつものソーシャルプロジェクトをされています。2人のプロジェクトを紹介しながら、社会的な問題にどう対処し、解決をはかろうとしているのか伺いたいと思います。まず並河さんから、並河さんが手掛けられた「nepia千のトイレプロジェクト」について説明をお願いいたします。

並河進 僕はコピーライター、クリエイティブディレクターですが、10年ぐらい前から社会のために何かできないだろうかと考えるようになり、同じことを志向している企業の方との出会いもあって、最初にしたのが「nepia千のトイレプロジェクト」です。実は世界では不衛生な環境によって毎年75万人以上の子どもが亡くなっています。そこでトイレトペーパーの売上の一部を使って、企業と社会の課題をつないでいこうと、東ティモールでのトイレづくりを推進しています。

福島 永井さんはブランディングという言葉を実践して根づかせた第一人者ですが、並河さんと同じように、実はソーシャルプロジェクトをかなり前から実践されていて、その中でいちばん長いのが水の問題に取り組む「TAP PROJECT」ですね。

永井一史 水環境について日本での関心は薄いけれど、世界では大きな問題になっています。もともとはデビッド・ドロガという人が2007年に始めたプロジェクト。この方はある種のクリエイティブディレクターで、世界で活躍するトップ10に入るような著名人です。僕もそのころデザインの可能性としてまだまだいろいろできるのではないかと思い始めていたときで、ドロガがこういう試みをやると知った瞬間は衝撃を受けました。

ユニセフがこのプロジェクトを世界展開したときに僕が日本で始めたのがTAP PROJECTです。これはレストランでの展開。日本では水に対してのありがたさなどなかなか感じないのですが、カードが置いてあって、いまだどれだけ水の問題が世界的に大変かということが書かれている。もしそういう課題に共感してもらえたら、100円程度の寄付をお願いするというプロジェクト。これを毎年ずっと続けています。僕たちは並河さんたちと同様にトイレもつくっているけれど、マダガスカルを中心に井戸を掘っています。

福島 そしてはいよいよ僕たち3人で行ったプロジ

ェクトです。僕自身はずっと広告のアートディレクションをやってきましたが、7年前に病気で妻を亡くして、それなりに落ち込んでウツになってしまったんです。さらに男の子が2人いて父子家庭も始まったので、それから抜け出さないといけない。その中で、デザインと出会ったことで自分の人生はすごく豊かになったということへの「感謝」の言葉がごく自然に出てきました。そして、これまで僕はポスター表現に対して命懸けで取り組んできましたが、ここで自分のデザインを見直し、社会に対してお返しができたら、残りの人生をもうちょっと頑張るって生き抜くことができるのではないか…。本格的にそう決めて行動を始めたときに3.11.を迎えてしまいました。間接的にソーシャルな活動を知っていた永井さんと雑誌上で電通のソーシャルプロジェクトを牽引する方であると紹介されていた並河さんに相談に行ったわけです。

3人でクリスマスに子供たちに笑顔をプレゼントするのはどういう形がいいだろうかという話からこのプロジェクトは始まりましたが、もっと多くの方たちに仲間に入っていただこうと他のクリエイターにも声をかけました。プロジェクトの概要をお披露目して団結式みたいなことを行ったものの、じつはここに至るまでには相当侃々諤々がありました。毎週のように会ってプロジェクトのしくみを検討する中で、永井さんから提案があったんです。

並河 乃木坂のミッドタウンで、ピザを食べながら3人で打ち合わせしていたときに永井さんがスツと、「こんなのどう？」って…。

永井 みなに参加できて機会を均等に持てるというのはどういうことかと考えたときに、オーナメントをデザインするのがよいかと…。

福島 手作りのツリーに飾る紙製オーナメント。僕らが見て、あっと驚いた。「これだ！」って。ユニセフも賛同してくれて「UNICEF 祈りのツリープロジェクト」として産声をあげるわけです。プロジェクトは現在3年にわたって継続中です。被災地にはいろんなボランティアが入って活動していますが、われわれが行ったワークショップに対して保育園の先生が「子どもたちが本当に楽しそうだった。いつものほしやぎ方とは違う笑顔だった」

とおっしゃってくださったのは本当にうれしかった。

並河 福島さんの熱意はとにかくすごい。このプロジェクトも「みんなでやりましょう」と福島さんが提案し、2000人を超えるデザイナーの方や、いろんな場所に協力していただき、大きく広がっていった。

永井 銀座で三越と松屋銀座、有楽町ロフト、ルミネ有楽町、資生堂ザ・ギンザという5ヶ所できっしょに展示してもらえた。そんな連係は初めてという話でした。

福島 その後、日本グラフィックデザイナー協会にも被災地支援プロジェクトを提案して「やさしいハンカチ展」を始めました。会員600人が参加してくださった。1枚1500円でチャリティ販売して、売れたデザインと同じハンカチが被災地の子どもたちにプレゼントされるという仕組みです。最後に紹介するのは、仙台のメンバーと立ち上げた、Tシャツのチャリティ販売により、現地で活動するNPOを支援する「GIFTHOPE」。サイト上で販売していますが、多くの著名なデザイナーにも協力してもらっていて、いま僕が着ているのは永井さんのデザインです。

並河 GIFTHOPEの面白いところは、そのアクションに共鳴して多くのデザインが生まれたわけで、その間のプロセスを大事に伝えていくことがこれからもできると思います。

永井 並河さんと同じように、前と後ろがある全体のストーリーが感じられると、「買ってみたい」という気持ちをもっと運んでくれるかな、と。

福島 地下に展示した僕のポスターと社会的なプロジェクトは間違いなく繋がっています。デザインの力を可視化して皆が共有できるプロジェクトを、もっともっと勉強して、社会に提案していきたいと思っています。

Gallery Talk

Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster

Osamu Fukushima, Kazufumi Nagai, Susumu Namikawa



Osamu Fukushima Susumu Namikawa and Kazufumi Nagai have undertaken any number of social projects availing of their powers in design. I would like to look at their projects and ask them how they deal with and try to resolve social issues. To begin I would like Mr. Namikawa to explain about his work, the “nepia 1000 Toilets Project.”

Susumu Namikawa I’m a copywriter and creative director, and about 10 years ago I began to ponder whether there wasn’t something I could do for the sake of society. I happened to meet with corporate people who were of the same mind, and my first endeavor in this direction was the “nepia 1000 Toilets Project.” Every year 750,000 children die around the world because of an unhealthy environment. So we decided to take part of the proceeds from the sale of toilet paper and use it to promote building toilets in East Timor.

Fukushima Mr. Nagai stands out as one who has put the word “branding” into practice and made it take root. But like Mr. Namikawa, he’s been involved in social projects for quite some time. Among them, the longest one is the “TAP PROJECT,” which addresses the problem of water, am I right?

Kazufumi Nagai In Japan, interest in water environments is relatively lacking, but worldwide it’s a major issue. The TAP PROJECT was started in 2007 by a man named David Droga. He’s a creative director of sorts, a well-known person who would rank up there in the top 10 of his profession. At the time, I too had just begun thinking whether or not design has various still untapped possibilities, and the moment I learned that Droga was doing something like this, it hit me like a shockwave.

When UNICEF launched this project worldwide, I started the TAP PROJECT here in Japan, with restaurants being the venue. In Japan, there is little sense of appreciation shown toward water, but under this project cards are placed in restaurants describing just how much of a problem water is today worldwide. The project asks people, if they feel sympathetic toward this issue, to donate 100 yen or so to it. This is being continued every year. We also, like Mr.

Namikawa, are building toilets, but we’re also digging wells, mostly in Madagascar.

Fukushima And then finally there’s the project the three of us have done together. I’ve been doing advertising art direction all along. Then seven years ago my wife passed away from an illness, and I became deeply depressed. I have two sons, though, and we became a motherless family – so I had to do something to pull out of my depression. It was then that I began to realize how grateful I am for coming to know design, and for the way it has enriched my life. Up until that time I had always given my heart and soul to poster expression, but at that juncture I reflected on my design work and thought that if I were to repay my “debt” to society, then maybe I would be able to make it through the remainder of my life. Just as I had made that decision in earnest and had started to act upon it, that’s when the cataclysmic events of March 11 occurred. That’s when I went to talk matters over with Mr. Nagai, whose social activities I had known indirectly, and Mr. Namikawa, who had been written up in a magazine as a leading social force of Dentsu inc.

This project of ours began by the three of us asking ourselves in what form we might be able to bring smiles back to the faces of the children at Christmas time. We decided to invite many other creative artists to join us. We held a presentation to provide an outline of the project but, quite frankly, getting to where we are today was a formidable battle. Every week we’d meet and examined things over, and it was out of that that Mr. Nagai came up with a proposal.

Namikawa We were talking things over while eating pizza at Midtown in Nogizaka, when Mr. Nagai suddenly slipped a piece of paper in front of us and said, “How about this...”

Nagai When I thought about what could be done where everyone could participate and have an equal opportunity, I hit upon the idea of designing Christmas ornaments...

Fukushima Handmade tree ornaments made of paper. We took a look at the sheet Mr. Nagai showed us and said, “Wow, this is it!” UNICEF approved of the idea, and that’s how the UNICEF Prayer Tree Project came about. The

project’s now in its third year. Volunteers of all kinds have gone to the disaster area and are carrying out their activities, but it made us really happy when the local kindergarten teachers told us that the children really seemed to enjoy the workshop we carried out. “The smiles on their faces are different from their usual boisterous selves,” they said.

Namikawa Mr. Fukushima’s enthusiasm has been amazing. Initially, at the time the project was announced, he suggested “Let’s have everyone join in,” having more than 2,000 designers and various places cooperating on the project.

Nagai We got five places in Ginza to participate in the display: Mitsukoshi, Matsuya, Loft, Lumine and The Ginza. They said it was the first time they had ever joined forces like that.

Fukushima After that, we started the “Handkerchiefs for Tohoku Children” exhibition with cooperation from the Japan Graphic Designers Association. Six hundred JAGDA members took part. The handkerchiefs were sold at 1,500 yen apiece as a charity, and with each sale a handkerchief of the same design was given as a gift to children in the disaster region.

The last project I’d like to introduce is “GIFT-HOPE,” a project launched by members in Sendai to support NGOs active in Tohoku through proceeds from the sale of T-shirts. The T-shirts are sold online, and many well-known designers have agreed to cooperate. The shirt I’m wearing was designed by Mr. Nagai.

Namikawa What’s interesting about GIFT-HOPE is how so many designs came about as a result of designers being in sympathy with the project’s aims. It would be great, I think, if the process involved could continue to be passed on down in the future.

Nagai Like Mr. Namikawa, once both sides, front and back, of the story can be appreciated, I think more people will be inspired to make a purchase.

Fukushima My posters shown in the downstairs gallery are unquestionably linked to social projects. What I hope to do going forward is to study all the more ways of making the power of design visible so that everyone can share it.

CCGA Print Studio Workshops

CCGA 版画工房ワークショップ

CCGAでは版画教育の拠点としての機能を強化し、地域でのグラフィックアートの普及振興にいっそう貢献するために、小規模ながらも本格的な版画制作を行うことのできる工房を2012年に開設、市民向け版画ワークショップの定期開催を開始した。版画工房にはエッチング用プレス機等のほか、大日本印刷の前身である秀英舎で100年以上前に実際に使われていたアルビオン・プレス(活版用平圧印刷機)を再生して設置している。

2013年はリトグラフとシルクスクリーンの講座を行い、制作可能な版種を順次拡大してきた。また10月からは、工房の一般開放を開始した。これは、CCGAでのワークショップ受講などによる版画制作の経験がある方を対象に、毎週土曜日(ワークショップ開講日およびCCGA休館日を除く)に工房を開放して、継続的に版画制作を行えるようにしたものである。CCGAでは、グラフィックアートにより深く接する機会の得られる場として、地域の皆様が版画工房を活用していただくことを願っている。

In 2012 CCGA opened a studio, small in size but enabling full-fledged print production, in a quest to strengthen its function as a base for print education and to contribute further to the promotion of graphic art locally. Since its opening, print workshops open to local citizens have been held on a regular basis. The studio is equipped with an etching press and other standard equipment as well as a restored Albion press that was actually used more than 100 years ago at Shueisha, the forerunner of Dai Nippon Printing Co., Ltd.

In 2013 the types of prints that can be created in the studio were expanded through workshops in lithography and silkscreening. Also, since October 2013 the studio itself has been made accessible to the general public. Every Saturday, people who are experienced in printmaking through attendance at CCGA's workshops or otherwise, are able to use the studio, enabling them to undertake print production on a continuous basis.

CCGA hopes that the print studio will be actively used by local citizens as a venue affording them opportunities to become more deeply acquainted with graphic art.



2013年度 第1回 エッチング基礎講座

日程：
Aコース：2013年3月16日(土)、3月23日(土) 全2日間
Bコース：2013年3月30日(土)、4月6日(土) 全2日間
(Aコース、Bコースとも内容は同じ)
講師：CCGA学芸員
受講者数：Aコース：9名 / Bコース：8名

2013 Workshop #1: "The Essentials of Etching"

Dates :
Course A : March 16 (Sat), March 23 (Sat), 2013
Course B : March 30 (Sat), April 6 (Sat), 2013
(Courses A and B were identical in content.)
Instructor : CCGA Curator
No. of students : Course A : 9 / Course B : 8

2013年度 第2回 リトグラフ講座

日程：2013年6月29日(土)、7月6日(土)、
7月13日(土)、7月20日(土) 全4日間
講師：下山田晴彦(リトグラフ作家)
受講者数：9名

2013 Workshop #2: "Lithography"

Dates : June 29 (Sat), July 6 (Sat), July 13 (Sat),
July 20 (Sat), 2013
Instructor : Haruhiko Shimoyamada, Lithograph Artist
No. of students : 9

2013年度 第3回 シルクスクリーン講座

日程：2013年11月3日(日)、11月10日(日)、
11月17日(日)、11月24日(日) 全4日間
講師：平栗洋三(シルクスクリーン作家)
受講者数：9名

2013 Workshop #3: "Silkscreening"

Dates : November 3 (Sun), November 10 (Sun),
November 17 (Sun), November 24 (Sun), 2013
Instructor : Yojo Hiraguri, Silkscreen Artist
No. of students : 9

Publications 2013–2014

出版活動



■ Graphic Art & Design Annual 12-13 (表1 / 表4)

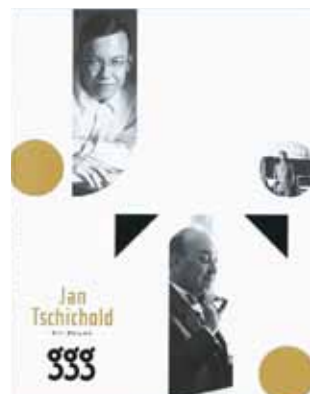
- ggg Books 104 ホワイ・ノット・アソシエイツ
- ggg Books 105 大宮エリー
- ggg Books 106 パーティー
- ggg Books 107 長嶋りかこ
- ggg Books 108 村越襄
- ggg Books 109 福島治
- ggg Books 別冊10 勝井三雄
- フルカラー カレル・マルテンス
- ヤン・チヒョルト
- トマシェフスキ展 世界を震わす詩学

- ggg Books 104 Why Not Associates
- ggg Books 105 Ellie Omiya
- ggg Books 106 PARTY
- ggg Books 107 Rikako Nagashima
- ggg Books 108 Jo Murakoshi
- ggg Books 109 Osamu Fukushima
- ggg Books Special Edition-10 Mitsuo Katsui 1954–2013

Full Color Karel Martens

Jan Tschichold

Tomaszewski, The Poetic Spirit



アーカイブ事業

Archiving

DNP Graphic Design Archives

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ

◆ポスターアーカイブ(2014年3月現在)

- ① 収蔵作家: 226名(国内作家: 115名、海外作家 111名)
- ② 総点数: 11,233点
- ③ 2013年4月~2014年3月の受入れ状況

<日本>	
・浅葉 克己	8点
・奥村 毅正	54点
・軍司 匡寛	1点
・窪田 新	1点
・齋藤 浩	1点
・竹智 こすえ	1点
・永井 裕明	1点
・福島 治	1点
・若岡 伸也	1点
計	69点

<海外>	
・フィリップ・アペロフ	1点 ※
・ヤン・バイトリク	1点
・ロナルド・クルショ	1点
・ラドヴァン・イェンコ	1点
・クロード・カーン	3点 ※(3点のうち1点)
・ノーム	1点 ※
・ラルフ・シュライフォーゲル	1点 ※
・ホワイ・ノット・アソシエイツ	48点
計	57点

※チューリッヒ・デザイン・ミュージアムより寄贈

◆アーカイブ作品寄贈

該当なし

◆アーカイブ作品貸出

該当なし

◆Poster Archives (as of March 2014)

- ① Artists represented: 226
(115 domestic, 111 from overseas)
- ② Items in collection: 11,233
- ③ Items received between April 2013 and March 2014

<Domestic>	
・Katsumi Asaba	8
・Yukimasa Okumura	54
・Tadahiro Gunji	1
・Arata Kubota	1
・Hiroshi Saito	1
・Kozue Takechi	1
・Hiroaki Nagai	1
・Osamu Fukushima	1
・Shinya Wakaoka	1
Total	69

<Overseas>	
・Philippe Apeloig	1 ※
・Jan Bajtlík	1
・Ronald Curchod	1
・Radovan Jenko	1
・Claude Kuhn	3 ※(1 of 3)
・Norm	1 ※
・Ralph Schraivogel	1 ※
・Why Not Associates	48
Total	57

※Donated by The Museum für Gestaltung Zürich.

◆Donations to the Archives

Not applicable

◆Loans of Archived Works

Not applicable



◆<人物アーカイブ>シリーズ

[特別公開対談]

永井一正 vs 横尾忠則

「創造と健康 ― 病の神様に見守られて」

(2013年10月7日)

永井一正氏(85歳)と横尾忠則氏(78歳)の特別公開対談を開催。幼少期より病弱だったお二人は、現在に至るまで様々な病気を経験されてきた。そんな体験話を皮切りに、知られざるプライベートな生活や健康法、さらには、病を乗り越え、生きる力やクリエイティブの源泉についてお話しいただいた。



◆“CREATORS FILE”Series

Special Open Dialogue

Kazumasa Nagai vs. Tadanori Yokoo

“Creativity and Health – Protected by the God of Sickness”
October 7, 2013

A special open dialogue was held between guests Kazumasa Nagai (85) and Tadanori Yokoo (78). Both designers say they have been prone to sickness ever since childhood, and they have experienced a variety of illnesses during their lifetimes. Their talk began with a discussion of their respective bouts of illness and proceeded to reveal their hitherto unknown private lives and ways of staying healthy. Finally, they also spoke about the sources that enabled them to overcome their illnesses and live vigorous creative lives.



Yukimasa Okumura Poster Archives

奥村毅正ポスターアーカイブ

奥村毅正氏の40年間にわたるデザイン活動の中で生まれたポスター作品54点をご寄贈いただいた。奥村氏は、実験的なグラフィック表現といち早くコンピュータを駆使し、鮮烈なビジュアルを次々に世に送り出した。特に日本の音楽シーンに多大なる影響を与えたYMOや日本画の画力を生かした数々のポスターは、80年代、90年代を象徴する時代の鏡として、貴重なコレクションとなった。

This year the DNP Foundation for Cultural Promotion received a donation of 54 posters created during Yukimasa Okumura's 40 years of activity in design. Mr. Okumura produced a succession of striking visuals derived from experimental graphic designs and, from early on, use of a computer. In particular his numerous posters for YMO, the innovative band that had a major influence on Japan's music scene, and his works adopting the powerful strengths of Japanese-style paintings constitute a valuable collection that serves as a symbolic reflection of the 1980s and 1990s.



1984



1987



1991



1993



1995



1997



2012

国際交流事業

International Exchange

時を超えた旅

カリ・ピッポ

グラフィックデザイナー、AGI / フィンランド



初めてポーランドを訪れたのは、私がまだ学生の頃、1967年のことです。ポーランドのポスター・デザインの全盛期でした。私はアートギャラリーの真ん中に放り込まれたかのように感じました。街の通りには、カラフルで魅力的、個性的なポスターがあふれていました。私は突然、グラフィックデザイナーとして自分が目指したい方向を悟りました。ヘンリック・トマシェフスキ、ヤン・レニツァ、ロマン・チェシレヴィチ、ヤン・ムウォドジェニェツといったデザイナーが、私の目を開かせてくれたのです。ポーランドのポスターは、芸術の方法と密接に結びついた方法論を私に示してくれました。

数年後、私はヘルシンキで開催された大規模な日本ポスター展を見に行きました。そこで目にしたポスターの美術表現は、詩的で、思考を掻き立てるものがあり、その仕上げや印刷も最高の品質でした。日本のポスターの思考のあり方は、ポーランドのシュールレアリスムとは全く異なるものでしたが、どちらも、言葉を失うほど美しいものでした。こうして、私は理解したのです。優れたポスターとは知的なものであり、ポスター本来の目的であるメッセージを、簡潔に、大胆に、そして独自の声で語りかけてくるものであるということ。

日本

1983年、フィンエアー（フィンランド航空）がヘルシンキと東京を結び直行便の運航を開始しました。ちょうど同じ頃、武蔵野美術大学より、フィンランド・ポスター展を行いたいという企画の提案がありました。そこで私たちは、フィンエアー東京行き最初の便で作品を送ることに決めたのです。私自身にとっても、東京を訪れるまたとない機会だと思いました。

東京では、刷り上がったばかりの亀倉雄策氏のポスター「ヒロシマ・アピールズ」が展示されていました。このとき私たちの誰もが、ポスター・アートが新しい古典になったと感じました。素晴らしいごちそうと、心づくしのもてなし、美しい庭園で、田中さん、栗津さん、永井さん、福田さん、青葉さん、U.G. サトーさんら多くの巨匠とご一緒したタベは忘れられません。

私は幸運でした。その後、私は数えきれないほど日本を訪れました。dddギャラリーやギンザ・グラフィック・ギャラリー (ggg) で催した個展は、私のキャリアを飾るハイライトとなりました。

ポスターの現状

近年、ポスターの地位が低下してきたことについて、様々なことが言われています。商業部門において、確かにそれは真実です。しかし、デザイナーたちがポスターを作りたいがっているということもまた、ひとつの真実です。ポスターに情熱を傾けているデザイナーもたくさんいます。他方、新しい可能性も開けてきています。低価格のデジタル印刷により、独自のものとして思いのままにポスター制作が行えるようになりました。いわゆるファインアートと応用芸術との間の境界が失われつつあります。

ピエンナーレでは、主に、コミュニケーションや美的品質が大きな役割を果た

しているポスターが紹介されています。テーマは、主に、文化、環境、あるいは社会に関連するものです。ポスターは、大勢の人々に対して警告を発したり、教育したりするには優れた方法です。しかし、ポスターは問題を解決するための手段ではありません。実際に起こっていることを受けて発せられるメッセージを、効果的に視覚に訴える形へと濃縮したもののなのです。

ワルシャワ、ラハティ、富山、ブルノ、ショーモン、メキシコシティの各都市は、国際的なポスター都市としての評判を確立してきました。数十年をかけた営みを通じて獲得した地位です。これらの都市に加えて、近年、モスクワ、テヘラン、杭州が、新たなポスター都市として注目されつつあります。こうしたことの全てが、ポスターに対する人々の強い信念を示しています。

私は、ときに主催者として、また、参加者、審査員として、1980年代以降の国際的なポスター・アートやその発展に携わる栄誉にあずかってきました。コンテストの審査の仕事は、いつも、とても刺激的です。どうしたら意見の一致を見だし、最も優れた作品を表彰することができるのか。グラフィックデザインの分野においては、ただひとつの真実なるものはありません。デザインとは、どんな種類の植物でも成長することができる豊かな庭のようなもののなのです。

ワークショップ

何を、どのようにして、なぜ。全てのデザイナーは、こうした疑問に答えなければなりません。世界中の様々な大学で、教え、講義をし、ワークショップを開催することは、自分の中のデザイン原則を見直すという難しい挑戦を伴う仕事です。それと同時に、学生たちがグラフィックデザイナーとして自らのアイデンティティを確立することを支援する機会でもあります。今日の学生は、積極的で、オープンで、勤勉です。彼らの学習態度は、非常に前向きで、意欲的です。どこの学生たちも、高度な技術を持っています。しかし当然ながら、視覚的思考を習得するには、より多くの時間がかかります。ワークショップでは、プロセスが最も重要です。良い結果が得られたとしたら、それは、ちょっとした嬉しいおまけなのです。

学校で高い教育を受けたからといって優れた芸術家になる保証はありません。しかし、その後の成長のための良い基盤が得られることは事実でしょう。結局のところ、実際の作品に取り組むことが、最も勉強になるのです。

フレンドシップ

AGIは、グラフィックデザイナーによる国際的グループです。現在、世界37カ国から、約450名のメンバーが参加しています。年1回、100名を超えるメンバーが、世界の様々な地域で催されるAGIのイベントで顔を会わせます。ビジュアル文化を形成し、その文化に目覚ましい影響を及ぼす作品を制作している仲間と会うのは、とても楽しい体験です。私たちはデザインの世界で、日々競い合っています。しかし結局のところ、最も価値ある報酬は、デザインの世界で活動している人々との友情であると考えています。

Journey through the time

Kari Piippo

Graphic designer & AGI / Finland



I was a young student when I visited Poland for the first time in 1967. It was a golden age of Polish poster design. It felt like I had fallen into the midst of an art gallery. The streets were filled with wonderful, colourful and personal posters. In a flash I understood into which direction I wanted to go as a graphic designer. Designers like Henryk Tomaszewski, Jan Lenica, Roman Cieszlewics and Jan Mlodozieniec opened my eyes. Polish posters showed me a methodology that was closely related to artistic methods.

A few years later I saw in Helsinki large Japanese poster exhibition. The aesthetic language of posters was poetic and thought-provoking, the finishing and printing of the highest quality. Japanese thinking differed strongly from the Polish surrealism, but both they were stunningly beautiful. I understood that a good poster is intelligent, and the poster says what it is supposed to say, briefly, boldly, and with a voice of its own.

Japan

In 1983, Finnair opened a direct flight route from Helsinki to Tokyo. Around the same time The Musashino Art University offered to arrange the Finnish poster exhibition in their gallery. Our group decided to export our works on the first flight to Japan! I thought this would be for me a unique opportunity to visit Tokyo.

In Tokyo, Mr. Yusaku Kamekura presented his just printed "Hiroshima Appeals" poster. We were unanimous that the poster art had received a new classic. Great dinner and all kind of hospitality in a beautiful garden environment along with Mr. Tanaka, Awazu, Nagai, Fukuda, Aoba, U.G. Sato and many other masters made the evening unforgettable.

I have been lucky. After that visit I have made a countless number of trips to Japan. One men shows in ddd gallery and ggg have been the absolute highlights of my career.

Status of posters

In the recent years a lot has been said about the weak position of posters. In the commercial sector, this is true. It is also true that designers want to make posters. For many of us it is a passion. We can see also positive development. Low-cost digital prints have opened up new opportunities for the production of posters on their own terms. Border between fine art and applied art has been lost.

The Biennales mostly introduce posters in which communication and aesthetic qualities play a major role. The themes are mostly related to the culture, environment or society. A poster is a good way to warn and educate the big audience. A poster, however, is not a solution to the problem. It reacts to what happens, and concentrates the message into an effective visual form.

Warsaw, Lahti, Toyama, Brno, Chaumont and Mexico City have achieved a reputation as international poster cities. Over the decades work has brought them this status. To this group Moscow, Tehran and

Hangzhou are joining as new members. All of this proves strong belief in poster.

As an organizer, participant or member of the jury, I have had the privilege to follow international poster art and its development since the 1980s. Working with the panel of judges in the competition is always inspiring: how to find common ground and reward the best works? In graphic design there is not one single truth. Designing is like a garden where all kinds of plants have room to grow up.

Workshops

What, how and why? Every designer has to answer those questions. Teaching, lectures and workshops at different universities around the world challenge to revise one's own design principles. At the same it's also a great opportunity to help students to find their own identity as a graphic designer. Today's students are active, open and studious. Their attitude on learning is very positive and enthusiastic. Technical skills are good everywhere. It is very understandable that the development of visual thinking needs more time. In the workshops the process is the most important thing, good results an extra reward.

I know that academic schooling does not guarantee excellence but it is a good basis for further development. At the end, it is actual work that teaches you the most.

Friendship

AGI is a large international family of graphic designers. We have members about 450 from 37 countries. Once in a year more than a hundred members will meet in different parts of the world in the AGI event. Since 1998 I have taken part in all congresses. It has been a great pleasure to meet colleagues whose works remarkably have shaped and affected our visual culture.

We are used to compete in graphic design. In the end, the most valuable prize is the friendship with the people who are working in the world of design.



フィンランド・ミッケリの自宅アトリエにて、松永真氏ほか
ラハティ国際ポスタートリエナーレの国際審査員メンバーと。
Piippo's home studio with juries of the Lahti Poster Triennial.

AGI Congress London 2013

September 22 – 27, 2013

AGI 総会 ロンドン 2013

AGI (国際グラフィック連盟) 本年の総会は、前年オリンピックでおおいに盛り上がったロンドンで開催された。世界各国の第一線で活躍するAGI会員が集うこの総会は、毎年ひとつのテーマの下に展開されるが、今回は dialogue (対話) となった。「お茶しながら語り合いましょう」という英国らしい趣向で、会員たちがカップ&ソーサーをデザインする企画展も開催された。AGIの重要な使命のひとつとして、次世代の教育・育成を掲げているが、2010年から総会に合わせて実施されてきたAGI-OPEN (一般公開講座) は、その使命を具現化させる大切な活動として、年々盛り上がりを見せている。ロンドンでは、26日-27日の2日間、バービカン・センター内のホールで実施されたが、2,000席程のチケットが両日とも完売となる盛況ぶりであった。AGI国際執行委員によると、会員の約75%がなんらかの形で教育に携わっているという。グラフィックデザインの普及促進のために、AGIはこの貴重な財産を今後もっと有効活用することをめざしている。総会最終日、会員同士が食事しながら語り合う場として用意されたのが、ロンドン自然史博物館の荘厳な中央ホール。巨大なディプロドクスの骨のたもとで、仕事の話、政治経済の話、アートの話、近況報告などが、にぎやかに交わされた。総会開催都市の歴史や文化遺産、食やトレンドなどに触れながら、会員同士が交流できるのもAGIならではの醍醐味となっている。

2013年入会 (日本会員) 佐野研二郎 / 植原亮輔

The 2013 AGI (Alliance Graphique Internationale) Congress was held in London, site of the Olympic Games the previous year. This annual event, which brings together AGI members at the vanguard of their profession in countries all around the world, adopts a different theme each time, and for 2013 the chosen theme was "dialogue." In accordance with this theme, an exhibition was simultaneously held of cups and saucers designed by AGI members, a topic befitting its British setting – as if to say, "Let's chat over tea."

AGI views the education and cultivation of the next generation to be one of its most important missions, and since 2010 "AGI Open" – a series of courses open to the general public – have been held in conjunction with the Congress, arousing great interest as an event embodying that mission. In London, AGI Open took place on September 26 and 27 at the Barbican, and both days tickets for the Hall, which seats approximately 2,000, were completely sold out. According to the AGI Executive Committee, roughly 75% of all AGI members are involved in education in some way. In the future, AGI aims to use this precious asset more effectively to further promote graphic design.

On the last day of the Congress, members gathered in the Central Hall of the London Natural History Museum to talk among themselves as they dined. Sitting around the giant Diplodocus skeleton here, they engaged in lively chatter about work, about politics and the economy, about art, about their recent goings-on, etc., etc. One of the true highlights of AGI Congresses is this robust interaction among members, all while becoming familiar with the history, cultural assets, food, trends and other aspects of the city where the event is held. New Japanese Members Who Joined AGI in 2013:

Kenjiro Sano / Ryosuke Uehara

AGI 日本会員 [2014年4月現在: 現役会員] (入会年)

永井一正 (1966)	新島実 (1998)	梶西薫 (2006)
五十嵐 威福 (1981)	U.G. サトー (1998)	立花 文穂 (2006)
勝井 三雄 (1984)	佐藤 卓 (1998)	服部 一成 (2011)
浅葉 克己 (1987) *日本代表	蝦名 龍郎 (2001)	平野 敬子 (2011)
松永 真 (1988)	原 研哉 (2001)	永井 一史 (2011)
佐藤 晃一 (1988)	北川 一成 (2001)	佐藤 可士和 (2011)
サイトウマコト (1994)	長友 啓典 (2001)	廣村 正彰 (2012)
松井 桂三 (1997)	澤田 泰廣 (2001)	福島 治 (2012)
三木 健 (1998)	杉崎 真之助 (2001)	佐野 研二郎 (2013)
中島 英樹 (1998)	松下 計 (2003)	植原 亮輔 (2013)



Japanese members of AGI [as of April 2014] (listed by date of induction)

Kazumasa Nagai (1966)	U.G. Sato (1998)	Fumio Tachibana (2006)
Takenobu Igarashi (1981)	Taku Satoh (1998)	Kazunari Hattori (2011)
Mitsuo Katsui (1984)	Tatsuo Ebina (2001)	Keiko Hirano (2011)
Katsumi Asaba (1987) *Japan representative		Kazufumi Nagai (2011)
Shin Matsunaga (1988)	Kenya Hara (2001)	Kashiwa Sato (2011)
Koichi Sato (1988)	Issay Kitagawa (2001)	Masaaki Hiromura (2012)
Makoto Saito (1994)	Keisuke Nagatomo (2001)	Osamu Fukushima (2012)
Keizo Matsui (1997)	Yasuhiro Sawada (2001)	Kenjiro Sano (2013)
Ken Miki (1998)	Shinnosuke Sugisaki (2001)	Ryosuke Uehara (2013)
Hideki Nakajima (1998)	Kei Matsushita (2003)	
Minoru Nijima (1998)	Kaoru Kasai (2006)	



“Type Trip - The New Asian Graphic Design Exhibition” at K11 art space

January 11 – March 9, 2014

ddd企画展香港巡回「Type Trip - The New Asian Graphic Design Exhibition」

アジアの最先端グラフィックデザインを特集してきた日本タイポグラフィ協会の広報誌「typographics ti:」。dddで2013年に開催された第190回企画展「type trip to OSAKA typographics ti: 270」では、その斬新的な“type trip (文字を巡る旅)”を、取材先のソウル、香港、シンガポール、台北、深圳、バンコク、北京、大阪、8つの都市のデザイナーの協力を得てギャラリー空間に再構成・展示し、大好評を博した。そして異なる都市間のアイデアや創造性を体感できたこの展覧会の、さらなる拡大・展開を望む各都市のデザイナーの声が集まり、今回の香港での開催が実現した。会場となったK11では、開設以来の記録的大盛況で、多くの学生やデザイナーが集まる中、カン・タイクン氏、アラン・チャン氏、トミー・リー氏ほか、DNPとなじみの深いデザイナー達や日本からも多数のデザイナーが参加するなど、貴重な文化交流が行われた。

主催：K11

会場：香港 K11 art space

企画：Milkhake (香港)、OOO Projects (大阪)

協力：公益財団法人DNP文化振興財団

In recent years “typographics ti:”, the public relations magazine of the Japan Typography Association, carried a series of special features introducing cutting-edge graphic design from around Asia. In 2013 ddd gallery, for its 190th exhibition, held “type trip to Osaka – typographics ti: 270”. Here, exhibits were reconfigured and displayed with the cooperation of designers from the eight cities covered in the series: Seoul, Hong Kong, Singapore, Taipei, Shenzhen, Bangkok, Beijing and Osaka. The exhibition at ddd, where visitors were able to sense firsthand the ideas and creativity of each location, was enthusiastically received – so much so, that designers from the various cities voiced interest in further expanding and developing the original exhibition. Their call was answered with the organization of this exhibition in Hong Kong at K11. During its run the exhibition attracted a record number of visitors to the gallery, including many designers and students. Participants included Kan Tai-Keung, Alan Chan, Tommy Li, designers long familiar to DNP as well as many designers from Japan, resulting in a rare and cherished opportunity for cultural exchange.



Organizer: K11

Venue: K11 art space, Hong Kong

Planning: Milkhake (Hong Kong), OOO Projects (Osaka)

Cooperation: DNP Foundation for Cultural Promotion

“Tokyo TDC 2013” Traveling Exhibition at The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen, China

January 18 – March 11, 2014

「TDC展 2013」巡回展 中国・深圳 The OCT Art & Design Gallery

日本のみならず世界各国のデザイナーから注目される国際デザインコンペティション「東京TDC賞」。TDC賞受賞作品とノミネート作品ならびに優秀作品を紹介する「TDC展」が、昨年引き続き、中国・深圳のThe OCT Art & Design Galleryへ巡回した。「TDC展 2013」での展示作品に、得票数こそ及ばなかったものの、東京TDC賞ならではのユニークな応募作品を加え、規模を拡大して展示。同ギャラリーのデザイン顧問である王序(ワン・シュ)氏監修により、OCT風味をプラスした展覧会となった。

The Tokyo TDC Awards are an international design competition that regularly attracts avid attention from designers not only in Japan but around the world. This year, for a second straight year the “Tokyo TDC Exhibition,” which introduces the award-winning works as well as nominated and other outstanding works, traveled to The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen, China. The scale of the show was expanded this year with the addition of entries that failed to garner sufficient votes but that nevertheless reflected the uniqueness of this special awards competition. The exhibition was enhanced by the distinctive “OCT taste” deriving from its curation by Wang Xu, the gallery’s design advisor.



“Japanese Poster Artists – Cherry Blossom and Asceticism” at Museum für Gestaltung Zürich

February 12 - May 25, 2014

日本・スイス国交樹立150周年記念 「日本のポスター展 - 咲き誇る美と潔さ」



日本・スイス国交樹立150周年記念イベントの一環として、1950年代から現在までの日本のポスター、約80作家/300作品ほどを紹介する展覧会が、スイスで開催された。今回のために新たに収集されたポスターを含め、展示作品は、すべてチューリッヒ造形美術館の所蔵品で構成。財団から寄贈を行った田中一光、永井一正、福田繁雄のポスターも多数紹介された。作品への理解を深める目的で、日本人作家の生の声が収録されたインタビューDVD『CREATORS FILE』(DNP文化振興財団発行)などが上映され、また、ggg Books全巻の閲覧コーナーも設置、展覧会と合わせて好評を博した。

会場：チューリッヒ造形美術館
会期：2014年2月12日～5月25日
主催：チューリッヒ造形美術館
共催：公益財団法人DNP文化振興財団
展示作品数：332点
入場者数：14,056名

チューリッヒ造形美術館
ポスターコレクション部門、キュレーター
Dr. ベッティーナ・リヒター

日本とスイスの国交樹立150周年を記念する文化事業として、チューリッヒ造形美術館では2014年春、魅力的な日本のポスターの世界を紹介する作家展を開催しました。当館のポスター・コレクション部門では日本の作品を多数収蔵しており、1979年と1993年にもそれらを紹介する企画展を開催しています。今回は1955年から2012年のポスター 332点を展示し、専門家からも一般の方々からも好評を得ました。DNP文化振興財団(東京)からは福田繁雄、永井一正、田中一光の3巨匠のポスター作品が寄贈され、今回の企画展において中心的な役割を果たしました。DNP財団からはさらに、当館が今回の企画展やコレクションに向けて現代ポスター作品を入手する際にも、多大なご尽力をいただきました。こうして様々な世代のデザイナーの作品が一堂に集められ、私たちの目の前で互いに響きあう様を紹介することができたのです。作品に備った詩的な官能性と神秘的なメッセージ、生意気で挑発的なニュア

ス、ビジュアルコミュニケーションにおける法則とされているルールをことごとく無視したかのような表現方法は、年齢を問わず多くの人々の心をとらえ、魅了しました。会場を訪れた人は、次々に出会う現代日本の姿、すなわち高度に現代的な中に数世紀に及ぶ文化を内包した美的感覚に、衝撃の連続でした。また企画展に合わせてワークショップや企画展での討論会、ガイド付きツアー、コンサートも催され、スイス国内外から訪れた多数の人々が楽しいひと時を過ごしました。





This exhibition was held in Zurich as part of celebrations marking the 150th anniversary of diplomatic relations between Switzerland and Japan. The show introduced approximately 300 posters by some 80 Japanese artists, spanning from the 1950s to the present. All posters, including those newly collected for this exhibition, are part of the permanent collection of Museum für Gestaltung Zürich. The exhibition introduced many posters by Ikko Tanaka, Kazumasa Nagai and Shigeo Fukuda donated by the DNP Foundation for Cultural Promotion. "CREATORS FILE," a DVD of interviews of Japanese artists created by the Foundation, was shown as a way of deepening visitors' understanding of the works on display. An area was also set up where visitors were able to pore through the entire series of ggg Books, a feature that was well received.

Venue: Museum für Gestaltung Zürich
 Dates: February 12—May 25, 2014
 Organizer: Museum für Gestaltung Zürich
 Co-organizer: DNP Foundation for Cultural Promotion
 Number of works on display: 332
 Number of visitors: 14,056

Dr. Bettina Richter
 Curator, Poster Collection,
 Museum für Gestaltung Zürich

As a cultural contribution to the 150th anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and Switzerland, in spring 2014 the Museum für Gestaltung Zürich presented, once more, a fascinating look at Japanese posters. Tribute had already been paid to the rich collection of Japanese posters from the Museum's poster collection in 1979 and 1993, this latest exhibition showed 332 posters from the years 1955 to 2012 and delighted both experts and the general public. The donation of the poster works of the three old masters, Shigeo Fukuda, Kazumasa Nagai and Ikko Tanaka, by the DNP Foundation for Cultural Promotion in Tokyo was a central support for this project. Equally, help provided by this foundation enabled contemporary posters to be acquired for the exhibition and the collection. In this way works by designers from different generations could engage each other in a fascinating dialogue. Their poetic sensuality and mystical messages as well as their cheeky

provocative quality and dismissal of all the assumed rules of visual communication gripped the large public and appealed to visitors both young and old. The exhibition provided them with constantly surprising encounter with contemporary Japan and an aesthetic that on the one hand is entirely contemporary yet is embedded in a centuries-old culture. In addition the accompanying program with workshops, discussions in the exhibition, guided tours and concerts attracted numerous visitors from Switzerland and abroad.

Photos : 1-5,7 Regula Bearth, ©ZHdK
 Photos : 6,8,9 Johannes Dietschi, ©ZHdK

研究助成事業

Research Support

2013-2014 Financial Support Activities

2013 - 2014年度助成実績

1	<p>対象 第25回すかがわ国際短編映画祭</p> <p>主催 すかがわ国際短編映画祭実行委員会／ 須賀川市教育委員会</p> <p>年月 2013/5</p> <p>金額 30,000円</p> <p>備考 短編映画フェスティバルおよびコンペ</p>	<p>Target 25th Sukagawa International Short Film Festival</p> <p>Organizers Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee, Sukagawa Board of Education</p> <p>Date May, 2013</p> <p>Amount JPY30,000</p> <p>Remarks Short film festival and competition</p>
2	<p>対象 第25回田善顕彰版画展</p> <p>主催 須賀川商工会議所青年部／ 須賀川市教育委員会後援</p> <p>年月 2014/2</p> <p>金額 50,000円</p> <p>備考 須賀川出身の江戸期の銅版画家、亜欧堂田善（あおうどうでんぜん）顕彰を目的とする市内小中学生対象の版画コンクール</p>	<p>Target The 25th Denzen Print Exhibition</p> <p>Organizers Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division, Sukagawa Board of Education</p> <p>Date February, 2014</p> <p>Amount JPY50,000</p> <p>Remarks Print contest for Sukagawa elementary and junior high school students aimed at spreading recognition of copper plate print artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822).</p>



Review of ggg 2013-2014

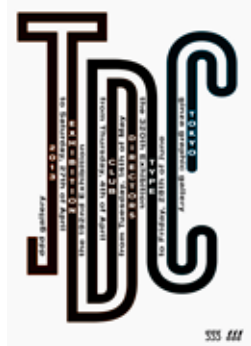
ggg 展覧会概要

TDC展 2013

会期=2013年4月4日-27日
 受賞作家=○グランプリ=ステファン・サグマイスター&ジェシカ・ウォルシュ ○特別賞=仲條正義、葛西薫 ○TDC賞=新世界タイポ研究会(岡澤慶秀・塚田哲也・秀親)、フェリクス・ファエフリ、エーリヒ・プレヒビュール、栗林和夫、スタンリー・ウォン(アナザーマウンテンマン) ○タイプデザイン賞=アン・サムヨル ○RGB賞=コーエン・ヴァン・パレレン
 展示概要=先端的なタイポグラフィ作品が一堂に会する国際コンペティション「東京TDC賞」(東京タイプディレクターズクラブ)の成果を紹介するTDC展。2012年秋の公募に寄せられた3,015点(国内2,006、海外1,009)の応募作から厳正な審査によって選ばれた「東京TDC賞2013」。この受賞10作品をはじめ、ノミネート作品、優秀作品を合わせた125作品を展覧。毎年、先鋭的かつ実験的な作品が選定されるが、本年度もグランプリの映像作品をはじめ、ポスターやハンガルのタイプデザイン、ユニークなデザインプロジェクトなど幅広いジャンルの作品が集まり会場を埋めた。

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

Dates = April 4-27, 2013
 Award Winners = Grand Prix: Stefan Sagmeister & Jessica Walsh; Special Prize: Masayoshi Nakajo, Kaoru Kasai; TDC Prize: Shinsekai Type Study Group (Yoshihide Okazawa, Tetsuya Tsukada, Hidechika), Felix Pfäffli, Erich Brechtbühl, Kazuo Kuribayashi, Stanley Wong (anothermountainman); Type Design Prize: Ahn Sam-yeol; RGB Prize: Cohen Van Balen
 Exhibition Overview = Tokyo Type Directors Club Exhibitions present the results of an open international design competition organized annually by the Tokyo Type Directors Club (TDC). The 2013 show featured a total of 125 works selected from among 3,015 entries (2,006 from Japan and 1,009 from overseas) submitted in autumn 2012. These included the 10 winners of the 2013 TDC Awards plus other nominated works and other outstanding entries. Every year the judges select works that are both cutting-edge and experimental, and this year was no exception. The gallery was filled with works spanning diverse genres: from the Grand Prix-winning video to posters, type design for Korean Hangul, a unique design project, etc.



Design: Ralph Schraivogel

KM カレル・マルテンス

会期=2013年5月8日-30日
 後援=オランダ王国大使館
 作家略歴=1961年オランダのアーンヘム芸術工芸大学卒業。以降、フリーのグラフィックデザイナーとして、タイポグラフィを専門に活動を続ける。クライアントワークに加えて、常に印刷作品や立体作品の制作に動かし、書籍や印刷物のほか、切手、テレホンカード等のデザイン、建築物のサイン計画やタイポグラフィック壁画なども手がける。主な受賞に、H.N.ヴェルクマン賞(93年)、A.H.ハイネケン芸術賞(96年)、ゲリット・ノルツィ賞(2012年)ほか。
 展示概要=オランダを代表するグラフィックデザイナーの日本初の個展。一階はアムステルダムと東京の時差/距離感を示す8連の大時計などの実験作品や、彼の作品にもしばしば使用される日常生活の中で見つけてきた「ファウンド・オブジェ」等を用いて、gggの空間で彼のスタジオを再現した壁画や展示台のインスタレーションを展開。地階では長年にわたりデザイン責任者として携わってきた建築誌「OASE」全号の展示など、実際のクライアントワークを紹介。その二つの面を見せることで、マルテンス作品の真髄に迫る展示となった。

KM Karel Martens

Dates = May 8-30, 2013
 Support = Embassy of the Kingdom of the Netherlands
 Artist Profile = Graphic designer Karel Martens completed his education at the Arnhem Academy of Art and Industrial Art (Holland) in 1961. Since then he has worked as a freelance graphic designer, specializing in typography. In addition to commissioned works, throughout his career he has created printed and three-dimensional works. Besides books and printed matter, he has designed stamps, telephone cards, signage, etc. Among his major awards have been the H. N. Werkman Prize (1993), the Dr. A. H. Heineken Prize for the Arts (1996), and the Gerrit Noordzij Prize (2012).
 Exhibition Overview = The ground floor of the gallery contained experimental works such as a series of eight large clocks indicating the time difference and sense of distance between Amsterdam and Tokyo. Also, using "found objects" from everyday life of the kind Martens often uses in his works, the venue incorporated walls recreating his studio and an installation of display tables. The downstairs gallery introduced his graphic works, including all issues of the architectural magazine "OASE" for which Martens has long been in charge of design. By showing these dual aspects of his works, the exhibition gave a vivid picture of the quintessence of Martens' design achievements.



Design: Karel Martens
 Collaboration with Toshimasa Kimura

ホワイ・ノット・アソシエイツ 予定は失敗のもと。未定は成功のもと。

会期=2013年6月5日-29日
 作家略歴=ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)同級生であるアンディ・アルトマン、デイヴィッド・エリス、ハワード・グリーンホルグが、1987年卒業と同時に領域横断デザイングループ、ホワイ・ノット・アソシエイツを設立。以来25年にわたり、伝統的なグラフィックデザインの枠を飛び越える革新的作品で知られる。様々なメディアを使った実験精神を、CI、モーショングラフィックス、TV-CM、エディトリアル、出版、環境デザインなどに展開させることで、既成概念を破ってきた。
 展示概要=彼らの表現の基盤である斬新なタイポグラフィを壮大なスケールで展開した2012年のパブリックアート作品「コメディ・カーペット」(アーティスト、ゴードン・ヤングとのコラボレーション)など最近の話題作を始め、スタジオ設立からの25年間の多ジャンルにおよぶ代表的な仕事の数々を紹介。長年にわたり第一線で活躍を続け、東京TDCグランプリを3度受賞するなど日本でも評価の高いホワイ・ノット・アソシエイツの、大胆さとダイナミクスを持ち合わせた自在な世界を感じる内容となった。

Why Not Associates – We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong

Dates = June 5-29, 2013
 Artist Profile = On leaving the Royal College of Art in 1987, fellow graduates Andy Altmann, David Ellis and Howard Greenhalgh immediately formed the multi-disciplinary design group Why Not Associates. For over 25 years Why Not Associates have become known for creating innovative work that pushed the boundaries of traditional graphic design. They have achieved this by a love of experimenting in many different media and applying it through corporate identity, motion graphics, television commercials direction, editorial design, publishing and environmental design.
 Exhibition Overview = The exhibition introduced widely acclaimed works of recent vintage such as "Comedy Carpet," a work of public art created in 2012 (in collaboration with artist Gordon Young) highlighting, on grand scale, their innovative typography which serves as the basis of their creative expression. Also on show were many of Why Not Associates' representative works in diverse genres from their 25-year track record. Throughout this long period they have consistently maintained a prominent position in their field, enjoying high acclaim in Japan as demonstrated by their winning of three Tokyo TDC Grand Prizes. This show captured their bold and dynamic artistic world brilliantly.



Design: WHY NOT ASSOCIATES
 Calligraphy: Katsumi Asaba

2013 ADC展

会期=2013年7月4日-29日
 受賞作家=○グランプリ=佐藤卓+中村勇吾+小山田圭吾 ○ADC会員賞=佐藤卓+野間真吾、植原亮輔+渡邊良重 ○原弘賞=葛西薫
 <以下G8にて展示>○ADC賞=河合雄流+平山浩司、関口現+高崎卓馬、真下淳+浅葉球+早川倫永、池澤樹+鞍掛純一、河合雄流、小杉幸一+山本一磨+橋爪慎一郎、富田光浩+梶原道生+牧野伊佐夫、八木義博+フィリップ・ワイズベッカー、岡田善敬、サノ☆ユカコ+田島一成
 展示概要=ADC(東京アートディレクターズクラブ)は、1952年の創立以来日本の広告・デザインを牽引する活動を続けており、会員より選出されるADC賞は、その年の日本の広告・デザイン界の最も名譽あるもの一つとして注目を集める。2013年度ADC賞は、12年5月から13年4月までの1年間に発表された多ジャンルにおよぶ約8,500点の応募作品の中から、76名の会員によって厳正な審査が行われ選出された。本展ではこの審査会で選ばれた受賞作品と優秀作品を、ggg[会員作品]、G8[一般作品]の2会場で紹介。今年もグラフィック、広告の最高峰に輝く作品の数々が勢ぞろいした。

2013 Tokyo Art Directors Club

Dates = July 4-29, 2013
 Award Winners = Grand Prix: Taku Satoh + Yugo Nakamura + Keigo Oyamura; ADC Members Award: Taku Satoh + Shingo Noma, Ryojke Uehara + Yoshie Watanabe; Hara Hiromu Award: Kaoru Kasai; ADC Award (shown at Creation Gallery G8): Takeru Kawai + Koji Hirayama, Gem Sekiguchi + Takuma Takasaki, Atsushi Mashimo + O Asaba + Tomoe Hayakawa, Tatsuki Ikezawa + Junichi Kurakake, Takeru Kawai, Koichi Kosugi + Kazuma Yamamoto + Shinichiro Hashizume, Mitsuhiro Tomita + Michio Kajiwara + Isao Makino, Yoshihiro Yagi + Philippe Weisbecker, Yoshinori Okada, Yutaka Sano + Kazunari Tajima
 Exhibition Overview = Since its founding in 1952, the Tokyo ADC has continuously undertaken activities to promote advertising and design in Japan. The Tokyo ADC Awards garner attention as one of the highest honors presented in Japan's advertising and design fields each year. The 2013 award winners were chosen by 76 members from roughly 8,500 entries in numerous genres released between May 2012 and April 2013. The award-winning and other outstanding works were shown at two venues: ggg (works by ADC members) and G8 (works by non-members). Together they offered visitors a rich panorama of the year's most brilliant achievements in these fields.



Design: Hiroaki Nagai

大宮エリー展

会期 = 2013年8月5日 - 28日

作家略歴 = 1975年大阪生まれ。広告代理店勤務を経て2006年に独立。映画監督、脚本家、作家、演出家、CMディレクター/プランナー、さらにはテレビでの音楽番組MCにラジオパーソナリティなど多方面で活躍。近年では言葉と造形によるインスタレーションの体験型展覧が話題になるなど枠に捉われないバラエティ豊かな活動を続けている。

展示概要 = 一階では大宮氏が手がけた映像作品を、CM、テレビドラマ、舞台、映画、プロモーションビデオなど、テーマごとに来場者がiPadで視聴出来るようにするとともに、各作品のキャプチャ画像をキャンバス出力したものを額装し、壁面いっぱいに展示、美術館のような雰囲気を出した。地階では展示空間を大胆に使用し、空と神様をテーマにした壁画と、龍と雲の迫力あるインスタレーションによる新作を発表。7年間のOL時代と独立後の7年間に手がけた膨大な仕事を振り返る展覧会となった。また会場貸出しを行った大宮氏本人が思いを込めて語ってくれる全作品音声ガイドも大好評だった。

Ellie Omiya Exhibition

Dates = August 5-28, 2013

Artist Profile = Born in Osaka in 1975, Ellie Omiya worked for an advertising agency before going freelance in 2006. She wears a multitude of hats: as film director, scriptwriter, author, producer, commercial film director and planner, TV emcee and radio personality, among others. In recent years she has continued to be active in a boundless variety of fields, one of her most talked-about endeavors being a "hands-on" solo exhibition featuring an installation of words and shapes.

Exhibition Overview = The first floor of the gallery introduced Ms. Omiya's video works, with visitors provided with iPads on which they could watch her commercials, TV dramas, films, promotional videos and other works arranged by theme. Captured images of her works, output on canvas, were framed and displayed on the walls in the manner of an art museum. In the downstairs gallery, Ms. Omiya made bold use of the display space to show new works: wall paintings on the themes of the sky and god, and a dynamic installation of a dragon and clouds. The exhibition served as a retrospective of the enormous volume of works Ms. Omiya made during her seven years working for a company and seven years as a freelancer. The audio guide loaned to visitors, in which Ms. Omiya personally spoke about all her works, was especially well received.



Design: Issay Kitagawa

PARTY そこにいない。展

会期 = 2013年9月4日 - 28日

作家略歴 = 2011年設立。伊藤直樹、清水幹太、中村洋基、川村真司の四人のクリエイティブディレクターが率いるクリエイティブラボ。インターネットの進化による社会の「ネットワーク化」と「グローバル化」に対応した、ビジュアル、コミュニケーション、プロダクト、サービス、イベント、コンテンツ、空間など、デジタルの技術を活用したデザインを行う。東京とニューヨークにオフィスを構え、世界の様々な課題やクライアントのニーズにも対応、国際的な評価も高い。

展示概要 = ネットワーク化が進んだ現代の社会では「そこにいない」ということが必ずしも重要ではないかもしれない。その場にいなくても、いろいろなことを見たり、聞いたり、体験することが出来る。そんな「そこにいない」ことを切り口に、時間と場所の制約から自由になれるというネットワーク化社会の本質を突いた実験的な作品を展示した。単に鑑賞するのではなくインタラクティブに体験をする。PARTYが設立以来手がけてきた数々のデジタル技術を駆使した取組みを活かしたユニークな展示空間となった。

PARTY Not There. Exhibition

Dates = September 4-28, 2013

Artist Profile = Established in 2011, PARTY is a creative lab led by four creative directors: Naoki Ito, Qanda Shimizu, Hiroki Nakamura and Masashi Kawamura. In response to the networking and globalization of society as the Internet evolves, they perform design work employing digital technology in areas including visuals, communication, products, services, events, contents and space. Their work has received high international acclaim, and to meet the needs of clients and projects worldwide PARTY has offices in both Tokyo and New York.

Exhibition Overview = In today's highly networked society, "being there" is perhaps not necessarily of great importance. Even without physically being someplace, today it's possible to see, hear and experience things of all sorts. For their exhibition, PARTY focused on this notion of "not being there" with a show of experimental works at the essence of networked society, free from constraints of time and place. The exhibition was a place not to admire their works but rather to interact with them. The result was a unique display space availing of PARTY's numerous forays in digital technology since their establishment.



Design: PARTY

長嶋りかこ展 [Between human and nature]

会期 = 2013年10月3日 - 28日

作家略歴 = 1980年生まれ。グラフィックデザイナー/アートディレクター。「ラフォーレ原宿」の年間広告グラフィック、坂本龍一氏のYCAM 10周年記念祭ライブイベントのポスターデザイン、「YVAN VALENTIN」のパッケージデザインなど、グラフィックデザインを軸に、ブランディング、CI、VI、ファッションデザイン、プロダクトデザイン、広告などを手がける傍ら、パーソナルワークとして現代美術家の宮島達男氏らと「PEACE SHADOW PROJECT」を行う。

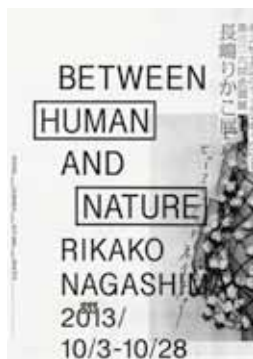
展示概要 = 展覧会のテーマは「人と自然の間」。シンプルかつダイレクトにメッセージを伝えるアイデアと、アパングアルドで女性らしい繊細さを併せ持つアートディレクションで知られる長嶋氏の代表的な仕事の数々を紹介するとともに、一階では自身が手がけるブランド「HUMAN_NATURE」の洋服を発表。都市の日常のなかさまざまな角度で「自然」を意識するというテーマをつくった、生活に身近な「身にまとうもの」は実際に会場で試着、購入も可能。展覧会としてはユニークなその試みも話題となった。

Rikako Nagashima Exhibition: "Between human and nature"

Dates = October 3-28, 2013

Artist Profile = Graphic designer and art director Rikako Nagashima was born in 1980. Her work centers on graphic design, exemplified by the annual advertising graphics for Laforet Harajuku, poster design for Ryuichi Sakamoto's live event and packaging design for Yvan Valentin. But she also works broadly in other areas such as branding, CI, VI, fashion design, product design and advertising. On a private basis she is involved in the Peace Shadow Project together with contemporary artist Tatsuo Miyajima et al.

Exhibition Overview = The theme of Ms. Nagashima's exhibition was "Between human and nature." The show introduced a large number of the most prominent works of this designer who is known for her ideas that convey messages simply and directly, and for her art direction combining avant-garde taste and feminine delicacy. In the ground floor gallery she showed her private brand of clothing, "HUMAN_NATURE." She creates it on the theme of maintaining an awareness of Nature from various angles in our daily urban lives, and visitors were able to try on and purchase Ms. Nagashima's creations made, she said, as "things to be worn in everyday life." This undertaking, which was very unusual for an exhibition, also garnered wide interest.



Design: Rikako Nagashima

ヤン・チヒョルト展

会期 = 2013年11月1日 - 26日

監修 = 白井敬尚

副監修 = マルチン・F・ル・クールト

作家略歴 = 1902年ライプツィヒ生まれ。タイポグラフィ、カリグラフィ。ライプツィヒ美術書籍アカデミー、ドレスデン美術工芸学校、および待生としてヴァルター・ティーマンに学ぶ。数多くの書籍やポスターのデザイン、「新しいタイポグラフィ」、「タイポグラフィ形成」を始めとする著書、戦後のペンギンブック社でのブックデザイン、Sabonなどの書体デザインと、その広範な活動で20世紀のタイポグラフィに大きな影響を与えた。1974年没。

展示概要 = デザイン史、特にタイポグラフィ史における最重要人物の一人、ヤン・チヒョルトの日本初となる展覧会。マルチン・F・ル・クールト氏を始めとする個人コレクター6名の協力により集められた、ポスター、書籍を中心とする350点余りに及ぶ珠玉のチヒョルトデザインを紹介。その圧倒的なボリュームで、チヒョルトの生涯にわたる活動とそこに込められた哲学を展望できる内容となった。

Jan Tschichold

Dates = November 1-26, 2013

Supervision = Yoshihisa Shirai

Supervisory Assistance = Martijn F. Le Coultre

Artist Profile = Typographer and calligrapher Jan Tschichold was born in Leipzig, Germany in 1902. He attended the Leipzig Academy of Art and Book Production and the Dresden School of Arts and Crafts and studied privately under Walter Tiemann. His broad-ranging activities - from books such as *Die neue Typographie (The New Typography)* and *Typographische Gestaltung (Typographic Design)*, to book design work for Penguin in the postwar years, to typeface designs for Sabon, etc. - made Tschichold one of the most influential forces in 20th century typography. He died in 1974.

Exhibition Overview = This was the first exhibition in Japan dedicated to Jan Tschichold, one of the most important creative artists in the history of design, especially typography. The exhibition introduced more than 350 of Tschichold's outstanding works, particularly posters and books, assembled with the cooperation of six private collectors, including Martijn F. Le Coultre. The overwhelming volume of Tschichold's output on display enabled visitors to gain an overview of his lifelong activities and their underlying philosophy.



Design: Yoshihisa Shirai

トマシェフスキ展 世界を震わす詩学

会期 = 2013年12月2日 - 25日
後援 = ポーランド広報文化センター
監修 = 矢萩 俊郎
副監修 = フィリップ・ボンゴフスキ
作家略歴 = 1914年ワルシャワ生まれ。デザイナー、イラストレーター、風刺画家。ワルシャワ美術アカデミーで学び、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞等を受賞し、ロンドン王立美術学院より名誉ロイヤルデザイナーに任命される。ワルシャワ美術アカデミーで教授を務め、ポーランドのみならず世界からアトリエに来た学生にも教え、大きな影響を与えたポーランドポスター界の巨匠。2005年没。
展示概要 = トマシェフスキの息子であるフィリップ・ボンゴフスキ氏の協力を得て、氏の貴重な所蔵作品の中から、代表的なポスター101点、ポスターの原画、ドローイング、雑誌カバーなど36点を、一階から地階へ、ほぼ年代順に紹介。ポーランド派ポスターの草分け的な存在であり、20世紀のポスター史やその後の世代のデザイナー達に、計り知れない影響を及ぼしたトマシェフスキの本質に迫る展示となった。

Tomaszewski, The Poetic Spirit

Dates = December 2-25, 2013
Support = Instytut Polski w Tokio
Supervision = Kijuro Yahagi
Supervisory Assistance = Filip Pagowski
Artist Profile = Henryk Tomaszewski, designer, illustrator and satirical artist, was born in Warsaw, Poland in 1914. He studied at the Warsaw Academy of Fine Arts, won numerous prizes including Gold Prize at the International Poster Biennale in Warsaw, and was bestowed the title of Honorary Royal Designer for Industry by the Royal Society of Arts in London. Tomaszewski also taught at the Warsaw Academy of Fine Arts. In view of his great influence, today he is widely acknowledged as the grand master of Polish poster art. He died in 2005.
Exhibition Overview = The exhibition - gleaned from the invaluable collection of Tomaszewski's son, Filip Pagowski - brought together 101 of Tomaszewski's posters augmented by 36 additional items including his original poster images, drawings and magazine covers. These were displayed in near chronological order starting from the ground floor gallery and continuing to the downstairs venue. As one of the pioneers of Polish poster art, Tomaszewski had an immeasurable influence on 20th century poster history and on designers of the subsequent generation, and this exhibition provided visitors a glimpse at the essence of his genius.



Design: Kijuro Yahagi

勝井三雄展 兆しのデザイン

会期 = 2014年1月9日 - 31日
作家略歴 = 1931年東京生まれ。東京教育大学卒業。味の素株式会社を経て1961年勝井デザイン事務所設立。ビジュアルデザイン、主に情報をグラフィックデザインに成立させる可視領域に関わる。数々の万博のアートディレクションなどを始め、デザイン教育やインターナショナル・コンペティションの審査員など幅広く活動。国内外での受賞多数。東京ADC会員、JAGDA理事、AGI会員、武蔵野美術大学名誉教授。
展示概要 = 一階では勝井氏が長年にわたり取り組んできた視覚に関する問題を、ポスター作品と、壁面3面を大胆に使用した迫力ある映像インスタレーションで表現。合わせて新作の大型本「ゆらぎとゆらぎ」を展示した。地階では半世紀におよぶ勝井氏の膨大な仕事の中からポスターとエディトリアルな代表的な作品を厳選して紹介。黒い壁面にはポスター作品、表面に黒い砂を敷き詰めた展示台には100点のエディトリアル作品が整然と並び、その黒で統一された静謐な展示空間も注目を集めた。

Mitsuo Katsui Exhibition - Design of Symptom

Dates = January 9-31, 2014
Artist Profile = Mitsuo Katsui was born in Tokyo in 1931. After graduation from Tokyo University of Education, he initially worked for Ajinomoto until he established his own design office in 1961. His field is visual design, primarily focused on visually infusing information into graphic design. His range of activities is remarkably wide, including art direction of numerous expositions, design education, and serving as a judge at international competitions. He is a member of Tokyo ADC and AGI and serves as a director of JAGDA. He is Professor Emeritus at Musashino Art University.
Exhibition Overview = The ground floor gallery was devoted to Mr. Katsui's long involvement in visual design, including posters as well as a dynamic visual installation making bold use of three wall surfaces. Also on display was Mr. Katsui's new outsize book, Yuragi to yuragi (Fluctuations). The downstairs gallery displayed an array of his posters and representative editorial works, carefully selected from the enormous body of his works created over the course of half a century. The posters were hung on black walls, and 100 editorial works were neatly arranged on display tables on the surface of which black sand had been laid out. The tranquil exhibition space, made uniform with black, also attracted great attention.



Design: Mitsuo Katsui

「指を置く」展 佐藤雅彦+齋藤達也

会期 = 2014年2月6日 - 28日
作家略歴 = 佐藤雅彦・東京藝術大学大学院映像研究科教授 / 慶應義塾大学環境情報学部客員教授。独自の手法や考え方で、映像、アニメーション、グラフィック、教育方法、脳科学と表現の研究など、分野を超えた活動を行っている。齋藤達也: 1979年生まれ。映像技術やコンピュータ・プログラミング、電子工学を駆使した展示設計、広告・舞台演出を行う一方、人間に潜在している知覚・認知能力を発掘することによって新しいメディア表現の可能性を研究模索している。
展示概要 = 佐藤雅彦氏と齋藤達也氏がこの数年來「指(身体)とグラフィックデザインの新しい関係」を探求してきた中で生まれた新しい表現、新しい表象、新しい可能性を、会場内のさまざまなグラフィックに、「指を置く」という単純な所作を行うことで体感してもらった。紙のグラフィックは反応・変化しないが、「指を置く」だけで鑑賞者の内部に新しい表象が立ち上がる。その体験の不思議さは大きな注目を集め、会期中多くの来場者で賑わった。

"Putting Finger" Masahiko Sato + Tatsuya Saito

Dates = February 6-28, 2014
Artist Profiles = Masahiko Sato is a Professor in the Graduate School of Film and New Media at Tokyo University of the Arts. Using his own methods and approaches, Mr. Sato undertakes activities transcending the parameters of any one specific field, his interests encompassing film and video, animation, graphics, education methods, neuroscience and expression-related research. Tatsuya Saito, born in 1979, delves in video technology, computer programming, display design employing electronics, advertising and stage production. He also explores new possibilities in media expression by probing human beings' inherent perceptual and cognitive capabilities.
Exhibition Overview = In recent years Masahiko Sato and Tatsuya Saito have been probing new relationships between graphic design and fingers, i.e. the human body, and in the process they have given birth to new modes of expression, new representations and new possibilities. In this exhibition, visitors could experience these for themselves by the simple gesture of placing their fingers, literally, on various graphic works set out throughout the gallery. Although the paper graphics undergo neither a reaction nor change, the visitor produces new representations simply by the act of placing fingers.



Design: Masahiko Sato + Masaya Ishikawa

明日のデザインと福島高 [Social Design & Poster]

会期 = 2014年3月6日 - 31日
作家略歴 = 1958年生まれ。日本デザイナー学院広島校卒業後、上京。浅葉克己デザイン室を経て1985年ADK入社。1999年福島デザイン設立。2010年より「デザインにおける社会貢献の可能性」を探求するため、数多くのソーシャルプロジェクトを企画、実施している。障がい者アトリエ「Artbility」の活動支援を始め、東日本大震災の被災地支援活動として「UNICEF 祈りのツリープロジェクト」、JAGDA やさしいハンカチ展」などの企画、実施を行っている。展示概要 = 一階では、これまで手探りで生み出してきたソーシャルプロジェクトの数々を始め、素晴らしい活動を行っているNPOにデザインのお力で寄付を集める、新しく立ち上げたプロジェクト「GIFTHOPE」を中心に紹介、実際に会場に来場者がTシャツのデザインをして応募出来る試みを行った。地階では、世界ポスタービエンナーレトヤマでグランプリを受賞した「オディプス王」など、25年の長きにわたって手がけてきた劇団山の手事情社の公演ポスターを一挙公開した。

Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster

Dates = March 6-31, 2014
Artist Profile = Osamu Fukushima was born in 1958. After graduating from the Hiroshima branch of Nippon Designers School, he relocated to Tokyo and joined the design office of Katsumi Asaba. He remained there until 1985 when he joined ADK, staying there until he went freelance in 1999. Since 2010, looking for possible ways of making social contributions through design, Mr. Fukushima has planned and carried out numerous social projects. These include two activities in support of regions affected by the Great East Japan Earthquake: UNESCO's "Prayer Tree Project" and the JAGDA exhibition "Handkerchiefs for Tohoku Children."
Exhibition Overview = The first-floor gallery was devoted to the many social projects Mr. Fukushima has launched in recent years, with special focus on "GIFTHOPE," a new project that aims to use the power of design to generate donations to NPOs that are performing outstanding activities. Visitors were offered the chance to design a T-shirt as part of a competition. The downstairs gallery displayed all of the publicity posters that Mr. Fukushima designed over a period of 25 years for the Yamanote Jijohsha Company theater troupe, including his "Oedipus the King" poster that won the Grand Prix at the 2012 International Poster Triennial in Toyama.



Design: Osamu Fukushima

Review of ddd 2013-2014

ddd 展覧会概要

GRAPHIC WEST 6 大阪新美術館建設準備室デザインコレクション 熱情と冷静のアヴァンギャルド

会期 = 2014年1月17日—3月5日
特別協力 = 大阪新美術館建設準備室
展示概要 = 近現代美術・デザインに特化した新しい美術館の整備を目指す大阪新美術館建設準備室。そのデザインコレクションは質量とともに日本トップクラスの評価を受けている。今年のGRAPHIC WESTは、このコレクションから、1920年代のモダンデザイン発展期から戦後のモダンデザイン成熟期までの作品群を展示しました。
デザイナーが挑んだ「世界をく変える」と「世界をく生成する」。革命と戦争に挟まれたロシアアヴァンギャルドからバウハウス、そして戦後、国際的に展開したスイスやオランダの多彩なグラフィックなどは、社会の動乱や改革の中、夢や理想を追い、デザインを介した新しい社会の構築、時代にふさわしい合理性の追求を目指しました。本展はそんな、ときに熱く、ときに冷たい20世紀デザインのアヴァンギャルドを体験できる展覧会でした。

GRAPHIC WEST 6: Osaka City Museum of Modern Art Collection Modern Avant-Garde Graphics

Dates = January 17 – March 5, 2014
Special cooperation = The office in charge of the preparations for the opening of a new art museum in Osaka
Exhibition Overview = Preparations are currently under way toward the opening of a new “Osaka City Museum of Modern Art” dedicated to modern and contemporary art and design. The design works to be housed in the new museum are already hailed as one of Japan’s foremost collections in terms of both quantity and quality. This year’s GRAPHIC WEST showed works from this collection spanning from modern design’s developing period in the 1920s to its period of maturation in the postwar era. Modern designers took up two challenges: to change the old world and to create a new world. From the Russian avant-garde wedged between revolution and war, to the Bauhaus, to the diverse Swiss and Dutch graphics that under international development in the postwar era, amid social upheavals and reforms designers pursued dreams and ideals and sought to build a new society through design, searching for rationality appropriate to the times. GRAPHIC WEST 6 was an exhibition where visitors could experience the passion, and occasional coolness, of 20th century avant-garde design firsthand.



Design: Satoshi Kondo

[デーデーデー] グルーヴィジョンズ展 groovisions Exhibition: “dddg”

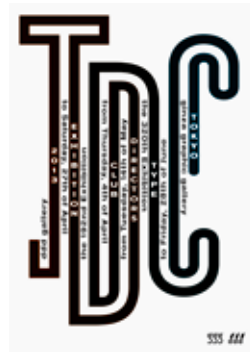
会期 = 2013年3月12日—4月26日
Dates = March 12 – April 26, 2013



Design: Groovisions

TDC展 2013 Tokyo Type Directors Club Exhibition 2013

会期 = 2013年5月14日—6月28日
Dates = May 14 – June 28, 2013



Design: Ralph Schraivogel

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V LIFE 永井一正ポスター展 DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

会期 = 2013年7月9日—8月30日
Dates = July 9 – August 30, 2013



Design: Kazumasa Nagai

2013 ADC展 2013 Tokyo Art Directors Club Exhibition

会期 = 2013年9月10日—10月25日
Dates = September 10 – October 25, 2013



Design: Hiroaki Nagai

大宮エリー展 Elie Omiya Exhibition

会期 = 2013年11月5日—12月20日
Dates = November 5 – December 20, 2013



Design: Issay Kitagawa

Review of CCGA 2013-2014

CCGA 展覧会概要

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
THE POSTERS 1983-2012 -The Prize-Winning Works
from The International Poster Triennial in Toyama-

会期 = 2013年3月1日 - 6月9日
Dates = March 1 - June 9, 2013



Design: Kazumasa Nagai

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V
LIFE 永井一正ポスター展
DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE - Kazumasa Nagai Poster Exhibition

会期 = 2013年9月14日 - 12月23日
Dates = September 14 - December 23



Design: Kazumasa Nagai

現代版画とリトグラフ:
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展Vol.25
Lithographs As Contemporary Prints: 25th Exhibition of
Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

会期 = 2013年6月15日 - 9月8日
Dates = June 15 - September 8, 2013



特別展 第24回田善顕彰版画展
The 24th Denzen Print Award Exhibition

会期 = 2014年2月9日 - 2月15日
Dates = February 9 - 15, 2014





1986-2014

1986

3月 1回 大橋正展 野菜のイラストレーション
 4月 2回 福田繁雄展 Illustric412
 5月 3回 奥村毅正展 燦々彩譜
 6月 4回 秋山育展 ビクチャーレリーフ
 7月 5回 '86 Tokyo ADC展
 8月 6回 アートワークス展 I
 9月 7回 佐藤晃一展 箱について-2
 10月 8回 栗津潔展 エノタメノジブンカクメイ
 11月 9回 道博・ハーバート・バイヤー展
 12月 10回 K2 Live!展

1987

1月 11回 辻修平 いろはの絵展
 2月 12回 花の万博+博覧会のシンボルマーク展
 3月 13回 藤嶋正樹展 geometric love
 4月 14回 松永真 毎日デザイン賞受賞記念展
 5月 15回 安西水丸 二色展
 6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの
 クリエイティブワークス展
 7月 17回 '87 Tokyo ADC展
 8月 18回 アートワークス展 II
 9月 19回 五十嵐威輔の立体数字展
 10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展
 11月 21回 オルガー・マチスのポスター展
 12月 22回 ミルトン・グレイザー展

1988

1月 23回 木村勝・バクサー・ジグディレクション展
 2月 24回 谷口広樹展 猿の記憶
 3月 25回 銀座百点 表紙原画展
 4月 26回 吉田カツ展 描き下し刷り下し
 5月 27回 AGI '88 Tokyo展
 6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展
 7月 29回 '88 Tokyo ADC展
 8月 30回 アートワークス展 III
 9月 31回 情報ポスター・リクルート展
 10月 32回 早川良雄「女」原画展
 11月 33回 仲條正義展 NAKAJOISH
 12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展

1989

1月 35回 ショッピングバッグ・デザイン展
 2月 36回 矢萩喜從郎展
 3月 37回 Texture展
 皆川魔曳子+田原柱一+山岡茂
 4月 38回 タナカノリユキ展 Gokan-都市の表層
 5月 39回 オトル・アイヒャー展
 6月 40回 操上和美展 Photographies
 7月 41回 若尾真一郎展 Wakao Collection
 8月 42回 アートワークス展 IV
 9月 43回 永井一正展
 10月 44回 Europalia '89 Japan
 新作ポスター 12人展
 11月 45回 チャールズ・アンダーソン展
 12月 46回 清原悦志の仕事展 Hommage

1990

1月 47回 秋月繁展 遊びの箱
 2月 48回 菊地信義展 装幀の本「棚」
 3月 49回 原田維夫展 木版画「馬」
 4月 50回 田中一光展 グラフィックアート植物園
 5月 51回 山城隆一展 猫のいないイラスト
 6月 52回 松井桂三展 3D
 7月 53回 寺門孝之展 遺伝子導入天使
 8月 54回 アートワークス展 V
 9月 55回 田原柱一展 光の香り

10月 56回 浅葉克己の新作展 アジアの文字
 11月 57回 伊勢克也展 イメージのマカロニ
 12月 58回 蓮田やすひろ展 ビープル

1991

1月 59回 舟橋全二展
 2月 60回 太田徹也展 ダイヤグラム
 3月 61回 ペア・アーノルティ展
 4月 62回 澤田泰廣展 P2(Printing×Printing)
 5月 63回 新井苑子展 インスピレーションを描く
 6月 64回 Communication & Print
 新作ポスター 10人展
 7月 65回 中垣信夫+中垣デザイン事務所展
 8月 66回 アートワークス展 VI
 10月 67回 Trans-Art 91展
 12月 68回 '91 Tokyo ADC展

1992

1月 69回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラージュ
 2月 70回 立花ハジメ初の個展
 3月 71回 第4回東京TDC展
 4月 72回 ヘンリック・トマシェフスキ展
 5月 73回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
 6月 74回 鹿目尚志展 BOX・XX
 7月 75回 中村誠 個展
 8月 76回 リック・バリセンティ展
 9月 77回 葛西薫展 'AERO'
 10月 78回 瀧本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
 山口はるみ展
 11月 79回 ボール・ランド展
 12月 80回 フロシキ展

1993

1月 81回 小島良平展 Tropica Grafica
 2月 82回 稲越功一展アウト・オブ・シーズン
 3月 83回 '92 Tokyo ADC展
 4月 84回 第5回東京TDC展
 5月 85回 U.G.サトウのポスター展 "Freedom"
 6月 86回 オマーージュ 向秀男展
 7月 87回 文字からのイマジネーション展
 8月 88回 現代香港のデザイン8人展
 9月 89回 勝井三雄展 光の国
 10月 90回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、
 安西水丸展
 11月 91回 ソール・パス展
 12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

1994

1月 93回 栗津潔展 H2O Earthman
 2月 94回 第6回東京TDC展
 3月 95回 上條喬久展 Windscape Mindscape
 4月 96回 片山利弘展
 5月 97回 永井一正展
 6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年展
 7月 99回 '94 Tokyo ADC展
 8月 100回 グラフィック・グッズ展
 10月 101回 平野甲賀「文字の力」展
 10月 九州の九人の九つの個性展
 11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
 12月 103回 原研哉展
 12月 土橋とし子、中村幸子、メグ・ホソキ3人展

1995

1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
 2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
 3月 106回 第7回東京TDC展
 4月 107回 ピーター・ブラッチェンガ展

5月 108回 田中一光展 人間と文字
 6月 109回 ニクラウス・トロツクスラーポスター展
 7月 110回 '95 Tokyo ADC展
 8月 111回 リズム&ヒューズの
 コンピュータグラフィックス展
 9月 112回 八木保展 自然観
 9月 特別展 世界のグラフィック20人展
 ggg Books 20冊刊行記念
 10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展-1
 11月 114回 戸田正寿・イイヤヤランド展
 12月 115回 日本のイラストレーション50年展

1996

1月 116回 蓮田やすひろ展 お江戸で、ゆらゆら
 2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展-2
 3月 118回 ポスター23人展 イン・サンパウロ
 4月 119回 第8回東京TDC展
 5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
 6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
 7月 122回 '96 Tokyo ADC展
 8月 123回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
 9月 124回 K2-黒田征太郎/長友啓典「二脚の椅子」展
 10月 125回 チェコ・アヴァンギャルド・ブックデザイン
 1920s-'30s
 11月 126回 Graphic Wave 1996
 青木克憲+佐藤卓+山形季央
 12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

1997

1月 128回 下谷二助展 人じん
 1月 特別展 (CCGA)ジョセフ・アルバース展
 2月 129回 大橋正展 体温をもつ野菜たち
 3月 130回 東京TDC展
 4月 131回 仲條正義〇〇〇展
 5月 132回 今日の雑誌8誌による・特集工コロジー展
 6月 133回 横尾忠則ポスター展
 吉祥招福繁昌描き下ろし!!
 7月 134回 '97 Tokyo ADC展
 8月 135回 河原敏文とポリゴン・ビクチュアズ展
 9月 136回 メキシコ10人展
 10月 137回 Graphic Wave 1997
 秋田寛+井上里枝+福島治
 10月 特別展「勝負勝負」10周年記念展
 11月 138回 福田繁雄のポスター (SUPPORTER)
 12月 139回 GLOBAL展 世界33人の
 デザイナーによるデュオポスター

1998

1月 140回 鈴木八朗展 8RO ART & AD
 2月 141回 オーデルマツト+ティッシ展
 3月 142回 スタシス・エイドゥレグヴィチウス展
 4月 143回 東京TDC展'98
 5月 144回 スタジオ・ドゥンパー展
 6月 145回 山本容子展 オペラレッスン
 7月 146回 '98 Tokyo ADC展
 8月 147回 河口洋一郎展 電脳宇宙への旅
 9月 148回 Graphic Wave 1998
 蝦名龍部+平野敬子+三木健
 10月 149回 グンター・ランボー展
 11月 150回 フィリップ・アペログ展
 12月 151回 ヘルベルト・ロイピン展

1999

1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
 2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95展
 3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展
 3月 特別展 堀内誠一の仕事展雑誌づくりの決定的瞬間

4月 155回 '99 TDC展
 5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
 6月 157回 日比野克彦展 誘拐したい
 7月 158回 '99 ADC展
 7月 特別展 前田ジョン One-line.com
 8月 159回 矢萩喜從郎展
 9月 160回 Graphic Wave 1999
 鈴木守+松下計+米村浩
 10月 161回 FUSE展
 11月 162回 松井桂三展
 12月 163回 ボール・デイヴィスのポスター展
 12月 特別展 アーヴィング・ベン
 三宅一生の仕事への視点

2000

1月 164回 Graphic Message for Ecology展
 1月 特別展 篠山紀信&マニュエル・ルグリ展
 2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展
 形と機能の詩人
 3月 166回 伊藤憲治展 医学誌「ステスコープ」の
 表紙デザイン半世紀
 4月 167回 '00 TDC展
 5月 168回 Poster Works Nagoya 12
 岡本滋夫+11人のデザイナーたち
 6月 169回 なにわの、こてこてグラフィック展
 7月 170回 2000 ADC展
 8月 171回 日宣美の時代
 日本のグラフィックデザイン1951-70展
 9月 172回 Graphic Wave 2000
 秋山具義+Tycoon Graphics+中島英樹
 10月 173回 D-ZONE/戸田ツトム展
 11月 174回 ビエール・ベルナル展
 12月 175回 本とコンピュータ展

2001

1月 176回 二〇〇一年木田安彦展
 2月 177回 イタロ・ルビ展
 3月 178回 "Spring has come"
 松永真、ディテールの競演。
 4月 179回 01 TDC展
 5月 180回 コントラプント展
 6月 181回 原弘のタイポグラフィ展
 7月 182回 2001 ADC展
 8月 183回 瀧本唯人展 にんげんもよう
 9月 184回 Graphic Wave 2001
 蓋谷亮彦+永井一史+ひびのこづえ
 10月 185回 ハングルポスター展
 11月 186回 サイトウマコト展
 12月 187回 チップ・キッド展

2002

1月 188回 ウーヴェ・レシュ展
 2月 189回 宇野亜喜良展
 3月 190回 デザイン教育の現場から:
 セント・ジュースト大学院の新手法
 4月 191回 02 TDC展
 5月 192回 DRAFT展
 6月 193回 アラン・チャン展 東西西韻
 6月 特別展 花森安治と善しの手帖展
 7月 194回 2002 ADC展
 8月 195回 タナカノリユキ展 OUT OF DESIGN
 9月 196回 Graphic Wave 2002
 左合ひとみ+澤田泰廣+新村則人
 10月 197回 SUN-AD人展
 11月 198回 ブラジルのグラフィックデザイン展
 ブックデザインにみる今日のブラジル
 12月 199回 ハーブ・ルバリン展

2003

- 1月 200回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 2月 201回 サディク・カラムスターファ展
- 3月 202回 現代中国平面設計展
- 4月 203回 03 TDC展
- 5月 204回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 6月 205回 空山基展
- 7月 206回 2003 ADC展
- 8月 207回 新島実展 色彩とフォントの相互作用
- 9月 208回 Graphic Wave 2003
佐野研二郎+野田風+服部一成
- 10月 209回 副田高行「広告の告白」展
- 11月 210回 ステファン・サグマイスター展
- 12月 211回 河野鷹思展

2004

- 1月 212回 永井一正ポスター展
- 2月 213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
- 3月 214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 4月 215回 04 TDC展
- 5月 216回 佐藤卓展 PLASTICITY
- 6月 217回 現代デマークポスターの10年
- 7月 218回 2004 ADC展
- 8月 219回 パーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
- 9月 220回 Graphic Wave 2004
工藤青石+GRAPH+生意気
- 10月 221回 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
- 11月 222回 佐藤可土和展 BEYOND
- 12月 223回 もう一人の山名文夫展 1920s-70s

2005

- 1月 224回 セツの顔のアサハ展
- 2月 225回 バラリンジ・デザイン展
- 3月 226回 青木克憲XX展
- 4月 227回 05 TDC展
- 5月 228回 和田誠のグラフィックデザイン
- 6月 229回 チャマイエフ&ガイスマー展
- 7月 230回 2005 ADC展
- 8月 231回 佐藤雅彦研究室展
- 9月 232回 Graphic Wave 2005
谷田一郎+東泉一郎+森本千絵
- 10月 233回 CCCP研究所展
- 11月 234回 祖父江慎+cozfish展
- 12月 235回 スイスポスター 100年展

2006

- 1月 236回 亀倉雄策1915-1997展
- 2月 237回 野田風展
- 3月 238回 シアン展
- 4月 239回 06 TDC展
- 5月 240回 永井一史/HAKUHODO DESIGN
- 6月 241回 田名網敬一主義展
- 7月 242回 2006 ADC展
- 8月 243回 アレクサンダー・ゲルマン展
- 9月 244回 Graphic Wave 2006: School of Design
古平正義+平林奈緒美+水野学+山田英二
- 9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念:掛け軸展
- 10月 245回 勝手に広告展(中村至男+佐藤雅彦)
- 11月 246回 中島英樹展 CLEAR in the FOG
- 12月 247回 早川良雄展 日本のデザイン黎明期の証人

2007

- 1月 248回 EXHIBITIONS (Part I)
- 2月 EXHIBITIONS (Part II)
- 3月 249回 キムラカツ展: 問いボックス店
- 4月 250回 07 TDC展

- 5月 251回 ヘルムート・シュミット:
デザイン イズ アティテュード
- 6月 252回 廣村正彰: 2D⇔3D
- 7月 253回 2007 ADC展
- 8月 254回 ワルシャワの風 1966-2006
- 9月 255回 佐野研二郎: ギンザ・サローネ
- 10月 256回 中島信也CM展:
中島信也と29人のアートディレクター
- 11月 257回 Welcome to Magazine Pool:
雑誌デザイン10人の越境者たち
- 12月 258回 Aoba Show:
青葉益輝ワン・マン・ショー

2008

- 1月 259回 アートダ! 戸田正寿ポスターアート展
- 2月 260回 グラフィックデザインの時代を築いた
20人の証言 Interviews by 柏木博
- 3月 261回 TEXTASY:
フロディ・ノイエンスジュヴァンダー展
- 4月 262回 08 TDC展
- 5月 263回 アラン・フレッチャー:
英国グラフィックデザインの父
- 6月 264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ
そう言えば、俺。応援団長佐々木●宏
- 7月 265回 2008 ADC展
- 8月 266回 Now Updating... THA/
中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 267回 平野敬子「デザインの起点と終点と起点」
- 10月 268回 「白」原研哉展
- 11月 269回 M/M(Paris) The Theatre Posters
- 12月 270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

2009

- 1月 271回 きらめくデザイナーたちの競演—
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 2月 272回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
- 3月 273回 DRAFT Branding & Art Director
- 4月 274回 09 TDC展
- 5月 275回 矢萩喜徳郎展
[Magnetic Vision/新作100点]
- 6月 276回 マックス・ファーバー展
- 7月 277回 2009 ADC展
- 8月 278回 [ラストショー]細谷巖アートディレクション展
- 9月 279回 銀座界隈限リガヤガ青春ショー
～言い出しっぺ 横尾忠則～
瀬本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
- 10月 280回 山形季央展
- 11月 281回 北川一成
- 12月 282回 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

2010

- 1-2月 283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展II
田中一光ポスター 1953-1979
- 3月 284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展III
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
- 4月 285回 TDC展 2010
- 5月 286回 TALKING THE DRAGON 井上綱也展
- 6月 287回 NB@ggg ネヴィル・フロディ 2010
- 7月 288回 2010 ADC展
- 8月 289回 ラルフ・シュライフォォーグ展
- 9月 290回 プッシュピン・パラダイム
シーモア・クワスト | ボール・デイヴィス |
ミルトン・グレイザー | ジェームズ・マクミラン
- 10月 291回 海と山と新村則人
- 11月 292回 服部一成二十年十一月

- 12月 293回 EUPHRATES ユーフラテス展
～研究から表現へ～

2011

- 1月 294回 秀英体100
- 2月 295回 イアン・アンダーソン/ザ・デザイナーズ・
リパブリックがトキーオに帰ってきた。
- 3月 296回 デザイン 立花文穂
- 4月 297回 TDC展 2011
- 5月 298回 佐藤昇一ポスター
- 6月 299回 レイモン・サヴィニャック展:
41歳、「牛乳石鹸モンサヴォン」のポスターで
生まれた巨匠
- 7月 300回 2011 ADC展
- 8月 301回 [ジー ジー ジー] グルーヴィジョンズ展
- 9月 302回 工藤青石展「形と色と構造の感情」
- 10月 303回 100 ggg Books 100 Graphic Designers
- 11月 304回 イデオポリス東京:
スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ/
美術学修士課程卒業制作展
- 12月 305回 杉浦康平・マンガラ発光

2012

- 1-2月 306回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展IV
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
- 3月 307回 ロトチエンコ
— 晝星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの龍児—
- 4月 308回 TDC展 2012
- 5月 309回 キギ展 植原亮輔と渡邊良重
- 6月 310回 ジャンピン・ヘ フラッシュバック
- 7月 311回 2012 ADC展
- 8月 312回 THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
- 9月 313回 寄藤文平の宴の一研究
- 10月 314回 AGI展
- 11月 315回 横尾忠則 初のブックデザイン展
- 12月 316回 テセウス・チャン:ヴェルクNo.20銀座
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

2013

- 1月 317回 松永真ポスター 100展
- 2月 318回 カリ・ビッポ ポスターとドロイーニング
シンプル・ストロング・シャープ
- 3月 319回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V
LIFE 永井一正ポスター展
- 4月 320回 TDC展 2013
- 5月 321回 KM カレル・マルテンス
- 6月 322回 ホワイ・ノット・アンシエイツ
予定は失敗のもと。未定は成功のもと。
- 7月 323回 2013 ADC展
- 8月 324回 大宮エリー展
- 9月 325回 PARTY そこないない。展
- 10月 326回 長崎わかこ展
[Between human and nature]
- 11月 327回 ヤン・チヒョルト展
- 12月 328回 トマシェフスキ展 世界を震わす詩学

2014

- 1月 329回 勝井三雄展 兆しのデザイン
- 2月 330回 「指を置く」展 佐藤雅彦+齋藤達也
- 3月 331回 明日のデザインと福島治
[Social Design & Poster]



1992-2014

1992

- 1月 1回 Trans-Art 91展
- 3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展 コラーージュ
- 4月 3回 第4回東京TDC展
- 5月 4回 リック・バリセンティ展
- 6月 5回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
- 7月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展
- 8月 7回 ヴァン・オリバー展
- 10月 8回 中村誠 個展
- 10月 9回 マイケル・メイヴリー展
- 11月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、山口はるみ展

1993

- 1月 11回 フロシキ展
- 2月 12回 ホワイ・ノット・アソシエイツ展
- 3月 13回 アレン・ホリ+ロバート・ナカタ展
- 4月 14回 '92 Tokyo ADC展
- 5月 15回 ラッセル・ウォーレン・フィッシャー展
- 6月 16回 第5回東京TDC展
- 7月 17回 文字からのイメージネーション展
- 8月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展 Part II
- 9月 19回 ビル・ソーバーン展
- 10月 20回 U.G.サトウのポスター展 "Freedom"
- 11月 21回 勝井三雄展 光の国
- 12月 22回 現代香港のデザイン8人展

1994

- 1月 23回 ソール・バス展
- 2月 24回 グリーティング・ポップアップ13人展
- 3月 25回 リュディ・パウア／インテグラルコンセプト展
- 4月 26回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、安西水丸展
- 5月 27回 ジェニファ・モラ展
- 6月 28回 永井一正展
- 7月 29回 ウーヴェ・レッシュ展
- 8月 30回 '94 Tokyo ADC展
- 9月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展 Part III
- 10月 32回 デビッド・カーソン&ゲーリー・ケブキ展
- 12月 33回 倉倉雄策ポスター新作展

1995

- 1月 34回 ヘルマン・モンタルポ展
- 2月 35回 ブルーン・ムナリー展
- 3月 36回 グラッパ・デザイン展
- 4月 37回 第7回東京TDC展
- 5月 38回 ミシェル・ブーヴェ展
- 6月 39回 田中一光展 人間と文字
- 7月 40回 テレロング展
- 8月 41回 '95 Tokyo ADC展
- 9月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 IV
- 10月 43回 ベレ・トレント展
- 11月 44回 アジアのデザイナー6人展

1996

- 1月 45回 日本のイラストレーション50年展
- 2月 46回 マーゴ・チェイス展
- 3月 47回 ヴェルネル・イエカー展
- 4月 48回 グンター・ランボー展
- 5月 49回 第8回東京TDC展
- 6月 50回 カリ・ピッツ展
- 7月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
- 8月 52回 '96 Tokyo ADC展
- 9月 53回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
- 10月 54回 アラン・ル・ケルネ展

- 11月 55回 ウッディ・バートル展

1997

- 1月 56回 ジョアン・マシャド展
- 2月 57回 K2オオサカ展 黒田征太郎+長友啓典
- 3月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展
- 4月 59回 東京TDC展
- 5月 60回 メキシコ10人展
- 7月 61回 カトー・デザイン展 思考するデザイン
- 8月 62回 '97 Tokyo ADC展
- 9月 63回 ラルフ・シュライフォーグ展
- 10月 64回 ジェームズ・ピクトル展
- 11月 65回 GLOBAL展 世界33人のデザイナーによるデュオポスター

1998

- 1月 66回 ファイトヘルベント・ヴリンゲル展
- 2月 67回 ジャン・ベノア・レヴィ展
- 3月 68回 〈トロイカ〉ロシア3人展
- 4月 69回 フィリップ・アベログ展
- 6月 70回 東京TDC展'98
- 7月 71回 スタジオ・ドゥンバー展
- 8月 72回 '98 Tokyo ADC展
- 9月 73回 ザフリキ展
- 10月 74回 デビッド・タルタコバ展
- 11月 75回 台湾四人展

1999

- 1月 76回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
- 2月 77回 ビエール・ニューマン展
- 3月 78回 ボーラ・シェアのグラフィックデザイン展
- 5月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展
- 6月 80回 '99 TDC展
- 7月 81回 ヤン・ライリッヒJr.展
- 8月 82回 '99 ADC展
- 9月 83回 スコット・マケラ [WIDE OPEN]展
- 10月 84回 チャズ・マヴィヤネー デイヴィースの世界展
- 11月 85回 マカオ2人展

2000

- 1月 86回 Graphic Message for Ecology展
- 2月 87回 松井桂三展
- 3月 88回 ポール・デイヴィス展
- 4月 89回 なにわの、こてこてグラフィック展
- 5月 90回 '00 TDC展
- 6月 91回 アントン・ベイク展
- 7月 92回 ビエール・ベルナル展
- 9月 93回 2000 ADC展
- 10月 94回 イタロ・ルビ展
- 11月 95回 デザイン教育の現場から：ベルリン芸術大学 オルガー・マチス教室によるアプローチ

2001

- 1月 96回 二〇〇一年木田安彦展
- 2月 97回 コントラプント展
- 3月 98回 ザルツブルク音楽祭ポスター展
- 5月 99回 01 TDC展
- 6月 100回 チップ・キッド展
- 7月 101回 ハンブルクポスター展
- 8月 102回 2001 ADC展
- 9月 103回 ウォルフガング・ワインガルト展
- 10月 104回 "Spring has come" 松永真、ディエールの競演。
- 11月 105回 デザイン教育の現場から II：セント・ジュースト大学院の新手法

2002

- 1月 106回 灘本唯人展 にんげんもよう
- 2月 107回 サイトウマコト展
- 3月 108回 オットー・シュタイン展
- 4月 109回 タビロ展
- 5月 110回 02 TDC展
- 7月 111回 ウィーンのプロスター展：ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
- 7月 112回 三木健展
- 9月 113回 2002 ADC展
- 10月 114回 サディク・カラムスターファ展
- 11月 115回 中国グラフィックデザイン展

2003

- 1月 116回 SUN-AD人展
- 2月 117回 田中一光 ポスターとグラフィックアート展
- 3月 118回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
- 4月 119回 カン・タイキョン+フリーマン・ラウ展
- 6月 120回 03 TDC展
- 7月 121回 ルーバ・ルコバ展
- 8月 122回 2003 ADC展
- 9月 123回 ステファン・サグマイスター展
- 10月 124回 ヨーロッパの文化ポスター展：ノイエ・ザムルンク・ミュンヘンの収蔵作品より
- 11月 125回 空山基展

2004

- 1月 126回 副田高行「広告の告白」展
- 2月 127回 永井一正ポスター展
- 3月 128回 現代デンマークポスターの10年
- 4月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
- 5月 130回 04 TDC展
- 6月 131回 ビエール・メンデル展
- 8月 132回 2004 ADC展
- 9月 133回 パンフルク・デザイン展 Friendly Fire
- 10月 134回 チェコのポスター展：プラハ美術工芸博物館コレクション1960-2003
- 11月 135回 バラリンジ・デザイン展

2005

- 1月 136回 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
- 2月 137回 シアン展 ベルリンでの13年
- 3月 138回 佐藤可士和展 BEYOND
- 4月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
- 5月 140回 05 TDC展
- 7月 141回 CCCP研究所展
- 8月 142回 2005 ADC展
- 9月 143回 青木克憲XX展
- 10月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
- 11月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

2006

- 1月 146回 スイスポスター100年展
- 2月 147回 グラフィック・ソート・ファシリテイ展
- 3月 148回 野田昶展
- 4月 149回 ブルーン・オルダー二展
- 5月 150回 06 TDC展
- 6月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
- 8月 152回 2006 ADC展

2007

- 5月 153回 EXHIBITIONS
- 7月 154回 07 TDC展
- 8月 155回 ヘルムート・シュミット：デザイン イズ アティチュード

- 10月 156回 2007 ADC展
- 11月 157回 キムラカツ展：問いボックス展

2008

- 1月 158回 Welcome to Magazine Pool：雑誌デザイン10人の越境者たち
- 2月 159回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ・オーサカ
- 4月 160回 中島信也CM展：中島信也と29人のアートディレクター
- 6月 161回 08 TDC展
- 8月 162回 Now Updating... THA / 中村勇吾のインタラクティブデザイン
- 9月 163回 2008 ADC展
- 10月 164回 Aoba Show：青葉益輝ファン・マン・ショー
- 11月 165回 真 and / or 善 杉崎真之助と高橋善丸のグラフィックデザイン

2009

- 1月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface ヘルベチカ展
- 3月 167回 きらめくデザイナーたちの競演—DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
- 4月 168回 DRAFT: Branding & Art Director
- 6月 169回 09 TDC展
- 8月 170回 2009 ADC展
- 10月 171回 矢萩喜徳展 [Magnetic Vision 新作60/100点]

2010

- 1月 172回 感じる箱展 grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証
- 3月 173回 北川一成
- 5月 174回 TDC展 2010
- 7月 175回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 II 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピン
- 9月 176回 2010 ADC展
- 11月 177回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 III 田中一光ポスター 1953-1979

2011

- 1月 178回 GRAPHIC WEST 3 phono/graph—音・文字・グラフィック—
- 3月 179回 秀英体100
- 5月 180回 TDC展 2011
- 7月 181回 服飾一成二千十一年夏大阪
- 9月 182回 2011 ADC展
- 11月 183回 100 ggg Books 100 Graphic Designers

2012

- 1月 184回 GRAPHIC WEST 4 「奥村昭夫と仕事」展
- 3月 185回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 IV 没後10周年記念企画 田中一光ポスター 1980-2002
- 5月 186回 TDC展 2012
- 7月 187回 立花文穂展
- 9月 188回 2012 ADC展
- 11月 189回 THE POSTERS 1983-2012 世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

2013

- 1月 190回 GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270
- 3月 191回 [デーデーデー] グルーヴィジョンズ展
- 5月 192回 TDC展 2013
- 7月 193回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 V LIFE 永井一正ポスター展

9月 194回 2013 ADC展
11月 195回 大宮エリー展

2014

1月 196回 GRAPHIC WEST 6
大阪新美術館建設準備室デザインコレクション
熱情と冷静のアヴァンギャルド

1995

4-7月 グラフィック・ビジョン：
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
8-10月 ロイ・リキテンスタイン：
エンタプラチュア→ヌード
11-1月 一瞬の刻印：ロバート・マゼウエル展

1996

3-4月 アメリカ版画の現在地点：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.1
4-7月 デイヴィッド・ホックニー展
7-10月 ジョセフ・アルバース展
10-1月 スタイルを越えて：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.2

1997

3-6月 ジェームズ・ローゼンクイスト展
6-9月 版画における抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.3
10-11月 大竹伸朗：Printing / Painting展
12-1月 線／色彩／イメージ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.4

1998

3-6月 フランク・ステラ／ケネス・タイラー
構築する版画：
アーティストとプリンター、30年の軌跡
5-9月 主張する黒：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.5
9-12月 形象としての紙：アラン・シールズ展

1999

3-5月 福田美蘭展
6-9月 かたる かたち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.6
9-12月 版画の話展

2000

3-6月 New Works 1998-1999：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.7
6-9月 太田三部：存在と日常
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：
ポスターグラフィックス 1950-2000

2001

3-5月 版画集への招待：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.8
5-7月 折元立身：1972-2000
8-10月 藤本由紀夫：四次元の読書
10-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：
グラフィックデザインの時代

2002

3-6月 空間に躍りでた版画たち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.9
6-9月 矢萩喜徳：視触、視弾、そして眼差しの記憶
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：
個性の時代

2003

3-4月 絵画－永遠の現在を求めて：
リチャード・ゴーマン展
4-6月 色彩としての紙：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.10
6-9月 ヘレン・フランケンサラー木版画展
9-12月 タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション 新収蔵作品展

2004

3-6月 イラストレーションの黄金時代
6-9月 パスワード：日本とデンマークの
アーティストによる対話
9-12月 版で発信する作家たち2004

2005

3-6月 アメリカ現代木版画の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.12
6-9月 Breathing Light：吉田重信
10-12月 decade－CCGAと6人の作家たち

2006

3-6月 版に描く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.13
6-9月 藤幡正樹：不完全さの克服
イメージとメディアによって創り出される、
新たな現実感。
9-12月 野田哲也：日記

2007

3-6月 凹版表現の魅力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.14
6-9月 再生する版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.15
9-12月 ユニーク・インプレッション：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.16

2008

3-6月 厚い色：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.17
6-9月 大きな版画、小さな版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.18
9-11月 黒のモノローグ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.19

2009

2-6月 作品と題名：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.20
6-9月 きらめくデザイナーたちの競演－
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
9-12月 赤のちから：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.21

2010

3-6月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953-1979

6-9月 ロイ・リキテンスタイン展：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.22
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

2011

6-9月 秀英体100
9-12月 幾何学的抽象の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.23

2012

3-6月 日本ポルトガル交流
版で発信する作家たち：after 3.11
6-9月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
9-12月 銅版の表現力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.24

2013

2月 特別展 第24回田善顕彰版画展
3-6月 THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
6-9月 現代版画とリトグラフ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.25
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅴ
LIFE 永井一正ポスター展

2014

2月 特別展 第25回田善顕彰版画展

- 1986**
- Mar. 1 Tadashi Ohashi Exhibition
Apr. 2 Shigeo Fukuda Exhibition
May 3 Yukimasa Okumura Exhibition
Jun. 4 Iku Akiyama Exhibition
Jul. 5 '86 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 6 Art Works Exhibition I
Sep. 7 Koichi Sato Exhibition
Oct. 8 Kiyoshi Awazu Exhibition
Nov. 9 Herbert Bayer Exhibition
Dec. 10 K2 Live! Exhibition
- 1987**
- Jan. 11 Shuhei Tsuji Iroha Exhibition
Feb. 12 Flower Expo + Expo Logo Exhibition
Mar. 13 Masaki Fujihata Exhibition
Apr. 14 Shin Matsunaga Exhibition
May 15 Mizumaru Anzai Exhibition
Jun. 16 Lou Dorfsman and CBS's Creative Works Exhibition
Jul. 17 '87 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 18 Art Works Exhibition II
Sep. 19 Takenobu Igarashi Exhibition
Oct. 20 Masuteru Aoba Exhibition
Nov. 21 Holger Matthies Exhibition
Dec. 22 Milton Glaser Exhibition
- 1988**
- Jan. 23 Katsu Kimura Exhibition
Feb. 24 Hiroki Taniguchi Exhibition
Mar. 25 Ginza Hyakuten Original Pictures for Cover Exhibition
Apr. 26 Katsu Yoshida Exhibition
May 27 AGI '88 Tokyo Exhibition
Jun. 28 Issey Miyake Poster Exhibition
Jul. 29 '88 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 30 Art Works Exhibition III
Sep. 31 Information Posters Recruit Exhibition
Oct. 32 Yoshio Hayakawa Exhibition
Nov. 33 Masayoshi Nakajo Exhibition
Dec. 34 Stasys Eidrigevičius Exhibition
- 1989**
- Jan. 35 Shopping Bag Design Exhibition
Feb. 36 Kijuro Yahagi Exhibition
Mar. 37 Texture Exhibition
Apr. 38 Noriyuki Tanaka Exhibition
May 39 Otl Aicher Exhibition
Jun. 40 Kazumi Kurigami Exhibition
Jul. 41 Shinichiro Wakao Exhibition
Aug. 42 Art Works Exhibition IV
Sep. 43 Kazumasa Nagai Exhibition
Oct. 44 Europalia '89 Japan 12 Artists' Original Poster Exhibition
Nov. 45 Charles Anderson Exhibition
Dec. 46 Etsushi Kiyohara Exhibition
- 1990**
- Jan. 47 Shigeru Akizuki Exhibition
Feb. 48 Nobuyoshi Kikuchi Exhibition
Mar. 49 Tsunao Harada Exhibition
Apr. 50 Ikko Tanaka Exhibition
May 51 Ryuichi Yamashiro Exhibition
Jun. 52 Keizo Matsui Exhibition
Jul. 53 Takayuki Terakado Exhibition
Aug. 54 Art Works Exhibition V
Sep. 55 Keiichi Tahara Exhibition
Oct. 56 Katsumi Asaba Exhibition
Nov. 57 Katsuya Ise Exhibition
- Dec. 58 Yasuhiro Yomogida Exhibition
- 1991**
- Jan. 59 Zenji Funabashi Exhibition
Feb. 60 Tetsuya Ohta Exhibition
Mar. 61 Per Arn oldi Exhibition
Apr. 62 Yasuhiro Sawada Exhibition
May 63 Sonoko Arai Exhibition
Jun. 64 Communication & Print Exhibition
Jul. 65 Nobuo Nakagaki Design Office Exhibition
Aug. 66 Art Works Exhibition
Oct. 67 Trans-Art '91 Exhibition
Dec. 68 '91 Tokyo ADC Exhibition
- 1992**
- Jan. 69 Ivan Chermayeff Exhibition
Feb. 70 Hajime Tachibana Exhibition
Mar. 71 The 4th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 72 Henryk Tomaszewski Exhibition
May 73 Seymour Chwast Exhibition
Jun. 74 Takashi Kanome Exhibition
Jul. 75 Makoto Nakamura Exhibition
Aug. 76 Rick Valicenti Exhibition
Sep. 77 Kaoru Kasai Exhibition
Oct. 78 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
Nov. 79 Paul Rand Exhibition
Dec. 80 Furoshiki Exhibition
- 1993**
- Jan. 81 Ryohei Kojima Exhibition
Feb. 82 Koichi Inakoshi Exhibition
Mar. 83 '92 Tokyo ADC Exhibition
Apr. 84 The 5th Tokyo TDC Exhibition
May 85 U.G. Sato Exhibition
Jun. 86 Hideo Mukai Exhibition
Jul. 87 Imagination of Letters Exhibition
Aug. 88 8 Designers in Today's Hong Kong
Sep. 89 Mitsuo Katsui Exhibition
Oct. 90 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
Nov. 91 Saul Bass Exhibition
Dec. 92 Pop-up Greetings Exhibition
- 1994**
- Jan. 93 Kiyoshi Awazu Exhibition
Feb. 94 The 6th Tokyo TDC Exhibition
Mar. 95 Takahisa Kamiyo Exhibition
Apr. 96 Toshihiro Katayama Exhibition
May 97 Kazumasa Nagai Exhibition
Jun. 98 Dutch Graphic Design A Century Exhibition
Jul. 99 '94 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 100 Graphic Goods Exhibition
Oct. 101 Koga Hirano Exhibition
Oct. 102 Kyushu 9 Designers Exhibition
Nov. 102 Yusaku Kamekura Exhibition
Dec. 103 Kenya Hara Exhibition
Dec. Toshiko Tsuchinashi, Sachiko Nakamura, Meg Hosoki Exhibition
- 1995**
- Jan. 104 Bruno Munari Exhibition
Feb. 105 Book Design in Japan 1946-95 Exhibition
- Mar. 106 The 7th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 107 Pieter Brattinga Exhibition
May 108 Ikko Tanaka Exhibition
Jun. 109 Niklaus Troxler Exhibition
Jul. 110 '95 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 111 Rhythm & Hues Computer Graphics
Sep. 112 Tamotsu Yagi Exhibition
Sep. Special: 20 Graphic Designers of the World, 10th Anniversary of ggg
Oct. 113 Transition of Modern Typography-1 Exhibition
Nov. 114 Masatoshi Toda Exhibition
Dec. 115 50 Years in Japanese Illustrations Exhibition
- 1996**
- Jan. 116 Yasuhiro Yomogida Exhibition
Feb. 117 Transition of Modern Typography-2 Exhibition
Mar. 118 Mar. 118 Posters by 23 Artists in São Paulo Exhibition
Apr. 119 The 8th Tokyo TDC Exhibition
May 120 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Jun. 121 Shigeo Katsuoka Exhibition
Jul. 122 '96 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 123 John Maeda Paper and Computers Exhibition
Sep. 124 K2-Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo Exhibition
Oct. 125 Czech Avant-Garde Book Design 1920s-'30s Exhibition
Nov. 126 Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki / Taku Satoh / Toshio Yamagata
Dec. 127 Alain Le Querrec Exhibition
- 1997**
- Jan. 128 Nisuke Shimotani Exhibition
Jan. Special: CCGA - The Prints of Josef Albers
Feb. 129 Tadashi Ohashi Exhibition
Mar. 130 The 10th of Tokyo TDC Exhibition
Apr. 131 Masayoshi Nakajo Exhibition
May 132 Magazines Today Exhibition
Jun. 133 Tadanori Yokoo's Poster Exhibition
Jul. 134 '97 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 135 Toshifumi Kawahara and Polygon Pictures Exhibition
Sep. 136 Mexican 10 Graphic Designers Exhibition
Oct. 137 Graphic Wave 1997: Kan Akita / Satoe Inoue / Osamu Fukushima
Oct. Special: The 10th Anniversary of Masaru Katsumi Award Exhibition
Nov. 138 Shigeo Fukuda Exhibition
Dec. 139 Global Exhibition
- 1998**
- Jan. 140 Bro Art & AD Exhibition
Feb. 141 Odermatt + Tissì Exhibition
Mar. 142 Stasys Eidrigevičius Exhibition
Apr. 143 Tokyo TDC '98 Exhibition
May 144 Studio Dumbart Exhibition
Jun. 145 Yoko Yamamoto Exhibition
Jul. 146 '98 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 147 Yoichiro Kawaguchi Exhibition
Sep. 148 Graphic Wave 1998: Tatsuo Ebina / Keiko Hirano / Ken Miki
Oct. 149 Gunter Rambow Exhibition
- Nov. 150 Philippe Apeloig Exhibition
Dec. 151 Herbert Leupin Exhibition
- 1999**
- Jan. 152 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World exhibition
Feb. 153 Transition of Modern Typography in Japan 1946-95 Exhibition
Mar. 154 Tsunehisa Kimura Exhibition
Mar. Special: The Works of Seichi Horiuchi
Apr. 155 Tokyo TDC '99 Exhibition
May 156 Contemporary Bulgarian Graphic Design Exhibition
Jun. 157 Katsuhiko Hibino Exhibition
Jul. 158 '99 Tokyo ADC Exhibition
Jul. Special: John Maeda One-line.com
Aug. 159 Kijuro Yahagi Exhibition
Sep. 160 Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki / Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
Oct. 161 Fuse Posters and Fonts Exhibition
Nov. 162 Keizo Matsui Exhibition
Dec. 163 Paul Davis Posters Exhibition
Dec. Special: Irving Penn regards the works of Issey Miyake
- 2000**
- Jan. 164 Graphic Message for Ecology Exhibition
Jan. Special: Kishin Shinoyama & Manuel Legris
Feb. 165 Bruno Monguzzi Exhibition
Mar. 166 Kenji Itoh Exhibition
Apr. 167 Tokyo Type Directors Club 2000
May 168 Poster Works Nagoya 12 Exhibition
Jun. 169 Osaka Pop Exhibition
Jul. 170 2000 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 171 The Epoch of the JAAC Exhibition
Sep. 172 Graphic Wave 2000: Gugi Akiyama / Tzooon Graphics / Hideki Nakajima
Oct. 173 Tzotm Toda Exhibition
Nov. 174 Pierre Bernard Exhibition
Dec. 175 The Book & The Computer Exhibition
- 2001**
- Jan. 176 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb. 177 Italo Lupi Exhibition
Mar. 178 Shin Matsunaga Exhibition
Apr. 179 Tokyo Type Directors Club 2001
May 180 Kontrapunkt Exhibition
Jun. 181 Typography of Hiromu Hara Exhibition
Jul. 182 2001 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 183 Tadahito Nadamoto Exhibition
Sep. 184 Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kozue Hibino
Oct. 185 Hangul Poster Exhibition
Nov. 186 Makoto Saito Exhibition
Dec. 187 Chip Kidd Exhibition
- 2002**
- Jan. 188 Uwe Loesch Exhibition
Feb. 189 Akira Uno Exhibition
Mar. 190 Design Education: Post-St.Joost's New Method
Apr. 191 Tokyo Type Directors Club 2002
May 192 Draft Exhibition
Jun. 193 Alan Chan Exhibition
Jun. Special: Yasuji Hanamori and Kurashi-no-Techo Exhibition
Jul. 194 2002 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 195 Noriyuki Tanaka Exhibition

Sep. 196 Graphic Wave 2002: Hitomi Sago / Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura
 Oct. 197 Sun-ad: The People Exhibition
 Nov. 198 Graphic Shows Brazil Exhibition
 Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition

2003

Jan. 200 Ikko Tanaka Exhibition
 Feb. 201 Sadik Karamustafa Exhibition
 Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic Design Exhibition
 Apr. 203 Tokyo Type Directors Club 2003
 May 204 Fabrica 1994-03 Exhibition
 Jun. 205 Hajime Sorayama Exhibition
 Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition
 Aug. 207 Minoru Nijijima Exhibition
 Sep. 208 Graphic Wave 2003: Kenjiro Sano / Nagi Noda / Kazunari Hattori
 Oct. 209 Takayuki Soeda Exhibition
 Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition
 Dec. 211 Takashi Kono Exhibition

2004

Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
 Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi / Hiro Sugiyama Exhibition
 Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap Exhibition
 Apr. 215 Tokyo Type Directors Club 2004
 May 216 Taku Satoh Exhibition
 Jun. 217 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
 Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition
 Aug. 219 The Work of Barnbrook Design Exhibition
 Sep. 220 Graphic Wave 2004: Aoshi Kudo / Graph / Namaiki
 Oct. 221 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
 Nov. 222 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
 Dec. 223 Another Side of Ayao Yamana Exhibition

2005

Jan. 224 The Seven Faces of Asaba Exhibition
 Feb. 225 Balarinji Design Exhibition
 Mar. 226 Katsunori Aoki XX Exhibition
 Apr. 227 Tokyo Type Directors Club 2005
 May 228 The Graphic Design of Makoto Wada
 Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc. Exhibition
 Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition
 Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory Exhibition
 Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida / Ichiro Higashiizumi / Chie Morimoto
 Oct. 233 Laboratoires CCCP Exhibition
 Nov. 234 Shin Sobue + Cozfish Exhibition
 Dec. 235 Swiss Poster Art Exhibition

2006

Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997 Exhibition
 Feb. 237 Nagi Noda Exhibition
 Mar. 238 Cyan Exhibition
 Apr. 239 Tokyo Type Directors Club 2006
 May 240 Kazufumi Nagai Exhibition
 Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism Exhibition
 Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition
 Aug. 243 Alexander Gelman Exhibition
 Sep. 244 Graphic Wave 2006: Masayoshi Kodaira/Naomi Hirabayashi/Manabu Mizuno/Eiji Yamada

Sep. Special: AGI Congress 2006 in Japan, Kakejiku Exhibition
 Oct. 245 Radical Advertisement Exhibition
 Nov. 246 Hideki Nakajima Exhibition
 Dec. 247 Yoshio Hayakawa Exhibition

2007

Jan. 248 Exhibitions (Part I)
 Feb. Exhibitions (Part II)
 Mar. 249 Katsu Kimura: Toi Boxes
 Apr. 250 Tokyo Type Directors Club 2007
 May 251 Helmut Schmid: Design is Attitude
 Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D 3D
 Jul. 253 2007 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006
 Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano
 Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
 Nov. 257 Welcome to Magazine Pool
 Dec. 258 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show

2008

Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda
 Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers of the Graphic Design Era: Interviews by Hiroshi Kashiwagi
 Mar. 261 Textasy: Brody Neuenschwander
 Apr. 262 Tokyo Type Directors Club 2008
 May 263 Alan Fletcher: The Father of British Graphic Design
 Jun. 264 Hiroshi Sasaki, Leader of a Cheering Squad for the Japanese Advertising World
 Jul. 265 2008 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 266 Now Updating... The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
 Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano: Origin, Terminus, Origin
 Oct. 268 White: Kenya Hara Exhibition
 Nov. 269 M/M(Paris) The Theatre Posters
 Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo: 10 Years of Fusion

2009

Jan. 271 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
 Feb. 272 Helvetica forever: Story of a typeface
 Mar. 273 Draft: Branding and Art Directors
 Apr. 274 Tokyo Type Directors Club 2009
 May 275 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works
 Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer
 Jul. 277 2009 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer
 Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show
 Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition
 Nov. 281 Issay Kitagawa
 Dec. 282 Kokoku Hihyo: End of One Era, Start of Another

2010

Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979
 Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping

Apr. 285 Tokyo Type Directors Club 2010
 May 286 Talking the Dragon: Tsuguya Inoue Exhibition
 Jun. 287 NB@ggg: Neville Brody 2010
 Jul. 288 2010 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 289 Ralph Schraivogel
 Sep. 290 Push Pin Paradigm:

Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan
 Oct. 291 Seas and Mountains and Norito Shinmura
 Nov. 292 Kazunari Hattori: November 2010
 Dec. 293 The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

2011

Jan. 294 Shueitai 100
 Feb. 295 Ian Anderson / The Designers Republic C(H)-ōme (+81/3)
 Mar. 296 Design I Fumio Tachibana
 Apr. 297 Tokyo Type Directors Club 2011
 May 298 Sato Koichi Poster Exhibition
 Jun. 299 Raymond Savignac; at the age of 41, maestro born from poster [Monsavon au lait]
 Jul. 300 2011 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 301 [gggg] Groovisions Exhibition
 Sep. 302 Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo
 Oct. 303 100 ggg Books 100 Graphic Designers
 Nov. 304 SVA MFA Design Ideopolis-Tokyo Exhibition
 Dec. 305 Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

2012

Jan.-Feb. 306 DNP Graphic Design Archives Collection IV The 10th Memorial to Ikko Tanaka Ikko Tanaka Posters 1980-2002
 Mar. 307 Rodchenko - Innovator of Russian Avant-Garde -
 Apr. 308 Tokyo Type Directors Club 2012
 May 309 KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe
 Jun. 310 Jianping He Flashback
 Jul. 311 2012 Tokyo Art Directors Club
 Aug. 312 THE POSTERS 1983-2012 -The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama-
 Sep. 313 Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project
 Oct. 314 AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition
 Nov. 315 Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition
 Dec. 316 Theseus Chan: WERK No. 20 GINZA THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

2013

Jan. 317 Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition
 Feb. 318 Kari Piippo Posters & Drawings - Simple, Strong and Sharp -
 Mar. 319 DNP Graphic Design Archives Collection V LIFE - Kazumasa Nagai Poster Exhibition
 Apr. 320 Tokyo Type Directors Club 2013
 May 321 KM Karel Martens
 Jun. 322 Why Not Associates - We Never Had a Plan So Nothing Could Go Wrong
 Jul. 323 2013 Tokyo Art Directors Club

Aug. 324 Ellie Omiya Exhibition
 Sep. 325 PARTY Not There. Exhibition
 Oct. 326 Rikako Nagashima Exhibition: "Between human and nature"
 Nov. 327 Jan Tschichold
 Dec. 328 Tomaszewski, The Poetic Spirit

2014

Jan. 329 Mitsuo Katsui Exhibition - Design of Symptom
 Feb. 330 "Putting Finger" Masahiko Sato + Tatsuya Saito
 Mar. 331 Osamu Fukushima and the Future of Design: Social Design & Poster



1992-2014

- 1992**
- Jan. 1 Trans-Art '91 Exhibition
 Mar. 2 Ivan Chermayeff Exhibition
 Apr. 3 The 4th Tokyo TDC Exhibition
 May 4 Rick Valicenti Exhibition
 Jun. 5 Seymour Chwast Exhibition
 Jul. 6 Design Print & Paper Exhibition
 Aug. 7 Vaughan Oliver Exhibition
 Oct. 8 Makoto Nakamura Exhibition
 Oct. 9 Michael Mabry Exhibition
 Nov. 10 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
- 1993**
- Jan. 11 Furoshiki Exhibition
 Feb. 12 Why Not Associates Exhibition
 Mar. 13 Allen Hori + Robert Nakata Exhibition
 Apr. 14 '92 Tokyo ADC Exhibition
 May 15 Russell Warren-Fisher Exhibition
 Jun. 16 The 5th Tokyo TDC Exhibition
 Jul. 17 Imagination of Letters Exhibition
 Aug. 18 Design, Prints, Paper Exhibition Part II
 Sep. 19 Bill Thorburn Exhibition
 Oct. 20 U.G. Sato Exhibition
 Nov. 21 Mitsuo Katsui Exhibition
 Dec. 22 8 Designers in Today's Hong Kong
- 1994**
- Jan. 23 Saul Bass Exhibition
 Feb. 24 Pop-up Greetings Exhibition
 Mar. 25 Ruedi Baur/Integral Concept Exhibition
 Apr. 26 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
 May 27 Jennifer Morla Exhibition
 Jun. 28 Kazumasa Nagai Exhibition
 Jul. 29 Uwe Loesch Exhibition
 Aug. 30 '94 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 31 Design, Print, Paper Exhibition Part III
 Oct. 32 David Carson + Gary Koepke Exhibition
 Dec. 33 Yusaku Kamekura Exhibition
- 1995**
- Jan. 34 German Montalvo Exhibition
 Feb. 35 Bruno Munari Exhibition
 Mar. 36 Grappa Design Exhibition
 Apr. 37 The 7th Tokyo TDC Exhibition
 May 38 Michel Bouvet Exhibition
 Jun. 39 Ikko Tanaka Exhibition
 Jul. 40 Terrelonge Exhibition
 Aug. 41 '95 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 42 Design, Print, Paper Exhibition IV
 Oct. 43 Peret Torrent Exhibition
 Nov. 44 6 Designers in Asia Exhibition
- 1996**
- Jan. 45 Illustration in Japan 1946-1995 Exhibition
 Feb. 46 Margo Chase Exhibition
 Mar. 47 Werner Jeker Exhibition
 Apr. 48 Gunter Rambow Exhibition
 May 49 The 8th Tokyo TDC Exhibition
 Jun. 50 Kari Piippo Exhibition
 Jul. 51 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
 Aug. 52 '96 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 53 John Maeda Paper and Computers Exhibition
- Oct. 54 Alain Le Querrec Exhibition
 Nov. 55 Woody Pirtle Exhibition
- 1997**
- Jan. 56 João Machado Exhibition
 Feb. 57 K2 Osaka Exhibition
 Mar. 58 Graphic Design in China Exhibition
 Apr. 59 '97 Tokyo TDC Exhibition
 May 60 Mexican 10 Graphic Designers
 Jul. 61 Cato Design Inc. Exhibition
 Aug. 62 '97 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 63 Ralph Schraivogel Exhibition
 Oct. 64 James Victore Exhibition
 Nov. 65 Global Exhibition
- 1998**
- Jan. 66 Faydherbe/De Vringer Exhibition
 Feb. 67 Jean-Benoît Lévy Exhibition
 Mar. 68 3 Dimensions of Russian Graphic Design Exhibition
 Apr. 69 Philippe Apeloig Exhibition
 Jun. 70 Tokyo TDC '98 Exhibition
 Jul. 71 Studio Dumber Exhibition
 Aug. 72 '98 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 73 Zafryki Exhibition
 Oct. 74 David Tartakover Exhibition
 Nov. 75 Taiwan 4 Exhibition
- 1999**
- Jan. 76 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World Exhibition
 Feb. 77 Pierre Neumann Exhibition
 Mar. 78 Paula Scher Exhibition
 May 79 Graphic Design from Hamburg Exhibition
 Jun. 80 Tokyo TDC '99 Exhibition
 Jul. 81 Jan Rajlich Jr. Exhibition
 Aug. 82 '99 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 83 Scott Makela Exhibition
 Oct. 84 Chaz Maviyane-Davies Exhibition
 Nov. 85 2 Men from Macau Exhibition Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros
- 2000**
- Jan. 86 Graphic Message for Ecology Exhibition
 Feb. 87 Keizo Matsui Exhibition
 Mar. 88 Paul Davis Posters Exhibition
 Apr. 89 Osaka Pop Exhibition
 May 90 Tokyo Type Directors Club 2000
 Jun. 91 Anthon Beeke Posters Exhibition
 Jul. 92 Pierre Bernard Exhibition
 Sep. 93 2000 Tokyo ADC Exhibition
 Oct. 94 Italo Lupi Exhibition
 Nov. 95 Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts
- 2001**
- Jan. 96 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
 Feb. 97 Kontrapunkt Exhibition
 Mar. 98 Poster of Salzburg Festival Exhibition
 May 99 Tokyo Type Directors Club 2001
 Jun. 100 Chip Kidd Exhibition
 Jul. 101 Hangul Poster Exhibition
 Aug. 102 2001 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 103 Wolfgang Weingart Exhibition
 Oct. 104 Shin Matsunaga Exhibition
 Nov. 105 Design Education II: Post-St. Joost's New Method
- 2002**
- Jan. 106 Tadahito Nadamoto Exhibition
 Feb. 107 Makoto Saito Exhibition
 Mar. 108 Ott + Stein Exhibition
 Apr. 109 Studio Tapiro Exhibition
 May 110 Tokyo Type Directors Club 2002
 Jul. 111 Posters from the Vienna Municipal Library Archive Exhibition
 Jul. 112 Ken Miki Exhibition
 Sep. 113 2002 Tokyo ADC Exhibition
 Oct. 114 Sadik Karamustafa Exhibition
 Nov. 115 Chinese Graphic Design Exhibition
- 2003**
- Jan. 116 San-ad: The People Exhibition
 Feb. 117 Ikko Tanaka Exhibition
 Mar. 118 Fabrica 1994-03 Exhibition
 Apr. 119 Kan Tai-Keung and Freeman Lau Exhibition
 Jun. 120 Tokyo Type Directors Club 2003
 Jul. 121 Luba Lukova Exhibition
 Aug. 122 2003 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 123 Stefan Sagmeister Exhibition
 Oct. 124 Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammlung München Exhibition
 Nov. 125 Hajime Sorayama Exhibition
- 2004**
- Jan. 126 Takayuki Soeda Exhibition
 Feb. 127 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
 Mar. 128 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
 Apr. 129 The Magazine Design Studio CAP Exhibition
 May 130 Tokyo Type Directors Club 2004
 Jun. 131 Pierre Mendell Exhibition
 Aug. 132 2004 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 133 The Work of Barnbrook Design Exhibition
 Oct. 134 Posters from the Museum of Decorative Arts in Prague Exhibition
 Nov. 135 Balarinji Design Exhibition
- 2005**
- Jun. 136 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
 Feb. 137 Cyan Exhibition 13 Years in Berlin
 Mar. 138 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
 Apr. 139 Mevis & Van Deursen Exhibition
 May 140 Tokyo Type Directors Club 2005
 Jun. 141 Laboratoires CCCP Exhibition
 Aug. 142 2005 Tokyo ADC Exhibition
 Sep. 143 Katsunori Aoki XX Exhibition
 Oct. 144 German AGI Graphic Design Exhibition
 Nov. 145 The Graphic Design of Makoto Wada
- 2006**
- Jan. 146 Swiss Poster Art Exhibition
 Feb. 147 Graphic Thought Facility Exhibition
 Mar. 148 Nagi Noda Exhibition
 Apr. 149 Bruno Oldani Exhibition
 May 150 Tokyo Type Directors Club 2006
 Jun. 151 Black and White Posters Exhibition
 Aug. 152 2006 Tokyo ADC Exhibition
- 2007**
- May 153 Exhibitions
- Jun. 154 Tokyo Type Directors Club 2007
 Aug. 155 Helmut Schmid: Design is Attitude
 Oct. 156 2007 Tokyo Art Directors Club
 Nov. 157 Katsu Kimura: Toi Boxes
- 2008**
- Jan. 158 Welcome to Magazine Pool
 Feb. 159 Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano
 Apr. 160 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
 Jun. 161 Tokyo Type Directors Club 2008
 Aug. 162 Now Updating... The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
 Sep. 163 2008 Tokyo Art Directors Club
 Oct. 164 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
 Nov. 165 Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi
- 2009**
- Jan. 166 Helvetica forever: Story of a Typeface
 Mar. 167 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
 Apr. 168 Draft: Branding and Art Directors
 Jun. 169 Tokyo Type Directors Club 2009
 Aug. 170 2009 Tokyo Art Directors Club
 Oct. 171 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works
- 2010**
- Jan. 172 Graphic West 2: Sensory Boxes
 Mar. 173 Issay Kitagawa
 May 174 Tokyo Type Directors Club 2010
 Jul. 175 DNP Graphic Design Archives Collection III Shigeo Fukuda's Visual Jumping
 Sep. 176 2010 Tokyo Art Directors Club
 Nov. 177 DNP Graphic Design Archives Collection II Ikko Tanaka Posters 1953-1979
- 2011**
- Jan. 178 GRAPHIC WEST 3 phono/graph-sound-letters-graphics-
 Mar. 179 Shueitai 100
 May 180 Tokyo Type Directors Club 2011
 Jul. 181 Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka
 Sep. 182 2011 Tokyo Art Directors Club
 Nov. 183 100 ggg Books 100 Graphic Designers
- 2012**
- Jan. 184 GRAPHIC WEST 4 "Okumura Akio and Works" Exhibition
 Mar. 185 DNP Graphic Design Archives Collection IV The 10th Memorial to Ikko Tanaka Ikko Tanaka Posters 1980-2002
 May 186 Tokyo Type Directors Club 2012
 Jul. 187 Fumio Tachibana Exhibition
 Sep. 188 2012 Tokyo Art Directors Club
 Nov. 189 THE POSTERS 1983-2012 -The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama-
- 2013**
- Jan. 190 GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270
 Mar. 191 groovisions Exhibition: "dddg"
 May 192 Tokyo Type Directors Club 2013

Jul. 193 DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Sep. 194 2013 Tokyo Art Directors Club
Nov. 195 Ellie Omiya Exhibition

2014

Jan. 196 GRAPHIC WEST 6
Osaka City Museum of Modern Art Collection
Modern Avant-Garde Graphics

1995

Apr.-Jul. Graphic Vision Kenneth Tyler
Retrospective Exhibition: Thirty Years
of Contemporary American Prints
Aug.-Oct. Lichtenstein: Entablature→Nudes
Nov.-Jan. The Prints of Robert Motherwell

1996

Mar.-Apr. American Prints Today:
1st Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Apr.-Jul. The Prints of David Hockney
Jul.-Oct. Autonomous Color: Josef Albers
Oct.-Jan. Transcending Style:
2nd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

1997

Mar.-Jun. The Graphics of James Rosenquist
Jun.-Sep. Printed Abstraction:
3rd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Oct.-Nov. Shinro Ohtake: Printing / Painting
Dec.-Jan. Line-Color-Image:
4th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

1998

Mar.-May Frank Stella and Kenneth Tyler:
A Unique 30-Year Collaboration
May-Sep. Statements in Black:
5th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Alan Shields: Images in Paper

1999

Mar.-May Miran Fukuda New Works: Prints
Jun.-Sep. Forms That Speak:
6th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. The Story of Prints

2000

Mar.-May New Works 1998-1999:
7th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Saburo Ota: Existence and Everyday
Sep.-Dec. DNP Archives of Graphic Design
Inaugural Exhibition:
Poster Graphics 1950-2000

2001

Mar.-May Invitation to Print Portfolios:
8th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Tatsumi Orimoto: 1972-2000
Aug.-Oct. Yukio Fujimoto:
Reading to Another Dimension
Oct.-Dec. 2nd Exhibition of DNP Archives of
Graphic Design: The Era of Graphic Design

2002

Mar.-Jun. Prints Leaping Into Space:
9th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and
Tracing with Vision
Sep.-Dec. 3rd Exhibition of DNP Archives of
Graphic Design: The Age of Individuality

2003

Mar.-Apr. Richard Gorman:
Paintings and Paper Works
Apr.-Jun. Paper as Color:
10th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Frankenthaler: The Woodcuts
Sep.-Dec. 11th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2004

Mar.-Jun. The Golden Age of Illustration
Jun.-Sep. Password:
A Danish / Japanese Dialogue
Sep.-Dec. Print Art of Today in Fukushima

2005

Mar.-Jun. The World of Contemporary American
Woodcuts:
12th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Breathing Light: Shigenobu Yoshida
Oct.-Dec. decade – CCGA and Six artists

2006

Mar.-Jun. Painting on Stone:
13th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Masaki Fujihata:
The Conquest of Imperfection-
New Realities Created with
Images and Media
Sep.-Dec. Tetsuya Noda: Diary

2007

Mar.-Jun. The Wonder of Intaglio:
14th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Prints Given New Life:
15th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Unique Impressions:
16th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2008

Mar.-Jun. Thick with Color:
17th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Big Prints, Small Prints:
18th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Nov. Monologues in Black:
19th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2009

Feb.-Jun. Prints and Titles:
20th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Brilliant Rivalry:
Works by Outstanding Designers in
the DNP Archives of Graphic Design
Sep.-Dec. The Power of Red:
21st Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2010

Mar.-Jun. DNP Graphic Design Archives Collection II
Ikko Tanaka Posters 1953-1979
Jun.-Sep. Roy Lichtenstein:
22nd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. DNP Graphic Design Archives Collection III
Shigeo Fukuda's Visual Jumping

2011

Jun.-Sep. Shueitai 100
Sep.-Dec. The World of Geometric Abstraction:
23rd Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2012

Mar.-Jun. The Artists Who Express through Prints:
after 3.11
Jun.-Sep. DNP Graphic Design Archives Collection IV
The 10th Memorial to Ikko Tanaka
Ikko Tanaka Posters 1980-2002
Sep.-Dec. The Expressive Appeal of Copperplate Prints:
24th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection

2013

Feb. The 24th Denzen Print Award Exhibition
Mar.-Jun. THE POSTERS 1983-2012
–The Prize-Winning Works from
The International Poster Triennial in Toyama–
Jun.-Sep. Lithographs As Contemporary Prints:
25th Exhibition of Prints from
the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

2014

Feb. The 25th Denzen Print Award Exhibition

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開設 1986年3月4日
名称 ギンザ・グラフィック・ギャラリー (略称/ggg)
所在地 〒104-0061
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル
Phone:03-3571-5206
Fax:03-3289-1389
開館時間 午前11時～午後7時(土曜午後6時まで)
休館 日曜日、祝日
監修 永井一正

ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986
Name: ginza graphic gallery (ggg)
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 3571 5206
Fax: +81 3 3289 1389
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

dddギャラリー

開設 1991年11月5日
名称 dddギャラリー
所在地 〒550-8508
大阪府大阪市西区南堀江1丁目17-28 なんぼSSビル
Phone:06-6110-4635
Fax:06-6110-4639
開館時間 午前11時～午後7時(土曜午後6時まで)
休館 日曜日、月曜日、祝日
監修 永井一正

ddd gallery

Establishment: November 5, 1991
Name: ddd gallery
Location: Namba SS Building, 17-28 Minami-horie 1-chome,
Nishi-ku, Osaka 550-8508
Phone: +81 6 6110 4635
Fax: +81 6 6110 4639
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays, Mondays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

CCGA 現代グラフィックアートセンター

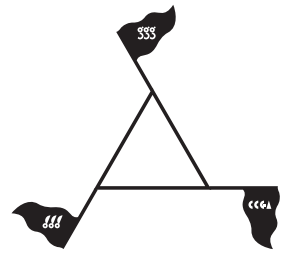
開設 1995年4月20日
名称 CCGA 現代グラフィックアートセンター
所在地 〒962-0711
福島県須賀川市塩田宮田1
Phone:0248-79-4811
Fax:0248-79-4816
開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時45分まで)
休館 月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)、
祝日の翌日(土・日にあたる場合は開館)、
展示替え期間中、冬期(12月下旬～2月末)
入場料 一般=300円、学生=200円、
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料。
サロン
利用料 200円

Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,
Fukushima 962-0711
Phone: +81 248 79 4811
Fax: +81 248 79 4816
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),
between exhibitions and during winter (late December through February)
Admission: Adults=¥300, Students=¥200,
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.
Salon Utilization Fee: ¥200

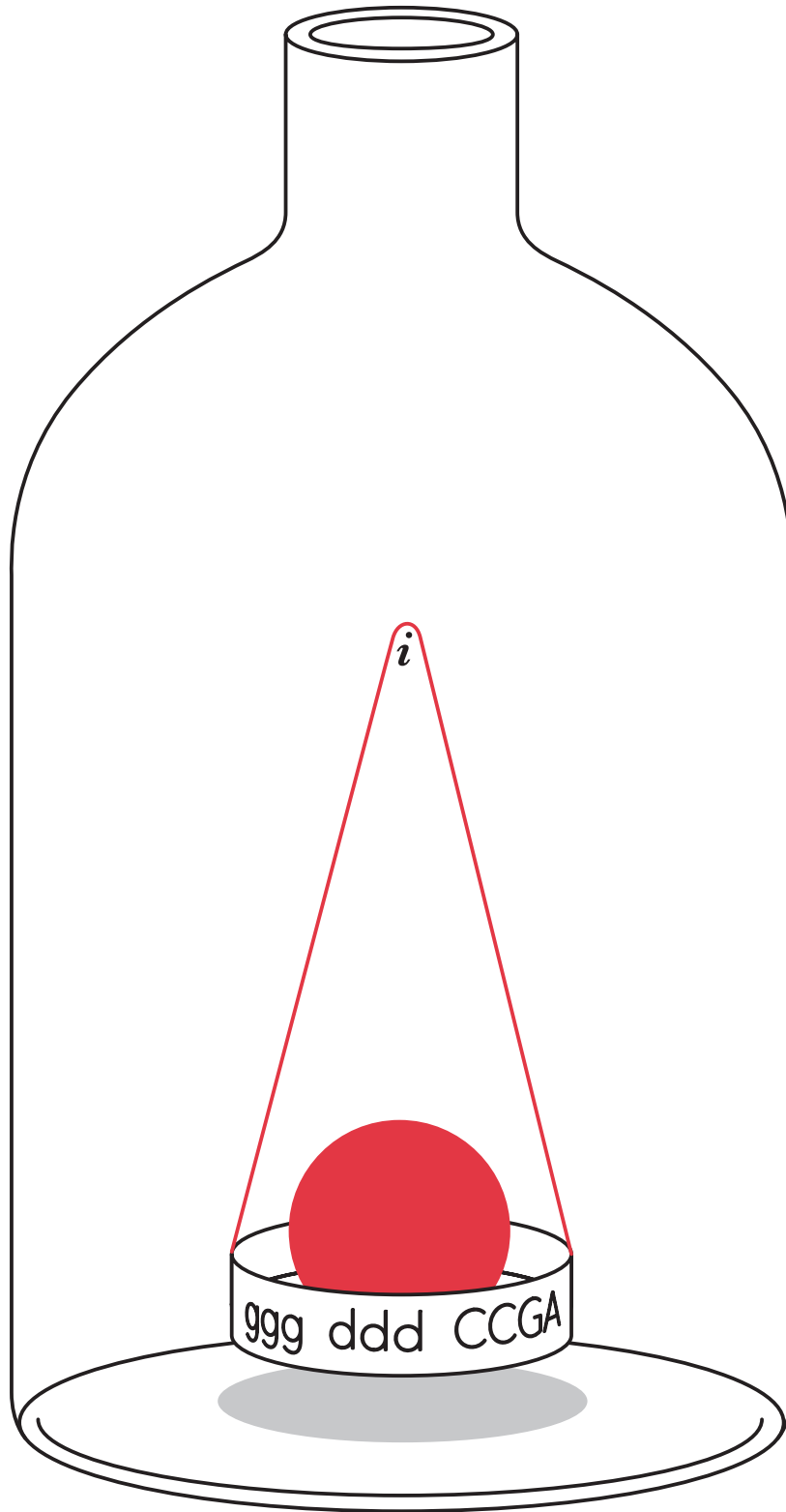
企画・運営 公益財団法人DNP文化振興財団
<http://www.dnp.co.jp/foundation>

Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion
<http://www.dnp.co.jp/foundation>



Graphic Art & Design Annual 13-14 ggg ddd CCGA

発行	公益財団法人DNP文化振興財団 〒104-0061 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Phone: 03-5568-8224
企画・編集	公益財団法人DNP文化振興財団
アートディレクション	松永 真
デザイン	松永 真次郎、石田 心子
撮影	藤塚 光政 (ggg会場写真) 堺 亮太、高島 未希、森 浩司 (gggギャラリートーク)
翻訳	室生寺 玲
協力	臼田 捷治、河尻 亨一
印刷・製本	大日本印刷株式会社



公益財団法人DNP文化振興財団
DNP Foundation for Cultural Promotion



*i*の上に人差し指を置いてください。
Put your index finger on *i*